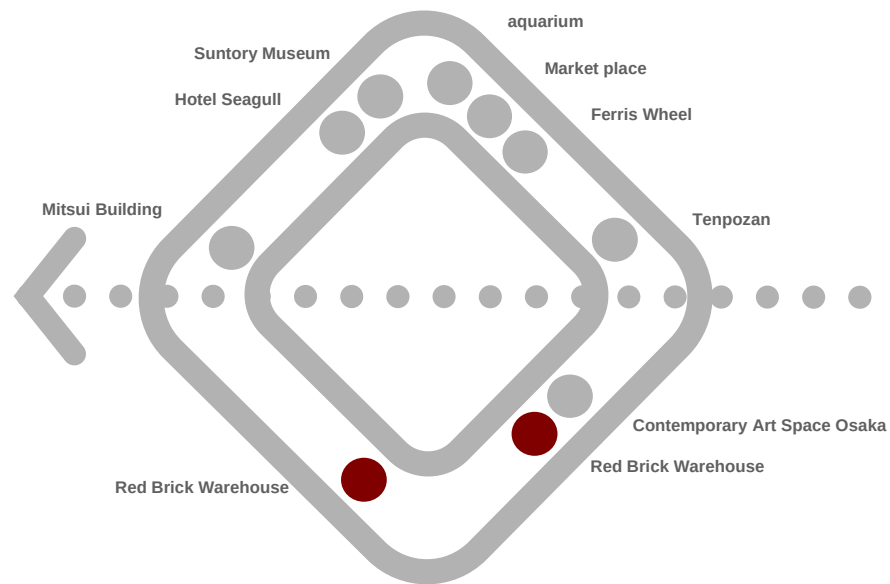




A Proposal for Red Brick Warehouse District in Chikko

2007.3.16



企画検討	 1
構造検討	 10
設計提案	 18
A案 (Museum)	 18
B案 (School)	 38
C案 (Residence & School)	 49
D案 (Theater)	 70
E案 (Museum)	 78
F案 (School)	 83
補足資料・追加参考	 84

CONTENTS INDEX



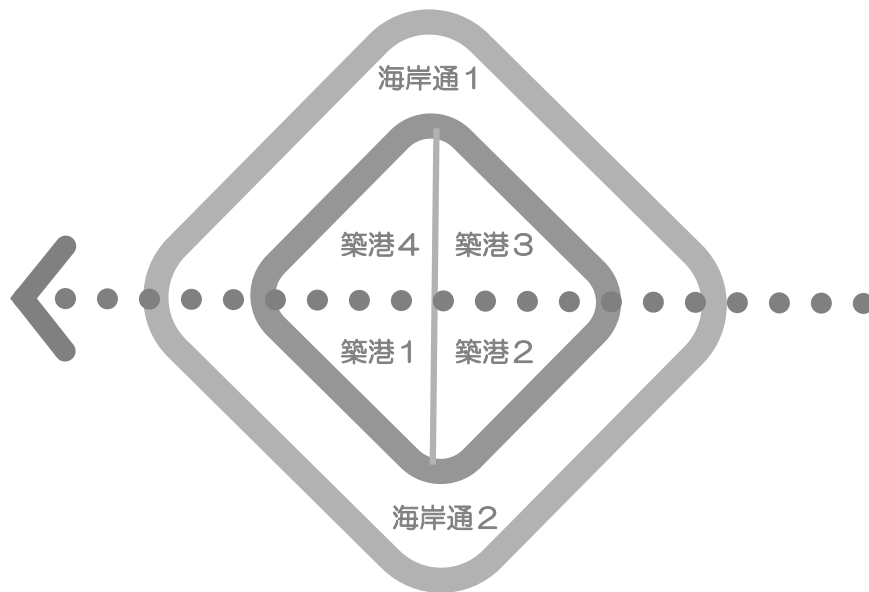
1

企画検討

Red Brick Warehouse District

＜海岸通1＞

海遊館をはじめ多くの文化・商業施設が集積する地区である。常住人口はほとんど無く、昼間人口、就業者数は減少しており、H9年からH14にかけての商業事業所数、商品販売額が減少傾向にある。一方隣接する築港4丁目はともに増加していることから何らかの移動があるものと考えられる。



＜築港1，2＞

住宅が中心の地区で、その内築港2丁目には文教施設、1丁目は小規模の商業施設と住宅が点在しているが、いずれも減少傾向にある。

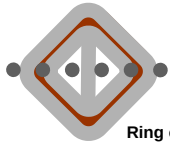
＜海岸通2＞

倉庫業が中心のエリアであるが、大型コンテナ船による輸送の増加に伴い、その意義を失いつつある。この地区には2箇所のレンガ倉庫があり、東側は現在大阪市に移譲されている。商業事業所、人口ともにほとんど無い。



＜築港3，4＞

築港3丁目は人口、世帯数ともに最も多い地区であるが、やや減少傾向にある。一方、築港4丁目は人口がやや少なく、商業事業所数、商業従事者数、商品販売額が増加傾向にある。



Ring of ARTNFRASTRUCTURE

■計画エリアの資質

- 1、明治期以降の歴史的建造物、史跡が多数存在する。
- 2、大阪中心市街地から公共交通機関によって直結されている。
- 3、海遊館、サントリーミュージアムなどの文化施設があり、既に多くの集客を得ている。
- 4、旧大阪外港としての独特の文化、雰囲気を残している
- 5、海上ルートにより対岸にあるユニバーサルスタジオヘアクセスが可能
- 6、CASOが開館し芸術文化の発信拠点としての萌芽性が見られる。
- 7、レンガ倉庫では、これまでに様々な市民団体による企画がなされている。

■行政ニーズ

- 1、都市再生による経済の活性化
- 2、歴史的文化的資産の保全活用
- 3、新しい産業構造基盤の構築
- 4、豊かな生活を保障する市民ニーズの実現
- 5、ブラウンフィールドの有効活用

■計画エリアの現状と課題

- 1、大阪経済の停滞
- 2、海運業態の変化と旧港湾、倉庫エリアの不振
- 3、産業構造の変化に対応した都市整備が未整備
- 4、防災安全対策、既存施設の耐震補強、護岸整備の遅れ
- 5、行政財源、資金の不足
- 6、新港湾整備における築港地区の位置付けが不明確

■民間ニーズ

- 1、収益を持続的に確保できる事業計画
- 2、企業イメージの向上に寄与できる事業
- 3、新しいビジネスモデルを構築するための規制緩和
- 4、先進的なインフラストラクチャの充実
- 5、情報の受信発信が容易にできる立地

■開発方針

文化・芸術をビジネスとして成立させる基盤整備 「ARTNFRASTRUCTURE」

- 1、集客力を向上維持させる仕組みづくり
- 2、付加価値を定着させる戦略立案
- 3、海外と国内のノードとなるための施策
- 4、コマーシャルエンジニアリング
- 5、市民民間草の根的活動の利用
- 6、行政と民間との良好なパートナーシップ
- 7、地域住民への還元方策



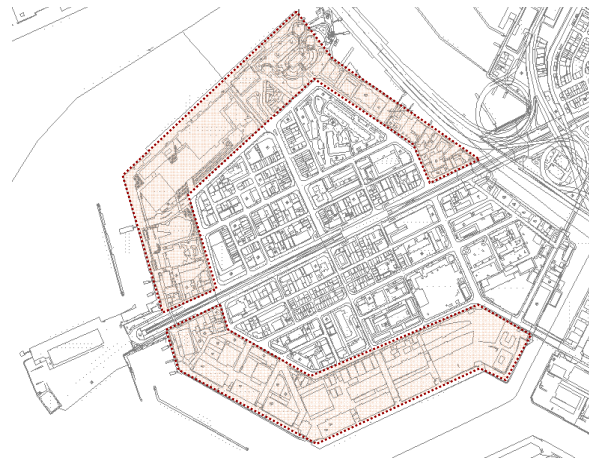
＜赤レンガ倉庫の位置づけ＞

築港北側の海岸通1丁目地区には海遊館をはじめとする大型の文化施設、商業施設が開発されており、多くの集客があるが、南側の海岸通2丁目の地区は、CASOが開館しているものの、以前からの倉庫群が残っており、人影もあまり見られない。

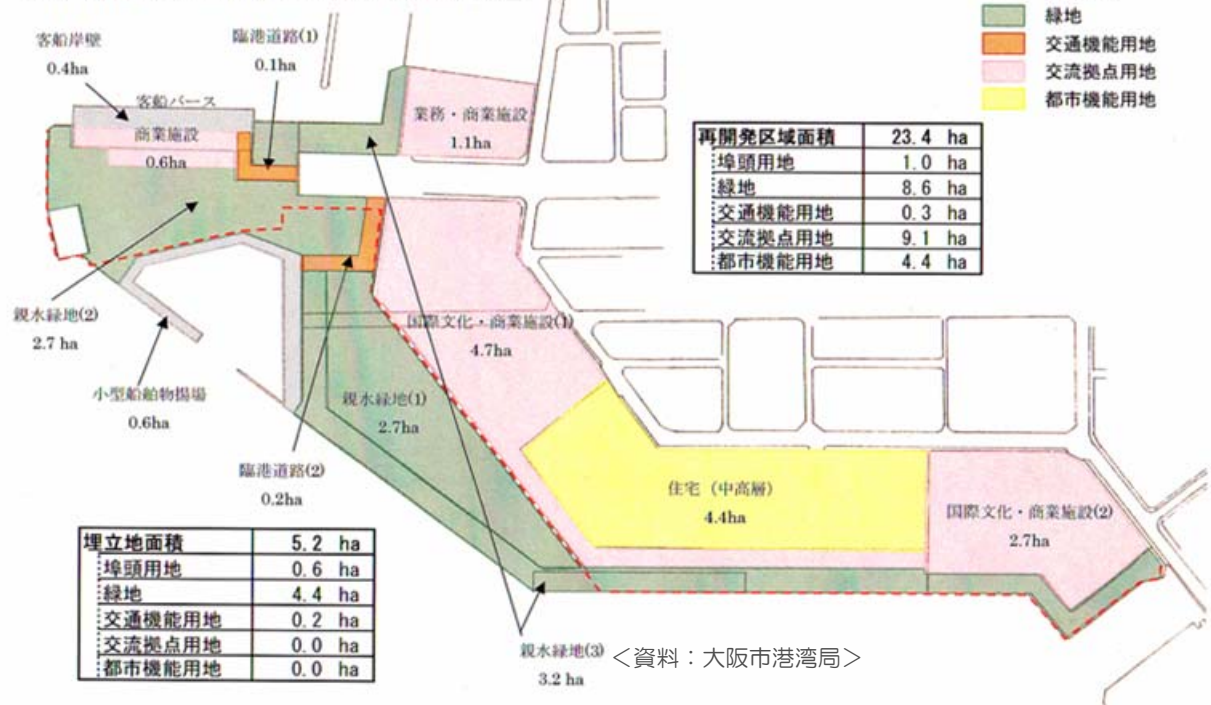
ここでは海岸通2丁目地区に残る2箇所の赤レンガ倉庫を再生・活用することで、北側の海岸通1丁目地区から人の流れを作り、築港全体の活性化を促すことを目的に、まずは東側の赤レンガ倉庫の活用に焦点をあてて検討を行う。



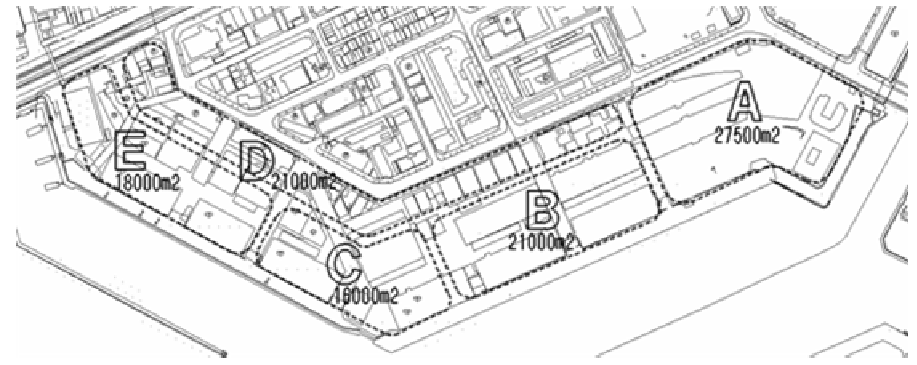
South Development



築港再開発 長期計画変更案（土地利用図）

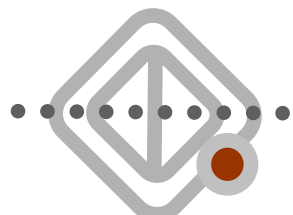


A: 文化・芸術ゾーン
B: 商業ゾーン
C: 住宅ゾーン
D: 業務・NPOゾーン
E: 緑地、公園

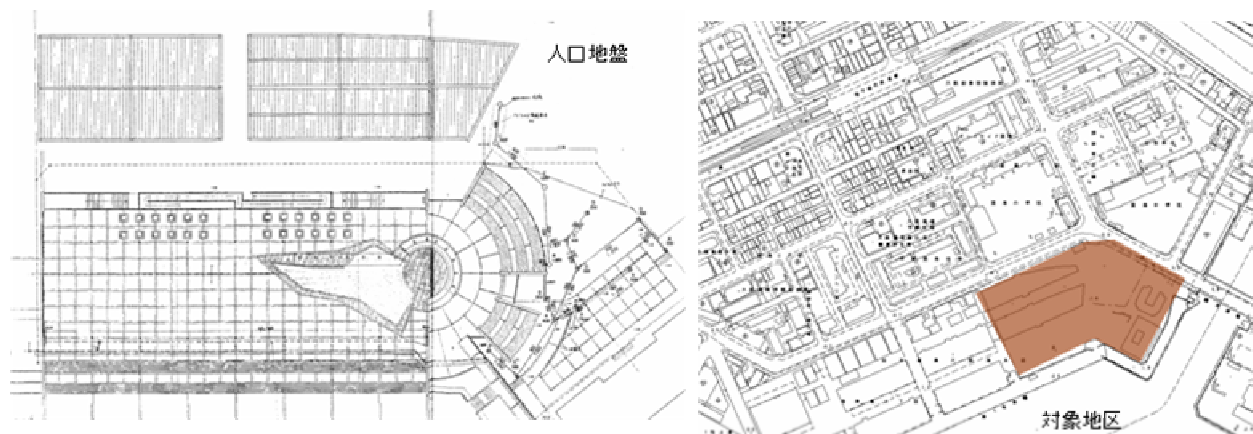


A: 文化・芸術ゾーン
B: エクステンション
C: 商業ゾーン
D: 緑地、駐車場
E: 商業ゾーン

ゾーニング



Red Brick Warehouse District



<概要>

・200号倉庫

構造 純レンガ組構造 2F

延床面積：4526m²建築面積：2263m²

高さ：15m

・300号倉庫

構造 純レンガ組構造 2F

延床面積：5309m²建築面積：2655m²

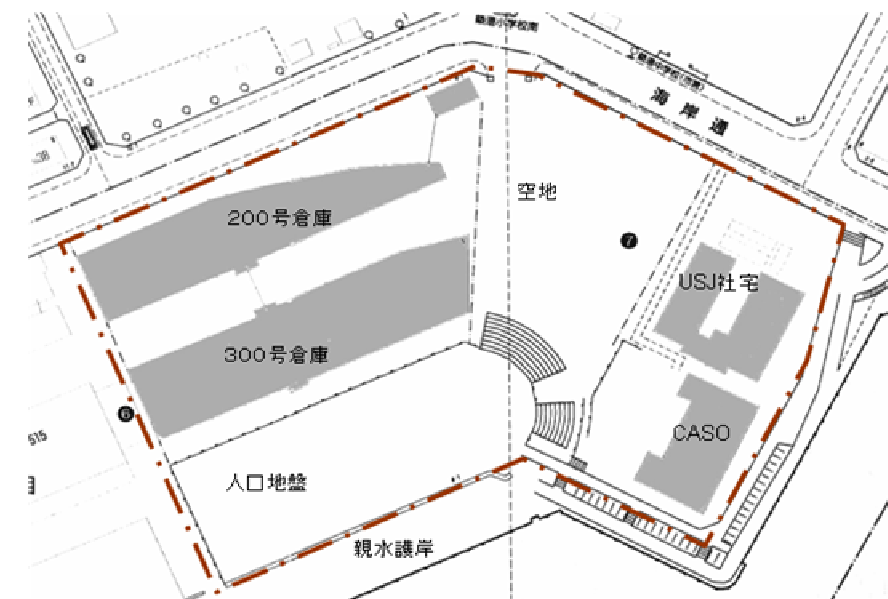
高さ：15.6m

・CASO

構造 鉄骨造 2F

延床面積：1471m²建築面積：1397m²

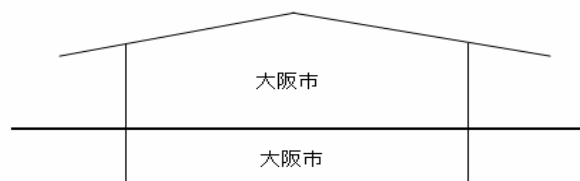
高さ：6.8m



＜整備運営手法＞

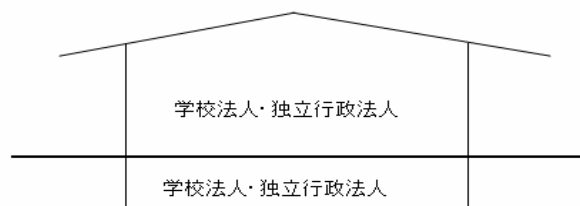
整備内容	民間主体整備案			公共主体整備案		
	整備手法	隣地ゾーンとの連携	他事例・テナント事例	整備手法	隣地ゾーンとの連携	他事例・テナント事例
専門学校 大学	移転希望学校法人への土地建物・譲渡 ＜手続＞ ①移転希望学校法人の抽出 ②コンペによる事業者の選定	＜1ケース＞ 大学の場合、全体を文教地区として整備することも可能 ＜2ケース＞ 専門学校の授業内容と連携した商業施設整備	・神戸ポートアイランド（神戸学院大、神戸夙川学院大、神戸医療大） ・モード学園（大阪西梅田、名古屋）	国公立大学・教育関係施設の誘致（PFI方式での整備も要検討）		・京都大学桂キャンパス ・大阪府立大学移転計画
劇場	利用希望企業への賃貸（暫定利用も含む） ＜課題＞ ・利用主体の確保 ・土地建物所有者の設定 －大阪市、大阪WF開発（株）、隣地デベなどが候補 ・暫定利用期間、低価格利用料金の設定	・観光商業施設や話題性のあるレストラン、都市型レジャー施設の展開 ・シネマコンプレックス、ハウスウェディングやスパなどの目的性の高い集客収益施設の整備 ・分譲住宅による収益の確保と居住人口の確保	＜劇場＞ ・四季劇場（大阪梅田、東京新橋） ・本多劇場（東京下北沢） ・ZEPP ＜観光商業＞ ・ハーバーランドモザイク ・横浜ペイクォーター	PFI方式による整備運営 －計画地単独ではなく隣地の民間収益施設を含めた合築方式でのPFIコンペの実施 ＜課題＞ ・公共として整備すべき基本方針・要求水準の設定 ・民間収益施設事業の範囲の設定		・いわき市文化交流施設 ・杉並公会堂改築
ミュージアム	利用希望企業への賃貸（暫定利用も含む） ＜課題＞ ・スポンサー企業の確保（フィルムコミッションの場合、企業PRとしての利用） ・土地建物所有者の設定 －大阪市、大阪WF開発（株）、隣地デベなどが候補 ・暫定利用期間、低価格利用料金の設定	・ミュージアムショップや話題性のあるレストランの展開 ・シネマコンプレックス、ハウスウェディングやスパなどの目的性の高い集客収益施設の整備 ・分譲住宅による収益の確保と居住人口の確保	＜ミュージアム＞ ・洲本（アルファピア） ・アメニティ江坂スクール ・チュール美術館 ＜観光商業＞ ・ハーバーランドモザイク ・横浜ペイクォーター	PFI方式による整備運営 －計画地単独ではなく隣地の民間収益施設を含めた合築方式でのPFIコンペの実施 ＜課題＞ ・公共として整備すべき基本方針・要求水準の設定 ・民間収益施設事業の範囲の設定		・神奈川県立近代美術館 ・山梨県新たな学習拠点整備 ・大阪市立近代美術館の移転

＜現 況＞



土地所有者	建物所有者	賃貸者（テナント）	運営者
大阪市	大阪市	-	-

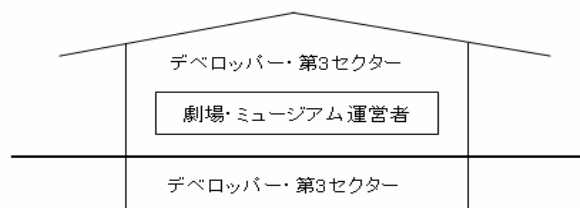
＜専門学校・大学の場合＞



土地所有者	建物所有者	賃貸者（テナント）	運営者
学校法人等	学校法人等	-	学校法人等

- ・学校法人の場合、校舎などの資産を所有する必要がある。（規制緩和の動きあり）
- ・PFIの場合、BTO方式（もしくはROT方式）での整備が考えられる。

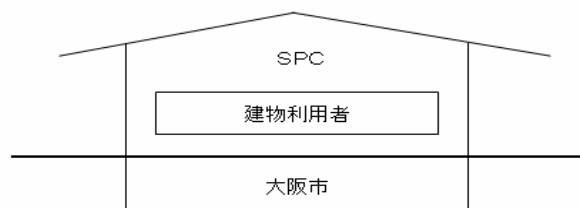
＜劇場・ミュージアムの場合＞



土地所有者	建物所有者	賃貸者（テナント）	運営者
デベ・第3セクター	デベ・第3セクター	劇場・ミュージアム運営者	劇場・ミュージアム運営者

- ・劇場やミュージアムは収益が見込めないで、賃貸借ではなく使用貸借になる場合がある。その場合は暫定的な利用（5～10年）となる。
- ・スポンサー企業が見つかれば、土地建物の所有する場合も考えられる。
- ・デベロッパーが資産を持つ場合、劇場やミュージアムは低収益なので隣地の分譲住宅や商業施設開発で収益を賄う必要がある

＜PFI（BOT）の場合＞



土地所有者	建物所有者	賃貸者（テナント）	運営者
大阪市	SPC	建物利用者	SPC

- ・BOT（もしくはROT）の場合は、建物はSPCの所有となる。BTOでは、大阪市の所有となる。
- ・SPCは隣地の分譲住宅や商業施設開発で収益を賄う必要がある。



2

構造検討



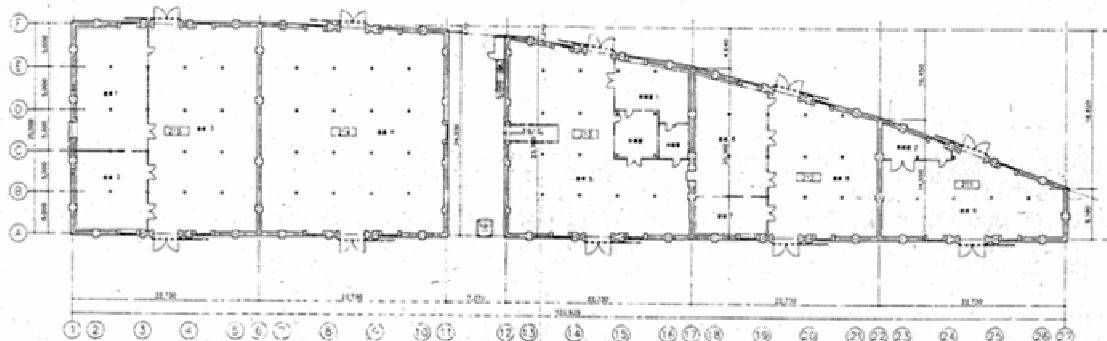
200号倉庫



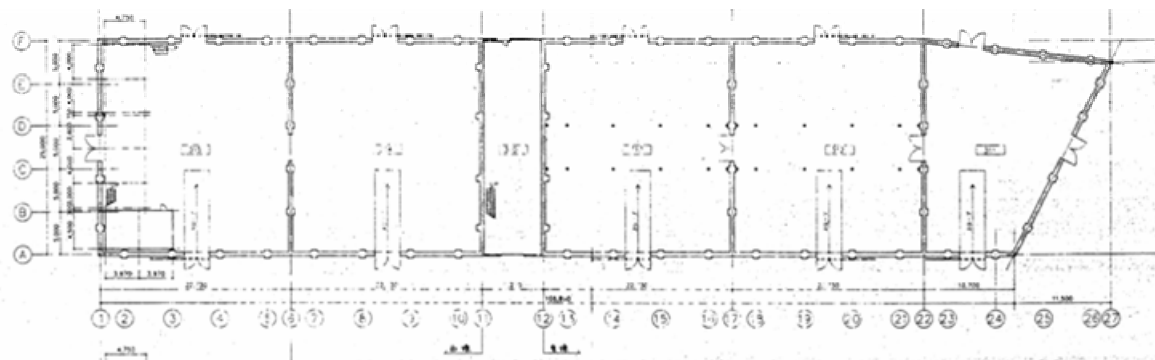
300号倉庫



200号倉庫



300号倉庫



＜形状＞

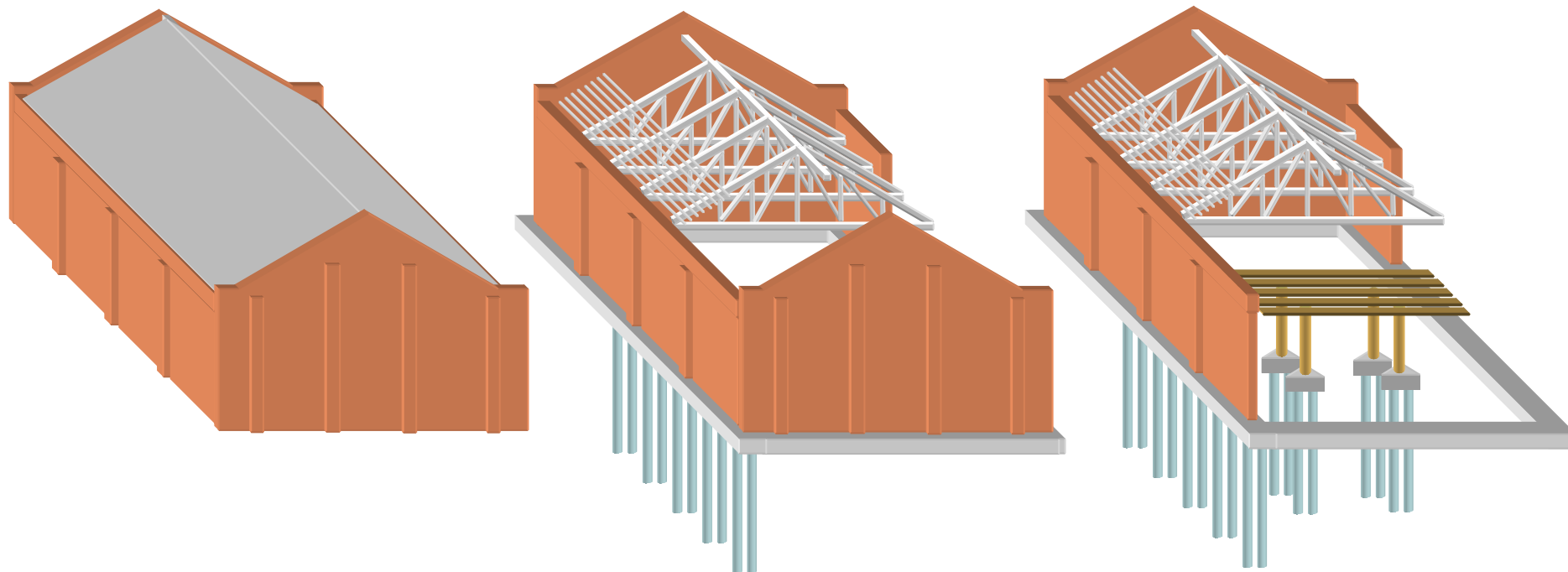
純レンガ組積造で、壁面にウォールガーター状の突起がデザインとしてもリズム感を出している。現状の躯体を入念に調査した上で耐震性能を評価する必要がある。少なくとも用途変更を伴うリノベーションを行うにあたり、現行法で規定される耐震性能と同等と判断できる根拠が必要。

＜小屋組み＞

鉄骨トラスであるが、劣化診断をした上で使用するならば、耐火被覆塗装が必要になる。また不特定多数の来場者を集客する施設への改造に当たっては、現行法の防災性能を有することが求められる。

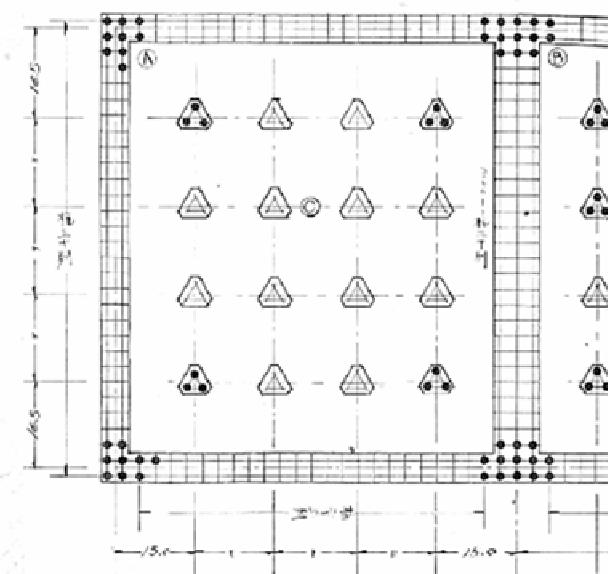
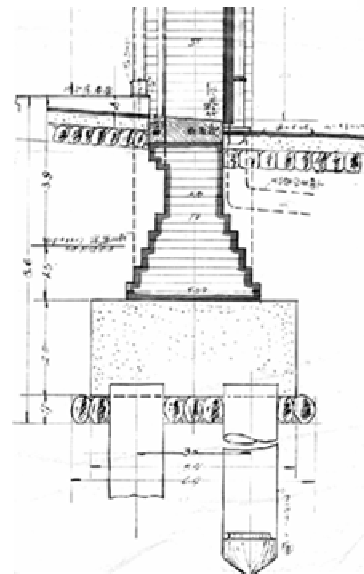
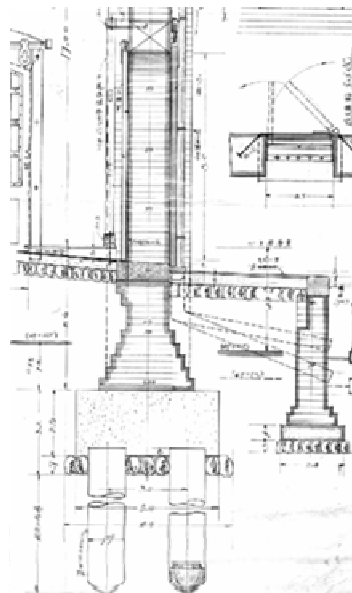
＜基礎構造＞

杭、基礎はRCのようであるが、埋立地であることから、現在の基礎の状況を判断する必要がある。昭和初期の地盤沈下において部分的な浮動同沈下が見られなかったかを確認することも必要であろう。

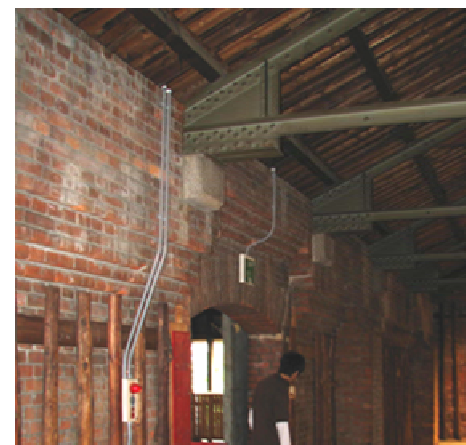
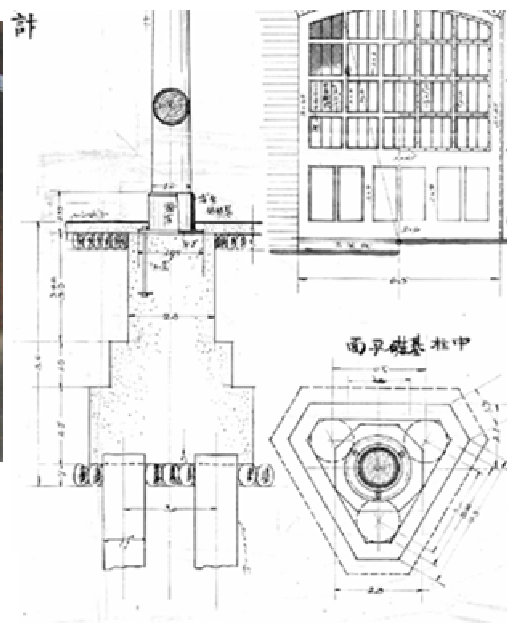




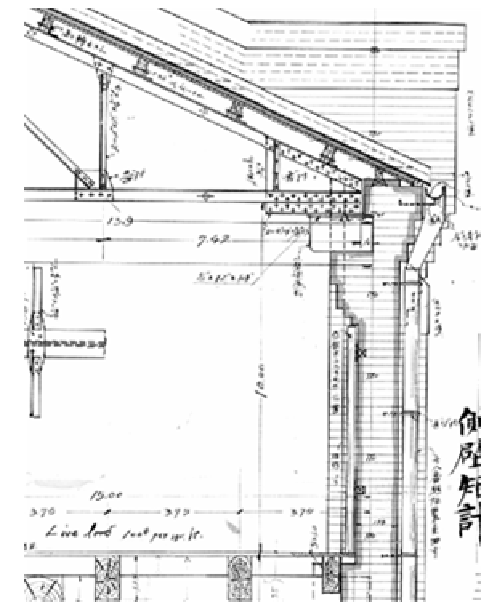
〈外壁・基礎〉



〈独立基礎〉

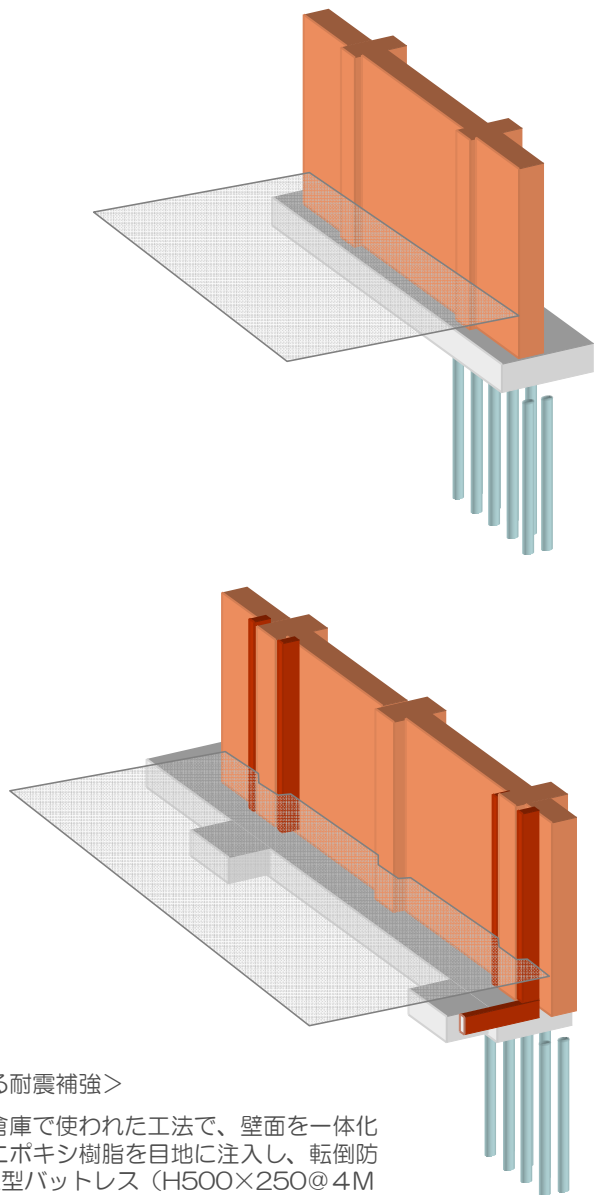


〈小屋組み〉



既存躯体を補強し構造体として扱う場合

＜現状＞

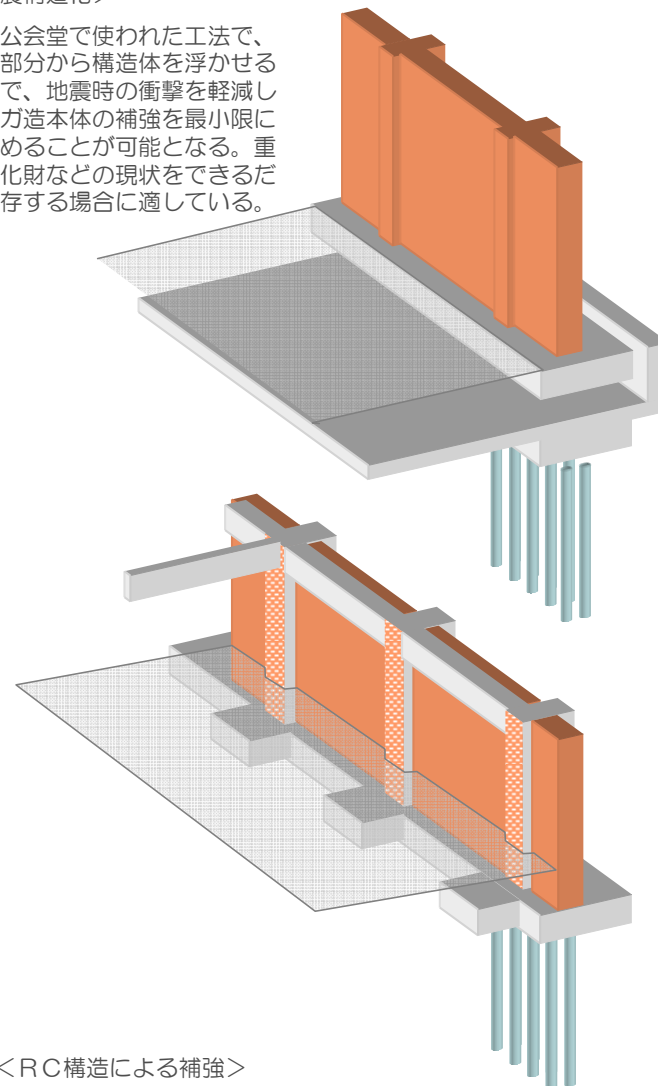


＜鉄骨による耐震補強＞

横浜レンガ倉庫で使われた工法で、壁面を一体化するためにエポキシ樹脂を目地に注入し、転倒防止のためのL型バットレス（H500×250@4M程度）を基礎から立ち上げレンガ壁面にアンカーする方法。場合によっては頂部を拘束するための横部材を加える。

＜免震構造化＞

中央公会堂で使われた工法で、基礎部分から構造体を浮かせることで、地震時の衝撃を軽減しレンガ造本体の補強を最小限にとどめることが可能となる。重要文化財などの現状をできるだけ保存する場合に適している。

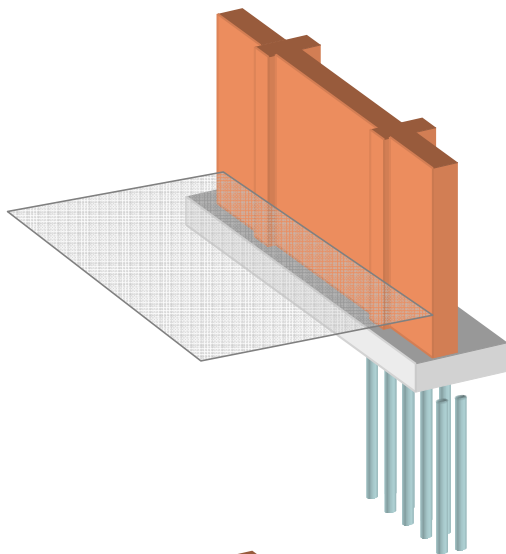


＜RC構造による補強＞

現在のリブ部分のレンガを取り除き、RCの間柱と基礎を新設することでレンガ壁を固定する方法。レンガ壁面を構造的に利用する場合はエポキシ樹脂による注入が必要となる。

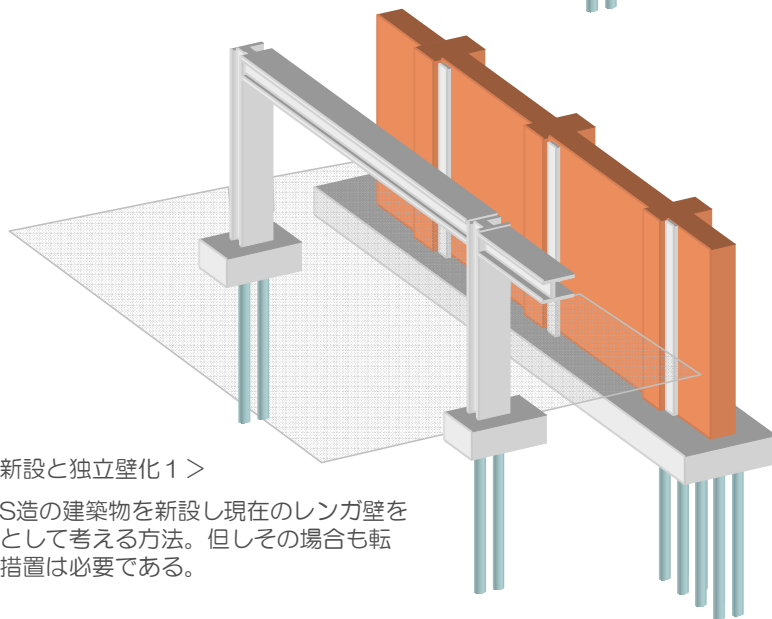
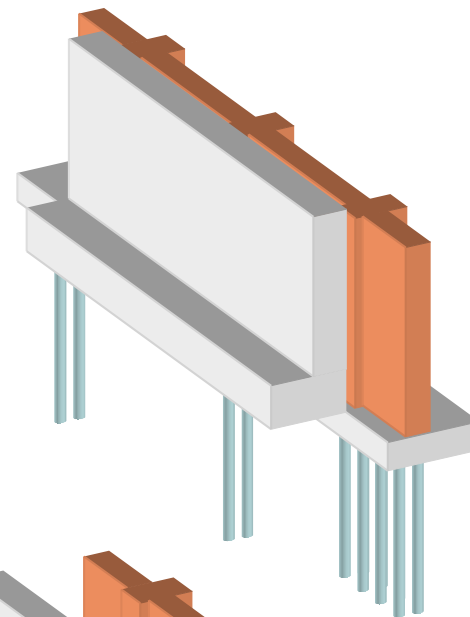
既存躯体を建築物として扱わない場合

<現状>



<RC造の新設>

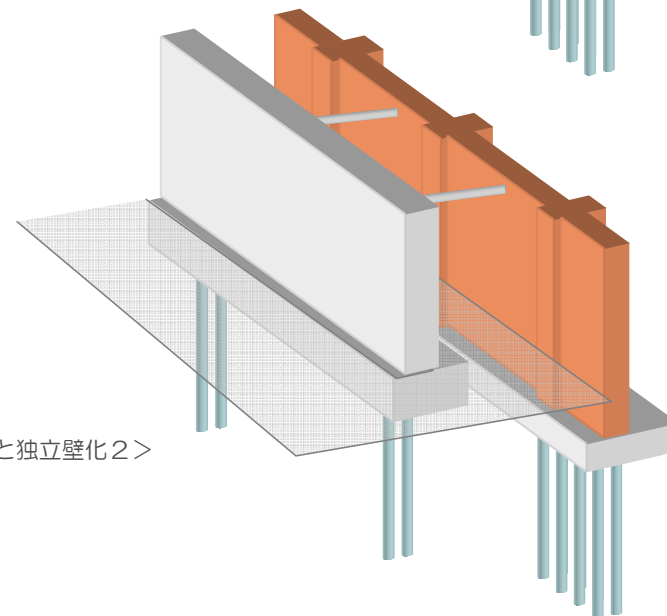
内部にRC造の建築物を新設し現在のレンガ壁を外装として考える方法。



<S造新設と独立壁化1>

内部にS造の建築物を新設し現在のレンガ壁を独立壁として考える方法。但しその場合も転倒防止措置は必要である。

<RC造新設と独立壁化2>



横浜レンガ倉庫の保存再生事例

- ・横浜レンガ倉庫：建築面積：4,858m² 延床面積 14,574m²（3F）高さ17m
基本構造：純レンガ組積造、小屋組みは鉄骨造、内部床一部初期RC造
- ・築港レンガ倉庫 建築面積：4,918m² 延床面積 9,835m²（2F）高さ15m
基本構造：純レンガ組積造、小屋組みは鉄骨造、内部床木造

1) 工期、工事費（本体工事）

赤レンガ倉庫保存活用計画（建物本体調査）昭和52年からスタート

実質工事期間：平成6年4月～4期6工事と民間発注の1工事併せて約8年間の工事

建築面積：4,858m² 延床面積 14,574m² 総工事費：約107億円（2,427千円/坪）

参考事例

- ・ミュージアムパーク アルファピア：レンガ造リニューアル
延床面積：1,486m²（1F）、1995年、総工事費：2.4億円（534千円/坪）
- ・洲本市立図書館：レンガ造＋新築建物
延床面積：3,190m²（2F）、1997-8年、総工事費：8.3億円（860千円/坪）
- ・中之島中央公会堂：免震工法＋リニューアル
延床面積：9,887m²、総工事費：110億円、清水建設（3,677千円/坪）



横浜レンガ倉庫



洲本市立図書館



ミュージアムパーク アルファピア

2) 構造形式、耐震性能

補強の考え方：従来のコンクリートなど湿式によるものに対して、レンガ壁の内壁面も極力活かしたいとの考え方から鉄骨補強が採用された。

耐震上の補強：2棟（約15,000m²）に対して約1,000tの鉄骨を構造補強

（うち630tを7箇所に分散して耐震コアとして残りを側壁の倒壊防止用バットレスとして使用）

考え方：既存の構造体にも十分期待した上で、その後の外力や経年による損傷を鉄骨で補う
法手続き：計画通知（構造評定は実施せず）

- ・レンガの許容体力、破断強度、レンガ造の構造計算方法が基準法や学会規準にない。

→破断強度は実験値を用い、構造計算の線材モデル化をせず、すべての面を有限要素法により解析する。



横浜レンガ倉庫の保存再生事例

3) 外部主要構造部

主要構造部開口等の追加：組積造をモデル化しFEM解析の上、エポキシ樹脂の注入補強

(全体に 約30 t 注入を実施して躯体の不均一さを評価から外す)

側壁の補強：面外方向への倒壊の反力のため、1階地中にSRC基礎梁を新設。L字型に鉄骨を壁に沿って立ち上げSUSグラウトアンカー(12~16Φ、@ 500)で既存壁と結合。

基礎：既存の松杭に載荷試験を実施した結果、健全であると確認

新設鉄骨耐震コア基礎：永久地盤アンカーとRC既製杭を併用、100 t / 基礎1本当り (900 t / コア) の押し引き反力を載荷する。



4) 小屋組み鉄骨

構造体：トラスの面外方向への座屈を抑制するために、水平方向でのつなぎを行い端部はレンガ壁に定着させる。トラスの支承部の補強としてレンガ壁頂部で支承部をC型鋼でつなぎアンカー固定。

防火性能：4m以下の部分への耐火処置として耐火塗装

5) 防災計画

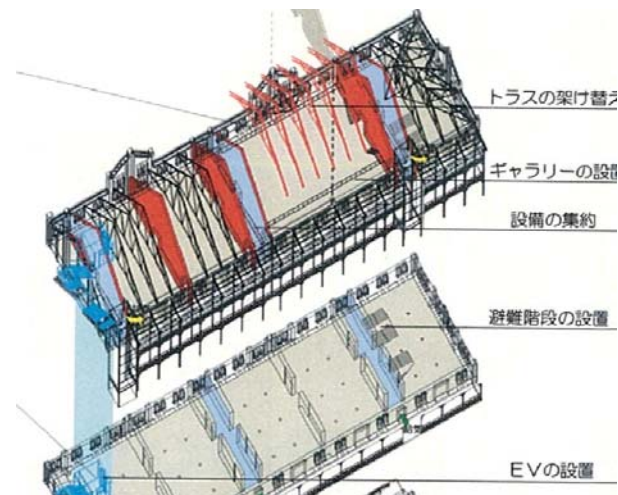
赤レンガ倉庫は重要文化財ではないため防災規程については通常の建物と同様の扱い

(いわゆる基準法の3条も消防法の特例規程などの緩和が採用されない)

2方向避難を確保するために外壁に新設の開口を設置

設備の開口が構造に与える影響は大きく十分な余力をみておく必要がある。

既存の階段を保存した状態で避難階段に使用：耐火ガラスで区画







Renovation of The Red Bricks [Art Warehouse]

model & drawing

全体写真	003
エントランス	004
美術館	005
アトリエ	010
中央の森	014
機能	016

配置図兼1階平面図	009
2階平面図	010
各部屋詳細図	011
美術館	012
アトリエ	013
中央の森	014

赤煉瓦倉庫の再生

「art」の街として芽生えてきた築港において、赤煉瓦倉庫の再生は、更なる成長を促すものである。これからこの地域を大阪の芸術を代表する場として発展させていくには、行政のみの計画ではなく、地域住民、利用者、開発者との関係が重要であり、それが建築、また地域の価値となる。今回提案するものは、そのような関係の形成を誘発するものであり、赤煉瓦の魅力を最大限に引き出すものとなる。

大阪市立近代美術館

現在、建設準備室が設置されているが、展示施設がなく、多くの所蔵品が倉庫の中に眠ったままである。私の提案は、この赤煉瓦倉庫を再生し、大阪市立近代美術館を建設するものである。

大阪市立近代美術館の基本方針

(Noriko SATOH氏による市教育委員会社会教育課大阪市立近代美術館建設準備室へのヒアリングより)

- ・近現代を中心としたコレクション
大阪には、東洋青磁や中国のコレクションはあるが、近現代に関してはまとまったものがない。そこで新しい美術館では近現代の作品を扱うことになった。美術館建設の発端となった山本コレクションが近代の作品を中心としていることも関係している。
- ・充実した常設展示
美術館は常設展だけで来館者をよこばせることができるものでなければならないという考えがあり、作品収集や常設展示にも力を入れる。
- ・国際的な評価に耐えうる企画展
常設展示と同時に企画展も世界に認められるレベルのものを開催する。大きな巡回展は大阪を素通りしてしまうことも多く、そういったものを開催する場所にしたい。
- ・作品と静かに対話できる環境、雰囲気づくり
来た人に何かを感じ取ってもらう、その人の中に何かを芽生えさせる環境をつくる。

観に来た人も勉強できる体制をつくりたい。また作品展示だけでなく、展示と関連づけた音楽会やパフォーマンスなど、人を呼び込めるようなイベントもしていく必要がある。それから小中学校との関わり、ギャラリートーク、作家のワークショップなどは、やっていこうと考えてはいる。

しかし、根本の一番大切な部分は学芸員の調査、研究であるとする。そして、その成果をどう展示し、発表するか。どうやって市民の皆さんに分かっていただくかという問題がある。

築港の可能性

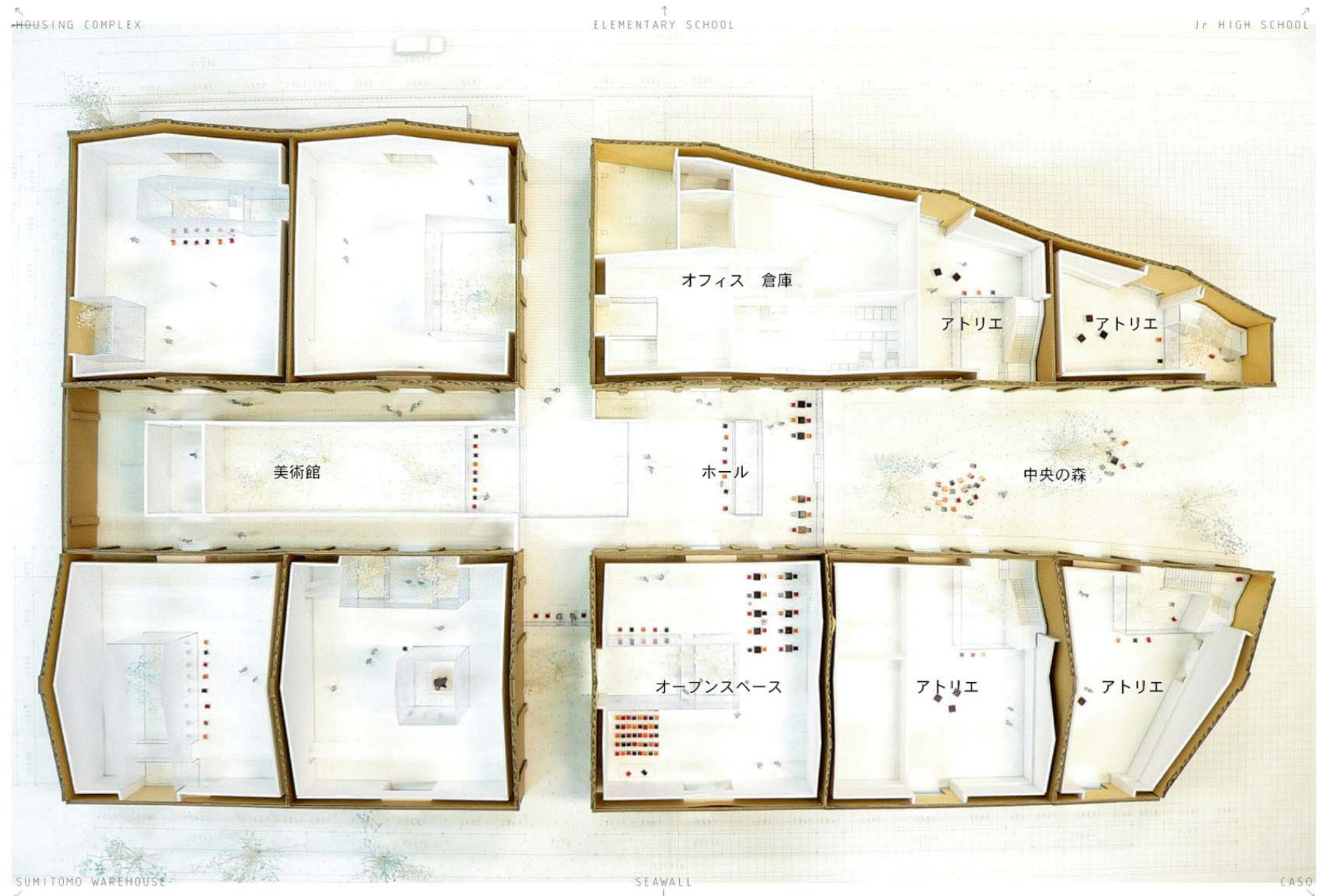
この基本方針に対して、築港では以下の可能性が考えられる。

- ・港町とギャラリー
築港地区ではギャラリーが増え始め、赤煉瓦倉庫横のCASOや商船三井築港ビルなど近代建築を改装したものがあり、近現代の美術所蔵品や、近代に整備された港町としての雰囲気があり、近現代の芸術の街として形成しやすく、市立近代美術館とリンクすることのできる場所である。
- ・倉庫跡地
コンテナの大型化により、港湾機能が南港に移り、倉庫跡地が増えつつある。充実した施設を建設するための土地を確保しやすく、美術館の拡張にも耐え、また地域内に分散することで、築港＝芸術という性格を決定づける可能性もある。
- ・大阪と築港と美術館
梅田から電車で約20分の距離にあり、アクセスしやすく、落ち着いた雰囲気と、築港北側の海遊館や天保山などのにぎわいのある場所であり、観光地としての魅力もある。美術館を世界レベルにするためには、地域の力が必要であり、美術館を知ることは、築港を知ることであり、大阪を知ることにつながる。世界の巡回展が開催されれば、地域として新たな大阪の顔となる。
- ・敷地周辺の特長
築港南側は親水緑地、護岸の計画もあり、ゆっくりと作品と対峙できる環境が地域の中に整備しやすく、赤煉瓦再生という手法により、建築自身から新たな感覚を生むことができる。また、敷地の向かいには小中学校もあり、この学校を起点として、学童へのワークショップの拡大、学校間の交流の可能性も考えられる。
- ・新たな活動
NPOアーツアボリア等の事業もあり、そのような活動や学芸員の拠点を形成することにより、新たな芸術活動の発端となり、展示するだけの美術館ではなく、これからの芸術を生み出す現代美術館としてふさわしいものになる。

「芸術倉庫」としての再生

これからの美術館、建築、都市は愛着のもてるスケールで計画される必要がある。ここで私が提案するのは、住民や来館者、作家などすべての利用者が居心地のいい空間とすることを念頭において設計したものである。今回は私一人でプランを立てたが、実際の場合は、計画段階から様々な人が絡み合い、竣工後には自然と人と作品が集まる「倉庫」としての姿を思い描いている。

全体写真

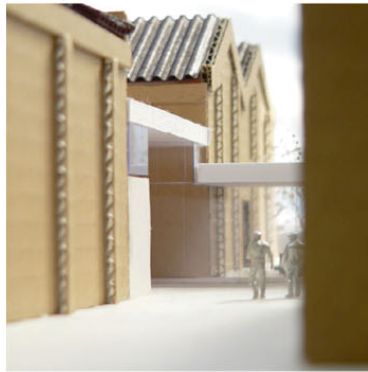


エントランス

エントランスは赤煉瓦倉庫へ魅き込むツールである。



エントランスからホール・中央の森を望む



エントランスへ向かう道

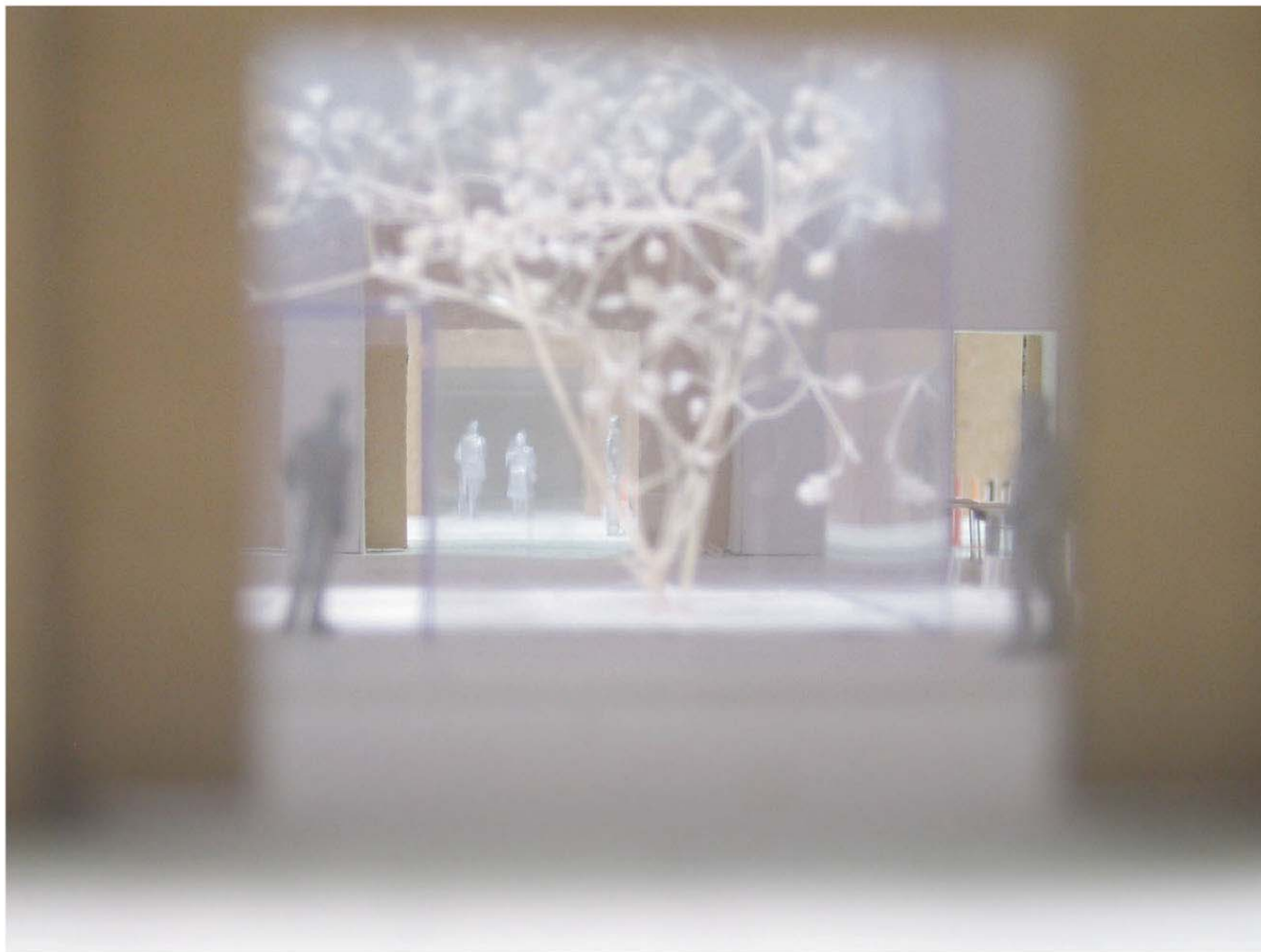


エントランスから美術館中庭を望む



美術館

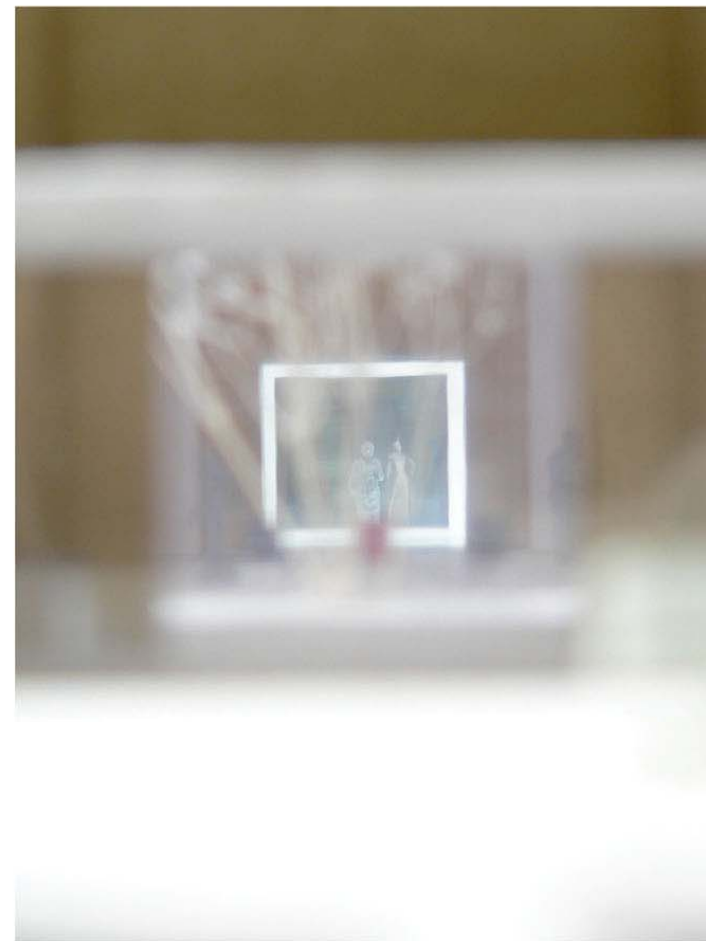
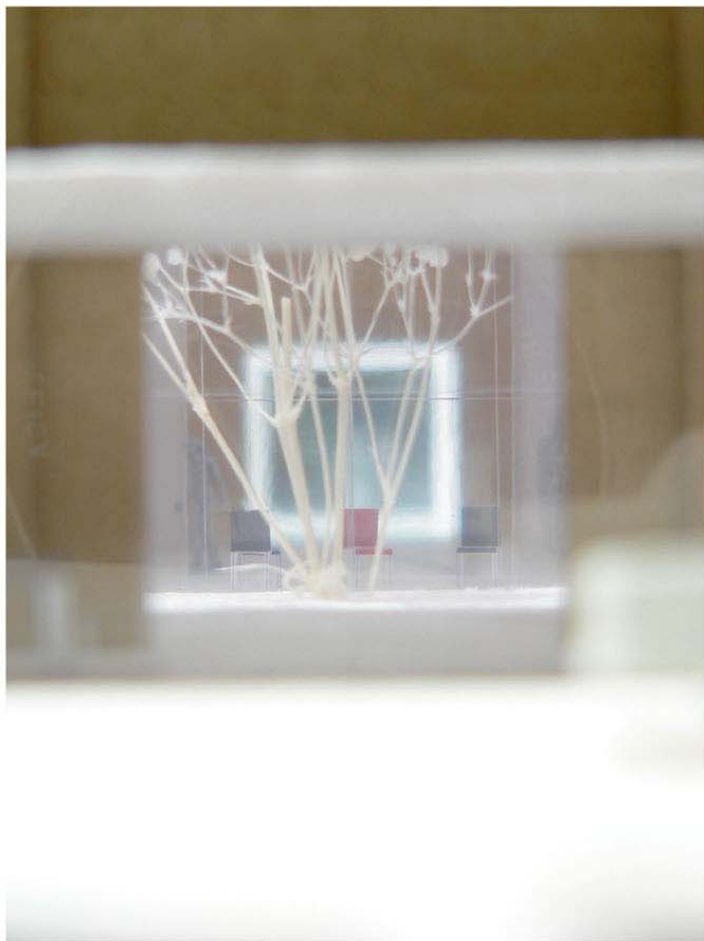
赤煉瓦の質感と倉庫の雰囲気を残し、光のある空間を生む。新たに入れた壁・ガラスは多様につながる表情を赤煉瓦倉庫にもたせる。



赤煉瓦とガラスと白壁が生む空間

美術館

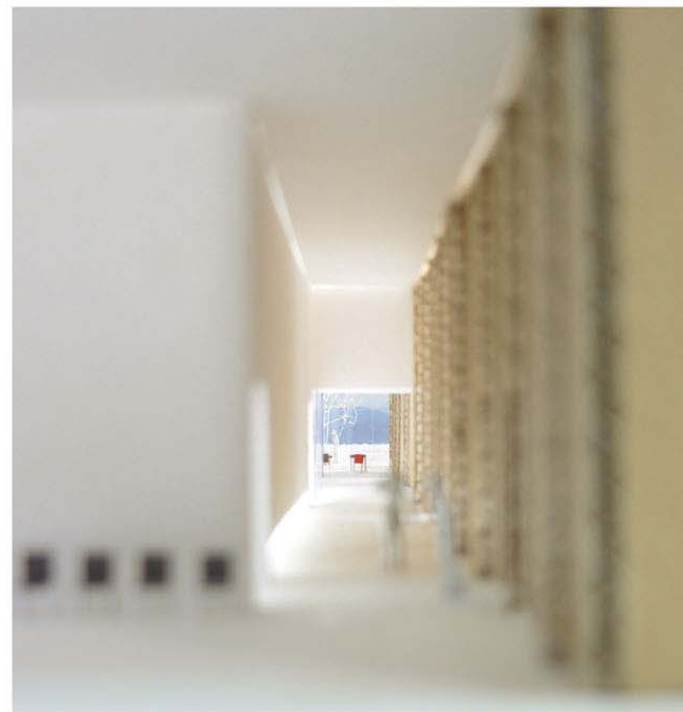
赤煉瓦の質感と倉庫の雰囲気を残し、光のある空間を生む。新たに入れた壁・ガラスは多様につながる表情を赤煉瓦倉庫にもたせる。



連続する部屋とそこにみえるもの

美術館

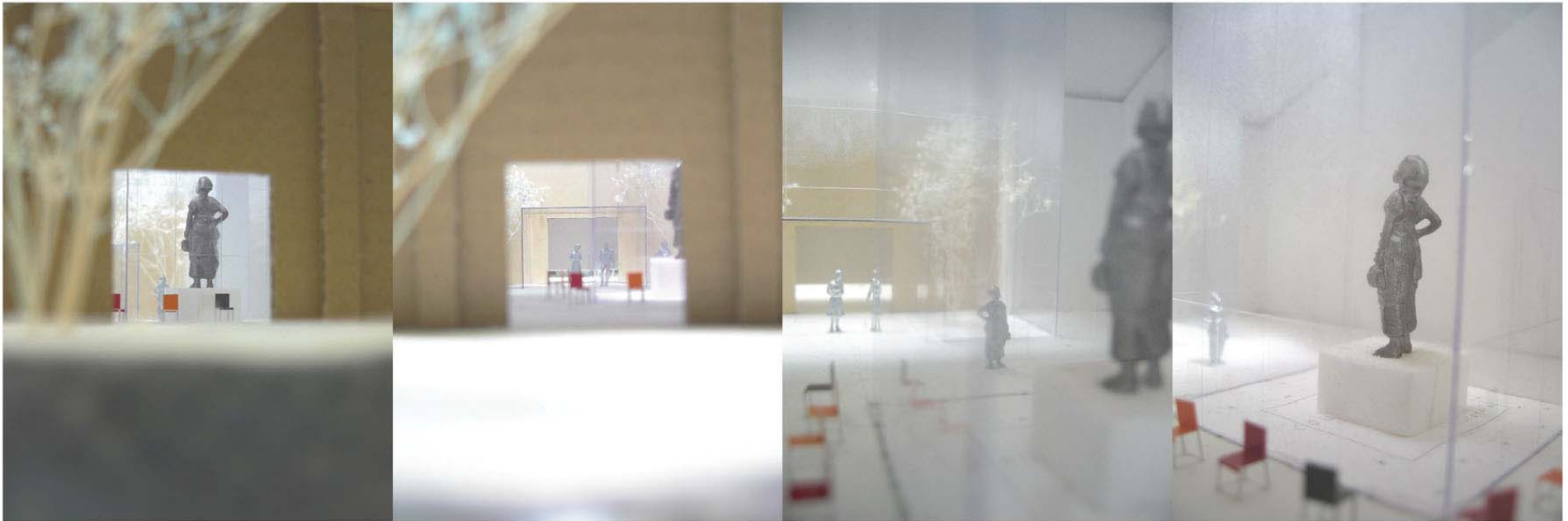
赤煉瓦の質感と倉庫の雰囲気を残し、光のある空間を生む。新たに入れた壁・ガラスは多様につながる表情を赤煉瓦倉庫にもたせる。



赤煉瓦と白壁に挟まれた回廊。外から入ってくるものは光のみである。

美術館

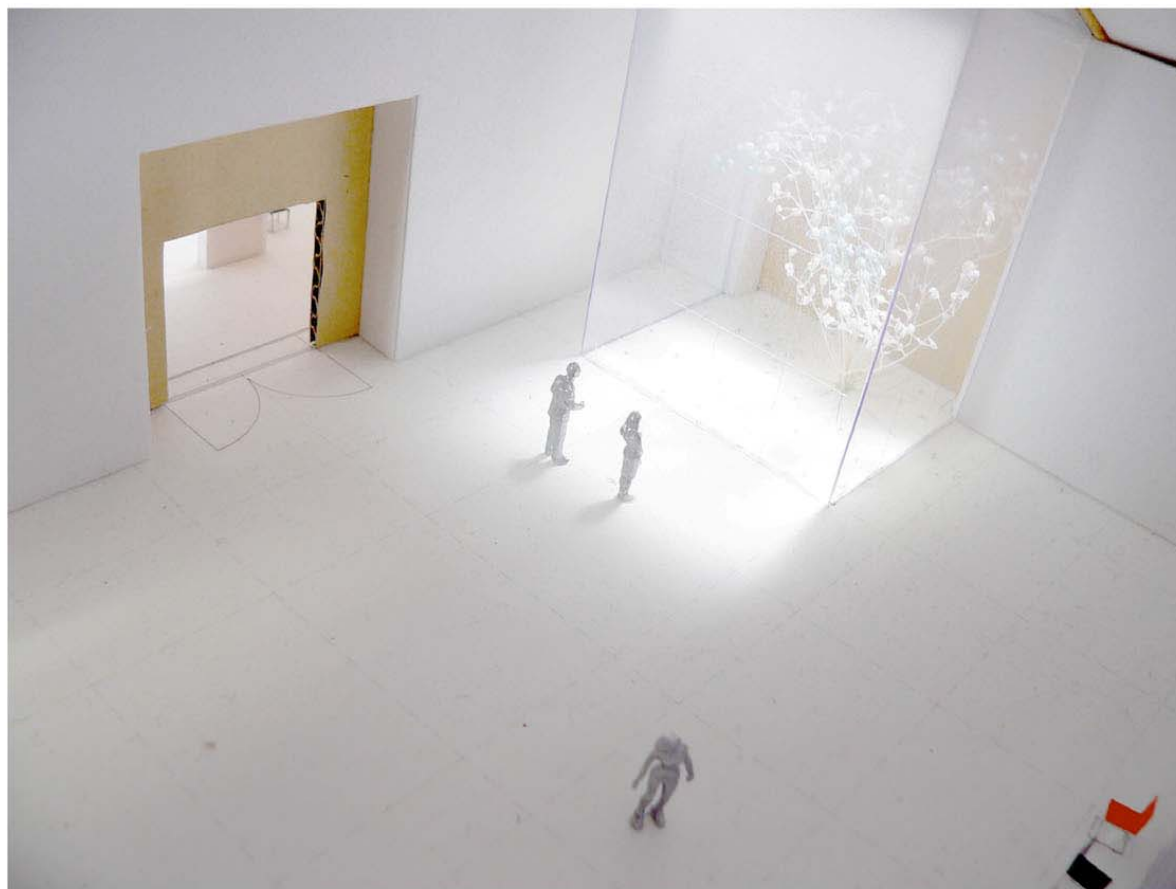
赤煉瓦の質感と倉庫の雰囲気を残し、光のある空間を生む。新たに入れた壁・ガラスは多様につながる表情を赤煉瓦倉庫にもたせる。



展示物との出会い。赤煉瓦の開講を通して外からも美術館の雰囲気が感じられる。赤煉瓦倉庫の中のガラスで囲われた外部は展示空間にもなる。

美術館

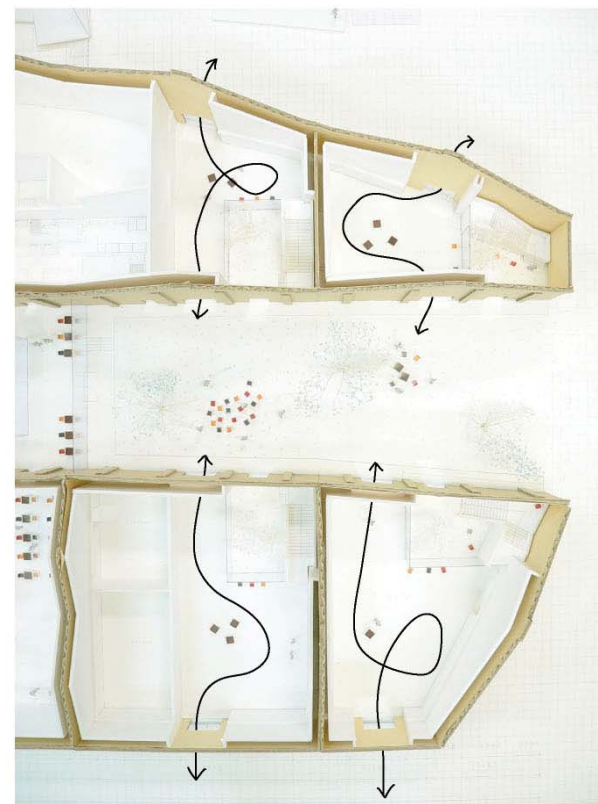
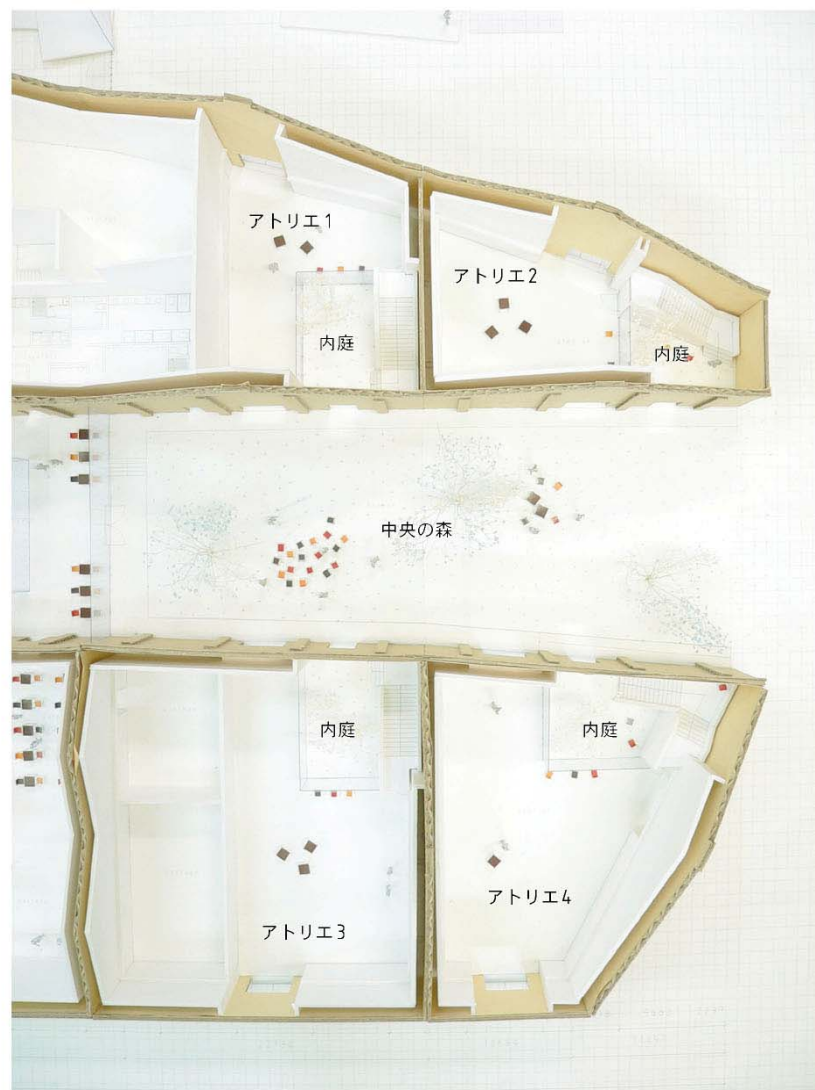
赤煉瓦の質感と倉庫の雰囲気を残し、光のある空間を生む。新たに入れた壁・ガラスは多様につながる表情を赤煉瓦倉庫にもたせる。



ガラスは柔らかく光を通し、倉庫内を満たす。ガラスの向こうには赤煉瓦をそのまま残り雰囲気を演出する。また室内にいながら、外の空気を近く感じさせる役割を担う。

アトリエ

アトリエは作家、学芸員の作業場である。倉庫の使いやすさと、赤煉瓦や自然の取り入れ方、利用者同士の関わりかたを考慮した計画となっている。



普段は1、2階ともアトリエとして使用する。

それぞれが内庭を持ち、そこから各部屋に出入りすることになっている。

この内庭が利用者の交流スペースとなり、また倉庫の外にもつながる。

赤煉瓦壁を一枚扶むことで街へ乱暴に投げ出されることもなく、やわらかくつながる。

イベントや美術館として展示スペースが欲しい場合は、1階を開放する。

現在の赤煉瓦倉庫の入り口を開くと、中央の森と一体となった、回遊性のある新しい美術館が生まれる。

アトリエ

アトリエは作家、学芸員の作業場である。倉庫の使いやすさと、赤煉瓦や自然の取り入れ方、利用者同士の関わりかたを考慮した計画となっている。



アトリエの見え方。内庭と中央の森、赤煉瓦と白壁が空間を構成している。

アトリエ

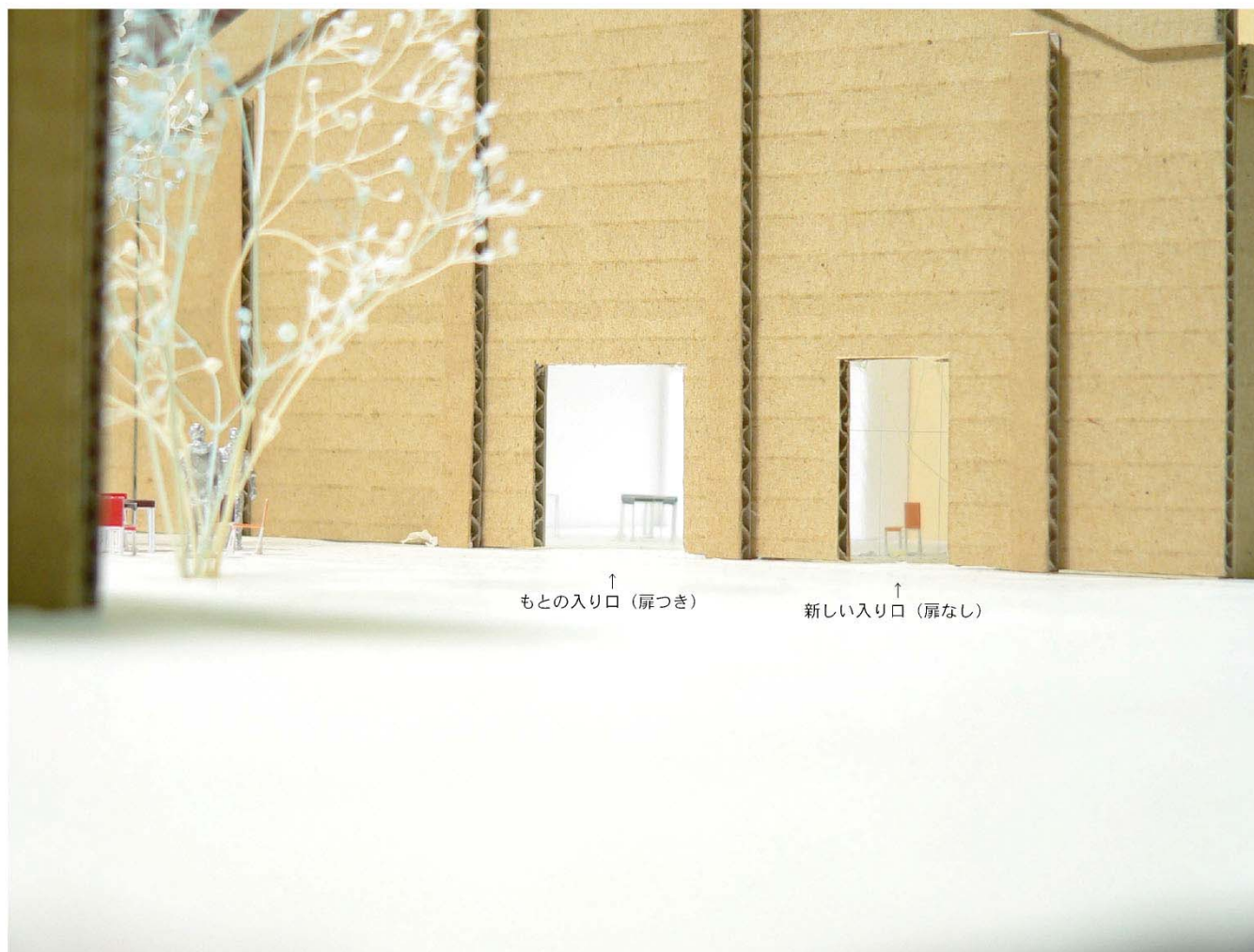
アトリエは作家、学芸員の作業場である。倉庫の使いやすさと、赤煉瓦や自然の取り入れ方、利用者同士の関わりかたを考慮した計画となっている。



内庭とバルコニー。ここはアトリエ利用者のコミュニケーションの場となる。壁を一枚隔てているため、自分の場としやすい。

アトリエ

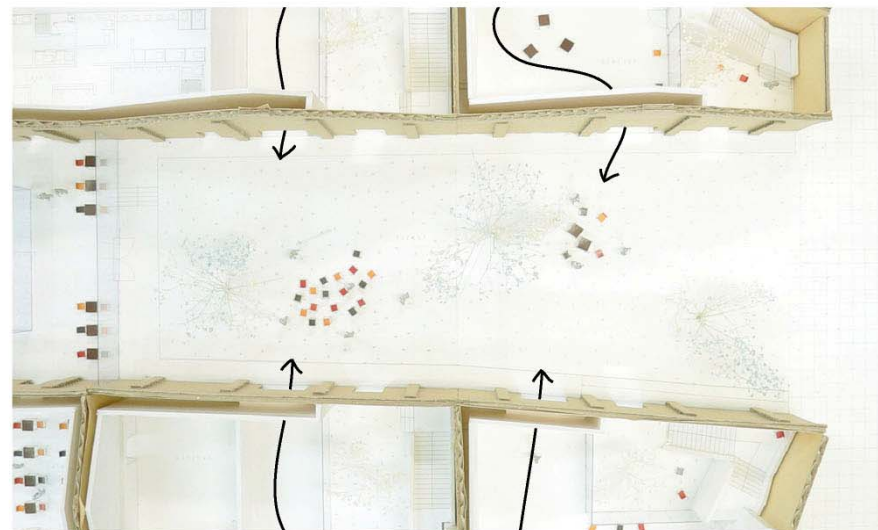
アトリエは作家、学芸員の作業場である。倉庫の使いやすさと、赤煉瓦や自然の取り入れ方、利用者同士の関わりかたを考慮した計画となっている。



アトリエの正面写真。階段を機能的に使うため、新しい入り口を設けた。表情や見えるものもかわってくる。

中央の森

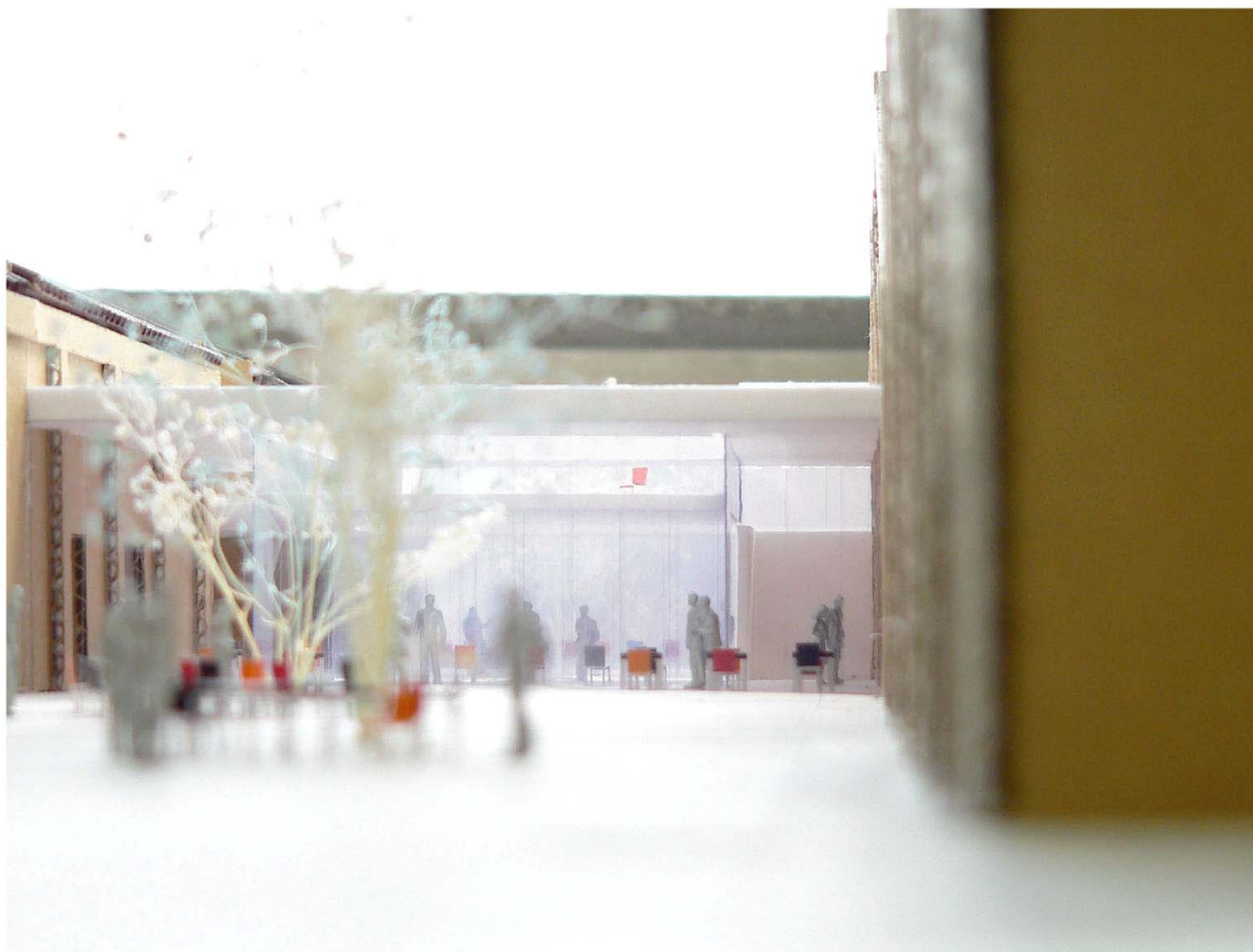
海岸沿いの緑化計画にも合わせ、街の中に安らげる場を生むため、赤煉瓦にあう森をつくる。



中央の森は、街に開かれ、地域の人やアトリエ利用者の活動場所になる。
赤煉瓦の質感と、森の植物は、これから流れる長い時間を記憶を記憶する装置である。

中央の森

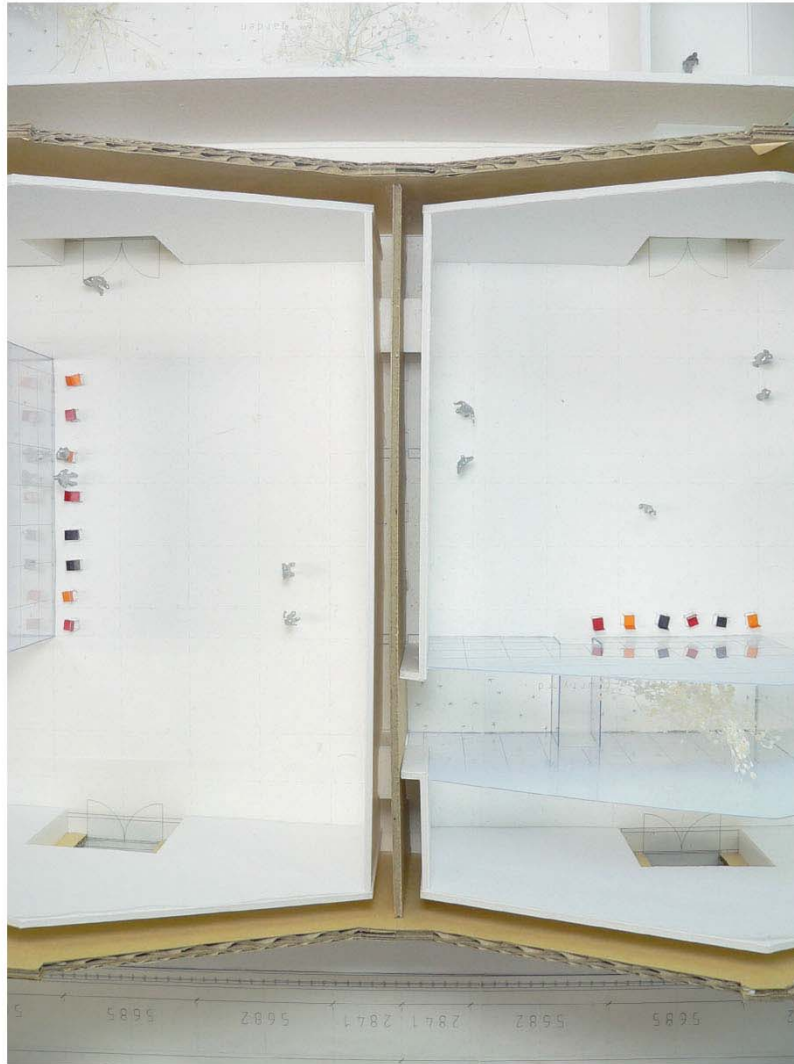
海岸沿いの緑化計画にも合わせ、街の中に安らげる場を生むため、赤煉瓦にあう森をつくる。



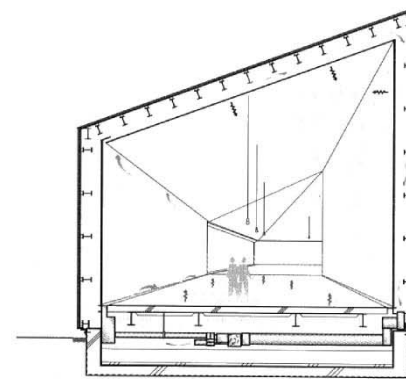
森の奥のホールはガラスはりで、視線が連続する。途中の屋根の上には展示物が飾っており、芸術に親しみやすい環境をつくる。

機能

赤煉瓦を再生するため、建築を構成する構造体、設備、ガラスへの提案をする。



空調設備 ES アソシエイツ



本プロジェクトの空調設備計画に際しての主要な考慮点は下記であった：

- 天井の高い空間であること（4～8 m）
 - 間仕切りのない連続した160mの空間であること
 - 壁面がコルテン鋼のダブルスキンであること
- のことで検討の結果、特徴的な下記空調システムを採用した：

床下空間にファンコイルユニットを設置し、在入域のみの温熱環境を適切に維持する床吹出空調システムを採用した。ゆったりとした静寂な直換式（ディスプレイスメント式）空調効果を得るため、室内床面中央部への吹出口設置は避け、スリット状グレーチング吹出口を壁面沿いにのみ設置した。吹出口はファンコイルよりダクトで接続される冷風用と、ダクト無しで床下チャンバに開口している温風用とで構成されている。

冷房時は冷風用吹出口により冷風を直接室内へ吹出す。暖房時にはダンパを切り替えて床下プレナム内に温風を吹込み、床表面の温度をある程度上昇させ床暖房効果を得ると同時に温風用吹出口より温風を室内に吹出す。

ダブルウォールサーキュレートエアシステム
コルテン鋼のダブルウォールの空間を利用したレタン空気サーキュレートシステムを考案した。壁面上部で室内空気を吸込み、ダブルウォール空間内を循環させて床下設置ファンコイルユニットへ戻す。

外部コルテン鋼よりの夏期の日射負荷はレタン空気除去され、室内空間に対してのダブルスキン効果が得られ、室内への外気要素を緩和する。

冬期にはサーキュレートレタン空気によりダブルウォール内側表面での結露発生及びカビの発生が防止できる。また冬期に日射がある場合には、サーキュレートレタン空気による太陽熱の採熱も行える。

手塚貴晴・由比建築研究所 「キョロロ」

赤煉瓦の補強と建築の構造体、設備機能をつくるため、内壁を新設する。
この壁をつくることで、赤煉瓦の東海を防ぐとともに、二重壁となることで、
熱負荷を減らし空調エネルギーを削減することも考えられる。
参考資料として手塚貴晴・由比建築研究所設計の展示施設の設備概要を引用する。

機能

赤煉瓦を再生するため、建築を構成する構造体、設備、ガラスへの提案をする。



ガラスは上部から下部へ向かって、白から透明のグラデーションになるように加工を施す。天井も壁も白にすることによって今までにない光の表情を作り出す。

機能

赤煉瓦を再生するため、建築を構成する構造体、設備、ガラスへの提案をする。



美術館奥の壁は赤煉瓦を移設したものとし、また美術館機能やその他の施設を増設するときには、取り壊し拡張可能とする。



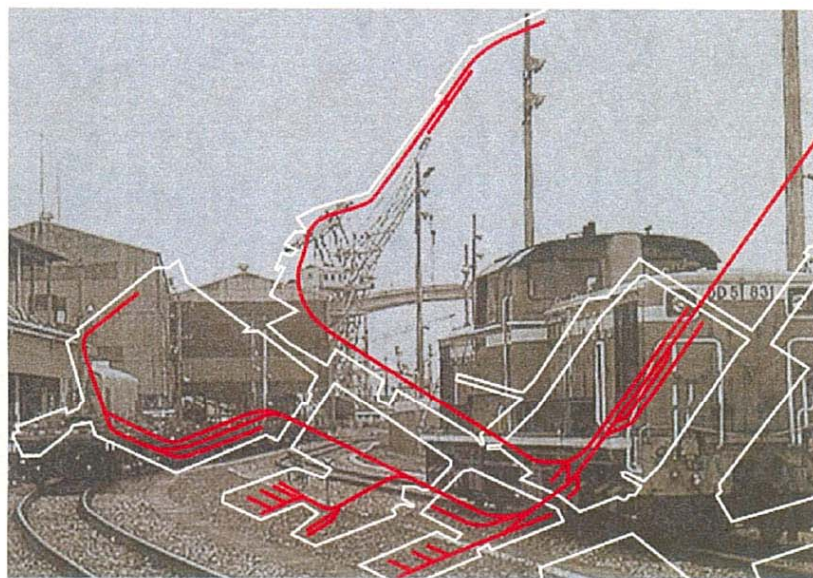
R.mode あかの継承、あかいろの創出



あかの継承

貨物からひとへ

物流の拠点を支えるために大阪臨港線が敷かれ、大阪港駅開業で築港にひとの流れができ観光客が集まるようになった。それぞれ運ぶモノは異なるものの、どちらも築港を支える大切な基盤である。このような背景も踏まえて、**築港で何を継承して、何を創出していくのか**ということを見つけることから計画を始めた。

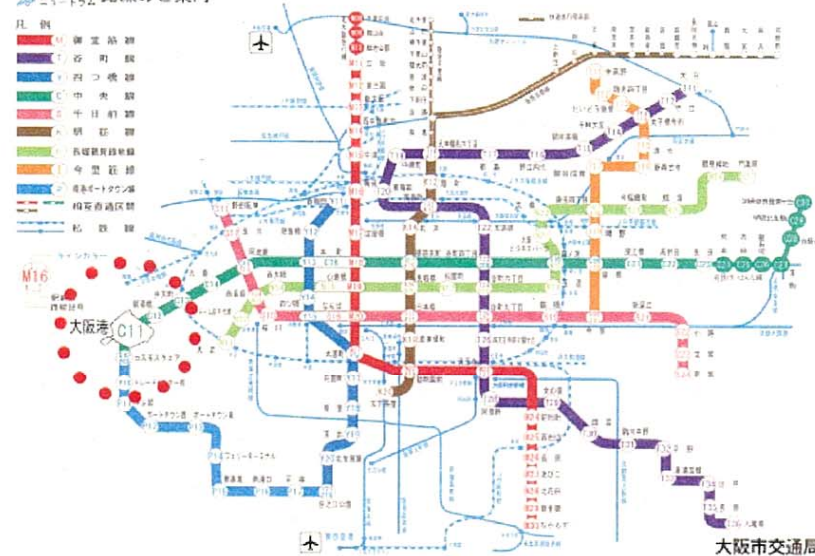


最盛期の頃の大阪臨港線

港の開発が進むにつれて、突堤に通じる本格的な鉄道路線の建設が求められるようになった。そこで、関西本線の今宮駅から分岐する貨物線を計画。1928年に完成した。この貨物線の開業により、現在の大阪環状線を構成する区間の約90%に線路が敷設されたことになり、大阪環状線建設の際には大いに役立った。

交通科学博物館HP (<http://www.mtm.or.jp/museumreport/kaniyo/line/page05.html>)

地下鉄 路線のご案内



大阪市営地下鉄

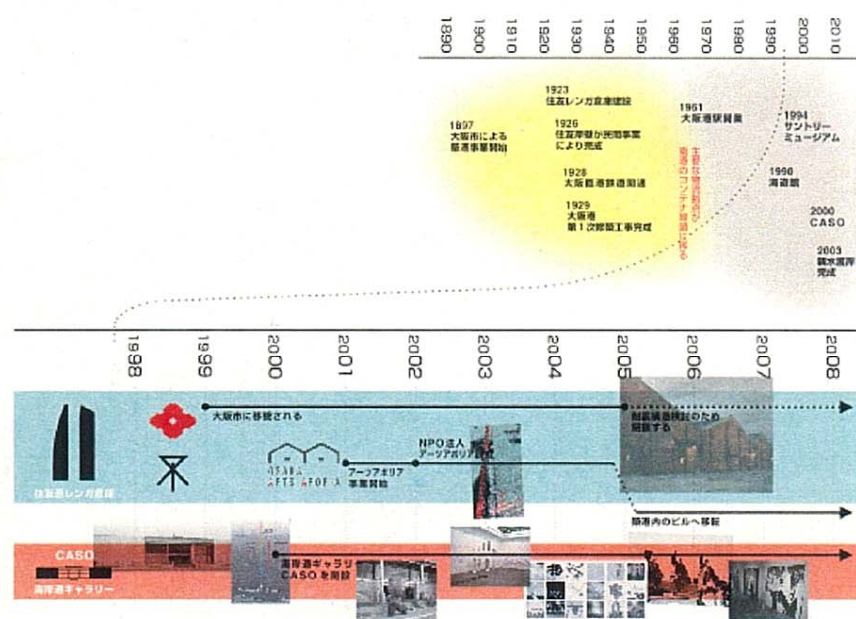
大阪市交通局

大阪港駅は大阪市営地下鉄の交通ネットワークの一部であり、多方面からのアクセスが容易である。このため、海遊館、マーケットプレイス、サントリーミュージアムを中心として毎年多くの観光客を呼び込んでいる。

アートの拠点として

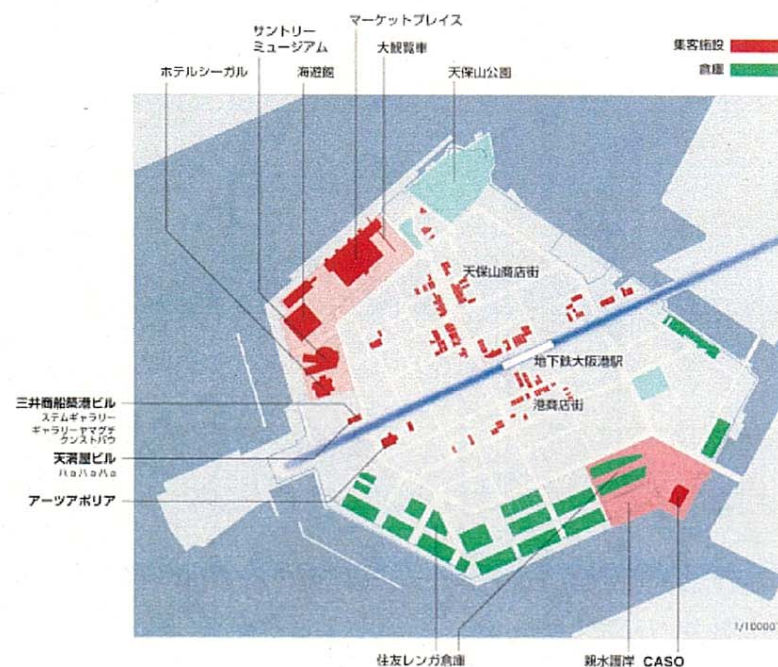
港湾の整備が進められ、海運・物流の拠点として栄えたが、70年代以降港湾の主力は南港地区になった。その後、築港北部に天保山ハーバービレッジがオープンし、観光客が集まるようになった。

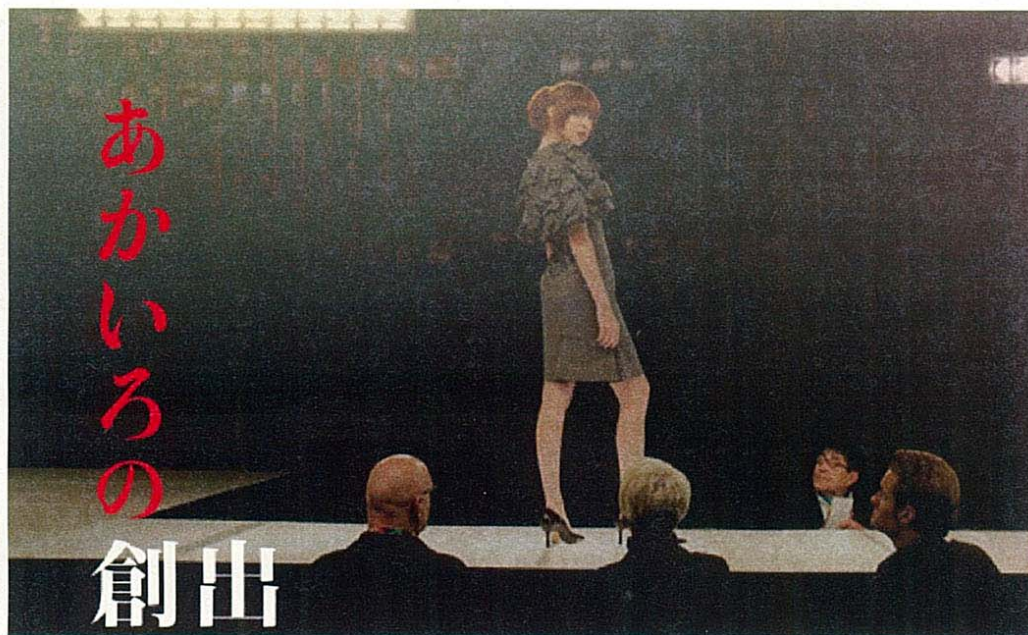
1999年、大阪市は住友レンガ倉庫を買い上げ一般開放したのをきっかけとして関西の芸術関係者が集まるようになった。



地域のちから

中央を走る地下鉄によって大きく2つに分断されており、南側は少し活気に欠ける。倉庫のある臨港地区を将来にわたって商業や居住地に利用していくことで全体を活気付かせる。





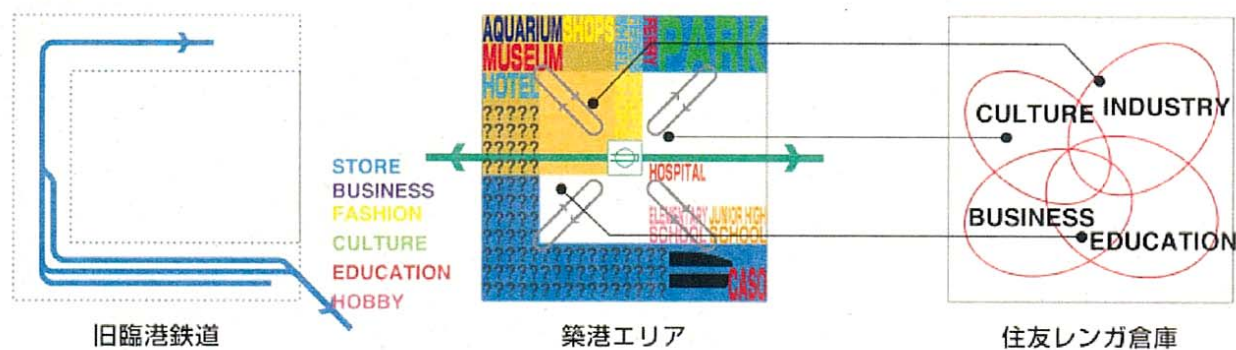
アートを誘致する

Red — あかいろ

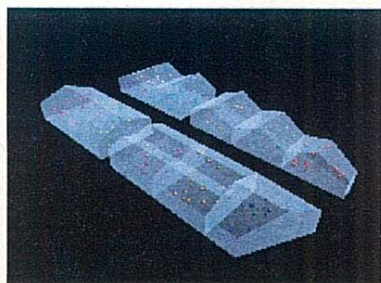
Rail road — これまでの軌跡、これからたどる道

Revitalization — 街に活力を与える

住友レンガ倉庫に（服飾系の）アートを誘致し、実践的なデザイン教育を行う。

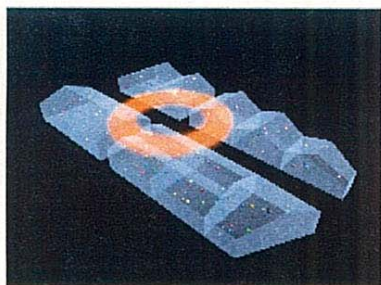


臨港鉄道跡にそって、住居・店舗・オフィス
を計画する。住友レンガ倉庫での教育は築港
の文化や産業やビジネスとも直接結びつき地
域の基盤作りを行う。



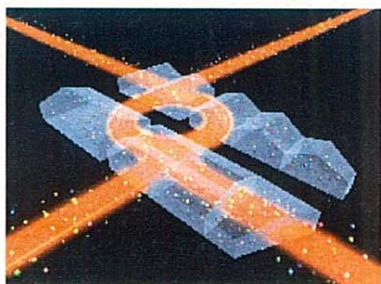
従来の空間分節

これらの空間はそれぞれに特有の activity を持つ。しかし、このままではいつか空間によどみが生じるため発展性がない。



STEP 1

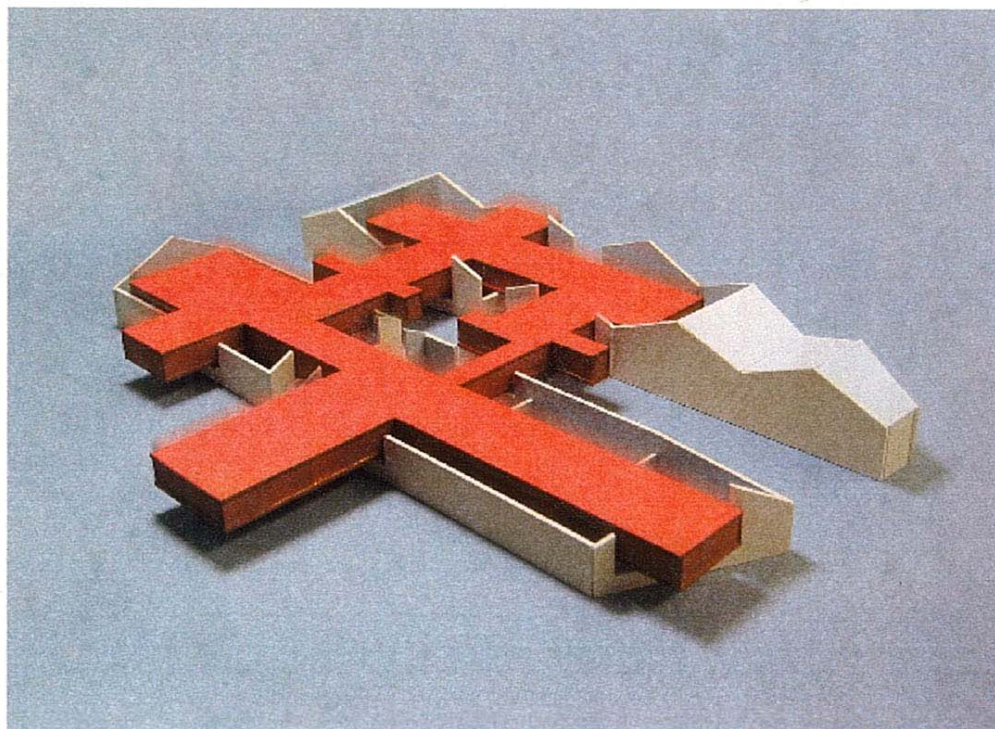
4棟にまたがるようにドーナツ型のボリュームを設定し、循環経路をつくる。これは activity の触媒となり、新しい価値を創出していく。



STEP 2

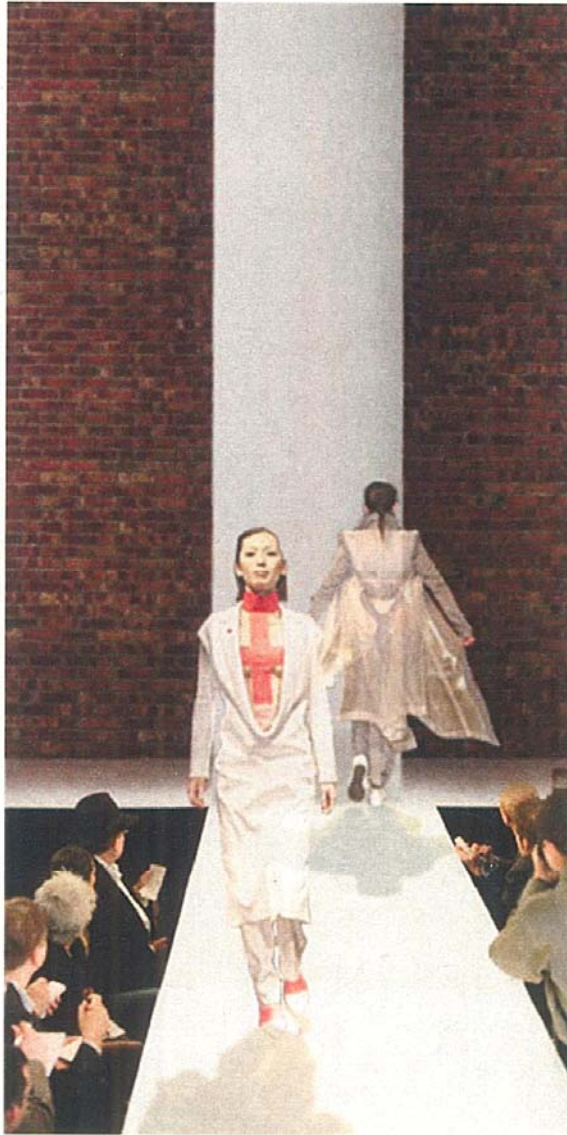
外部の activity も取り込むようにする。このボリュームはレンガ倉庫と周辺環境から決定する。

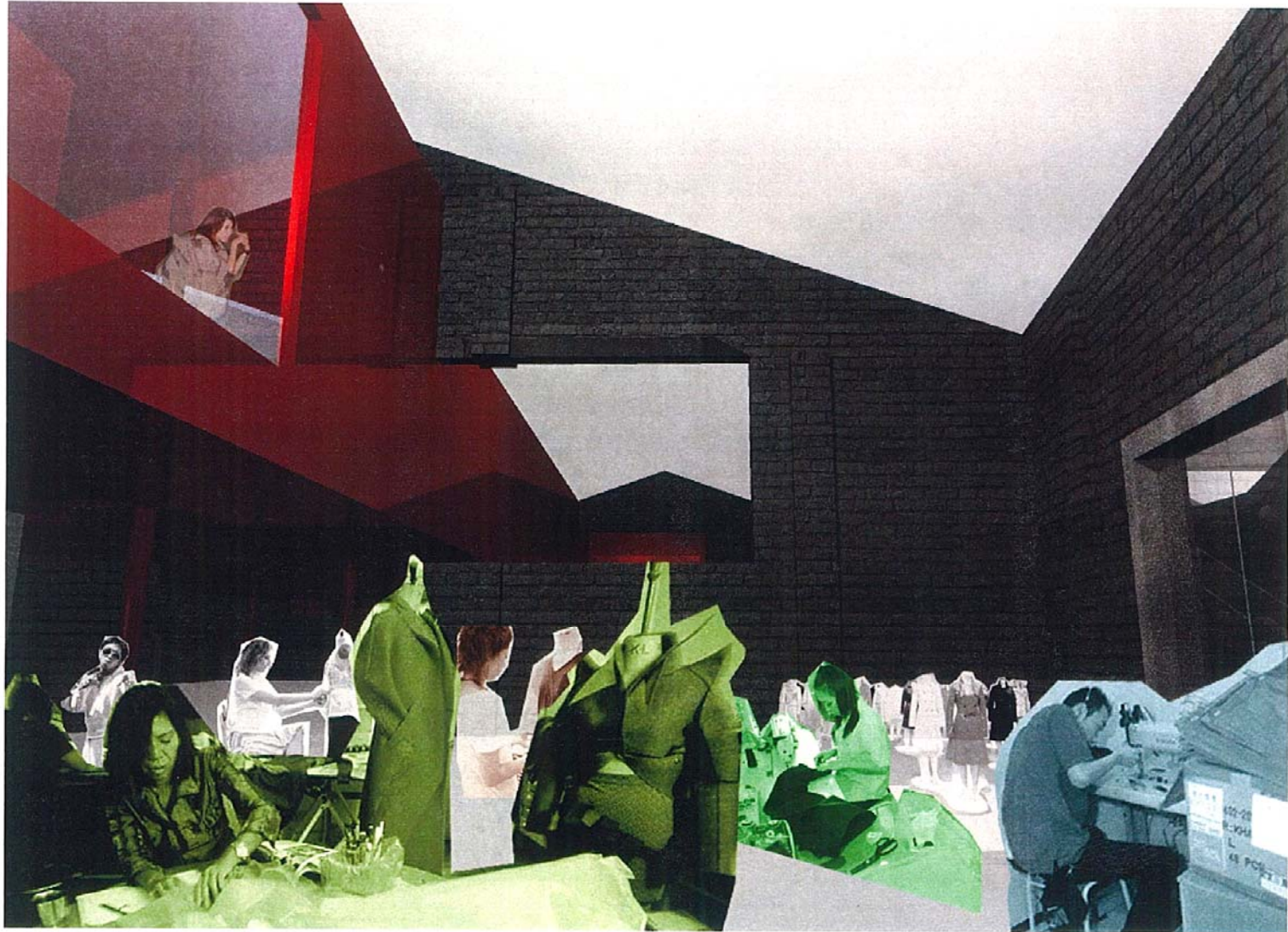
アイデア



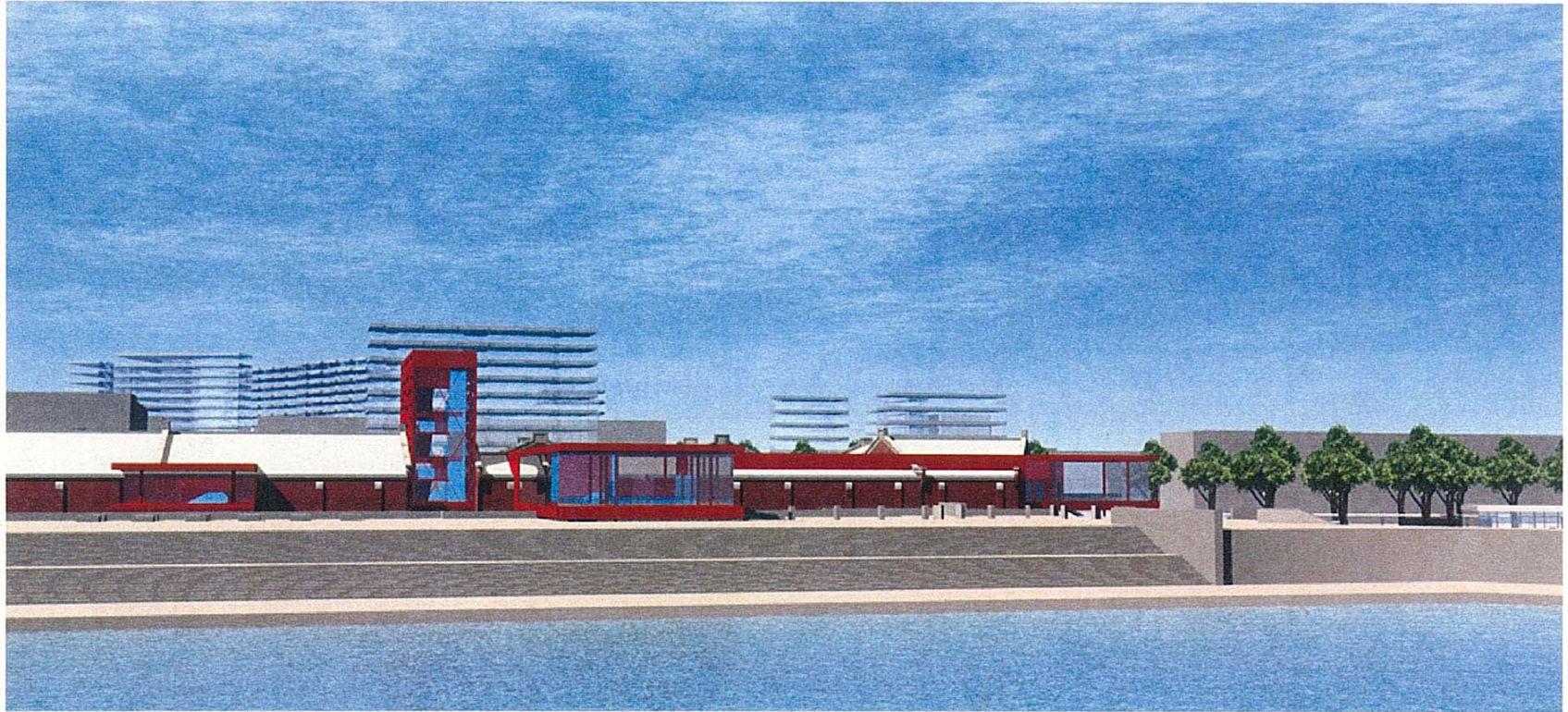
築港の文化や歴史を受け継いでいくためにレンガ倉庫の形態を残し、そこに新たにボリュームを組み込むことで形態の組み替えを行う。













普段見慣れている世界のもののあり方を変えてみる。決まり切った行動から逸脱してみる。そこに『アート』は生じる。人は、この『アート』を感じることで、生の深みによるエクスタシーを感じることができる。『アート』に決まった表現はなく、自身の思った行動が『アート』である。『アート』が『建築』の中にあるのではなく、『建築』自体が『アート』でもない。『建築』は『アート』と同等のものであり、『アート』の一部になったりならなかったりする。『建築』と『アート』の関係はこのようなものではないだろうか。様々な分野が融合する空間をつくり、新たなアートを創造するきっかけを生み出す。

滞在型アートプラント

築港・赤レンガ倉庫再生プロジェクト

アートの多様化…活動場所の多様化

自己表現としてのアートは多様化しているが、日本ではイベントとしてのアートが主である。日常生活におけるアートが望まれる。以下に最近のアート事例を紹介する。



公園に椅子25脚を置き、毎日位置を変えることで、日々違った音空間を創り出す作品。鑑賞者がいることで初めて作品となり、自然を作品に取り込み、様々な場所が創出される。
藤本由紀夫—取手アートプロジェクト 2006



人によるインスタレーション。人がミラーボールを扮してひたすら踊り続けている作品。周りには数多くのミラーが置かれている。
浅野幸生—STAY with art 2006 (Hotel T' point)



旧汚水処理施設の壁に付いたこけをけがくことでアートを作成。この場所に残された跡をそのまま活かし、場所性を具体的に表現している。
浅井裕介—取手アートプロジェクト 2006



客室内の布を作品に置き換えたもの。染織りの伝統文様から作成している。この布によって、空間までも作品として構成している。
川野美帆—STAY with art 2006 (Hotel T' point)



廃墟の実験室に残された器具を全てラッピングすることで、記憶を封じ込めようとした作品。同じ質で覆うことで固有名詞をなくす。空間の場所性を最大限に引き出している。
奥村昂子—取手アートプロジェクト 2006



人によるインスタレーション。オリジナルブランドの服を15人の女性が着て、部屋の中にいる。自分が見られているような感じを受ける。部屋の狭さが活かされている作品である。
伊藤正浩—STAY with art 2006 (Hotel T' point)



耳の部分にパイプのついた椅子。ここに座することで、旧汚水処理施設という空間の音をより感じ取ることができる。
藤本由紀夫—取手アートプロジェクト 2006



アートと音楽の融合。壁画家 HRM によるパフォーマンスアート。音楽に合わせ踊りながら自ら制作した壁面に手を加え、それを放水して消すというパフォーマンス。
art-HRM—御堂筋フェスタ 2006



人によるインスタレーション。この会場内の雑音を拾い、それに合わせて人が動きをするパフォーマンスを見る。
岡本高幸—取手アートプロジェクト 2006



広場中に様々なアートが展開されていた。展示、販売、実演がそこらじゅうで行われている。広場という空間だからこそ全体での一体感が出ているような感じである。
— Piazza del Navona (Roma)



自分たちの作品を地域の人と共同で作り上げていく。子供達も交え、一風変わった祭りで地域を歩くことでアートと地域との融合が図られている。
Antenna—取手アートプロジェクト 2006



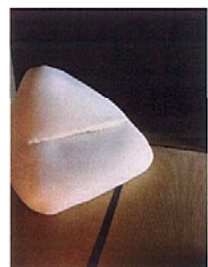
作品を展示するだけでなく、展示終了後オークションが行われた。バーで行われ、数万で取引されたそうである。屋外への作品展示の例。
—御堂筋フェスタ 2006



市民にもアートに接する機会をつくる。自らも参加することで、アートが完成するのを単純に示したものである。それぞれのアーティストにテントのブースが与えられている。
—ART stream riverplace 2006



まちの人も外から来た人も、スケッチブックを片手に皆座り込んで絵を描いている風景。このように生活の一部にアートが取り入れられる空間が必要なのかもしれない。
— Piazza del Campo (Siena)



古民家に置かれた椅子。この民家と対応するような和音によるサウンドが満ちており、それと相まって作品がより強調され、異質感を発している。
三好隆子—取手アートプロジェクト 2006

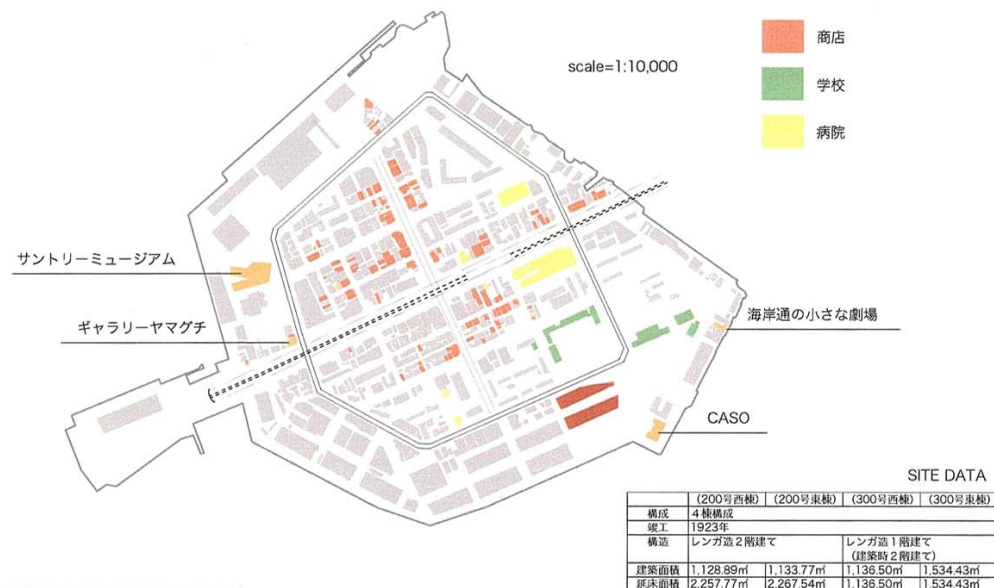
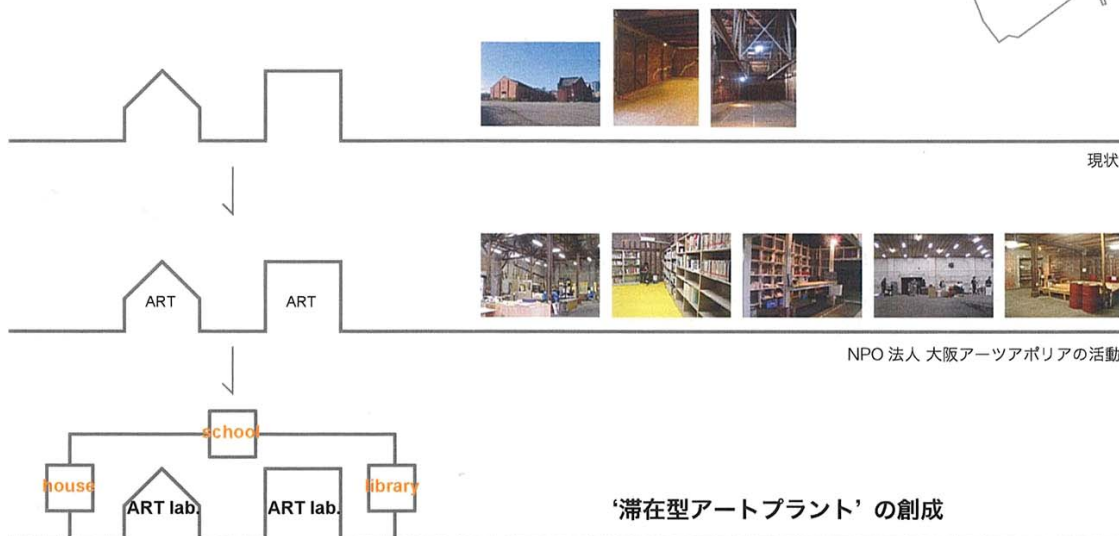


まちづくりにアートが取り入れられた代表例。街路樹や排気筒までも一つの作品となっている。アートはハードと共に、地域活動というソフトも提供しているようだ。
—ファールレ立川

‘滞在型アートプラント’を提案します。

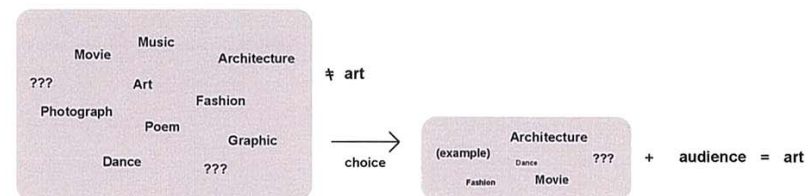
滞在型アートプラントとは…

倉庫内部の独特な空気感、雰囲気をもそのまま残して [ART lab.] として再び利用する。倉庫内を建築的にほとんどいじらないことで、この倉庫空間をより深く感じられ、さまざまなアートの創成、展示、インスタレーションに利用することができる。この [ART lab.] を [+lab. house], [school], [library] で取り囲み、それら全てが一体となった [アート・シティ] を提案する。[アート・シティ] は、人が住み、学び、創成し、活動し、常に人とアートが居る場所である。これらが一体化したものが ‘滞在型アートプラント’ である。



築港の特徴

- ・生活基盤がそろっている…商店街、地下鉄駅、学校、銭湯など
- ・現代芸術文化を発信する施設がある…CASO、サントリーミュージアムなど
- ・集客機能のある施設がある…海遊館、天保山など
- ・居住人口も多い

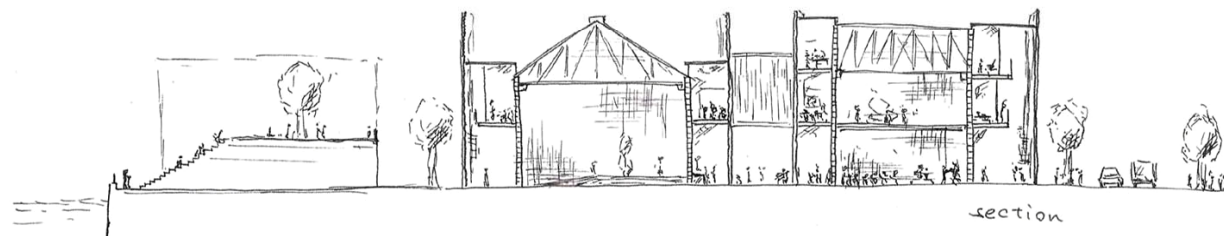


【アート】art

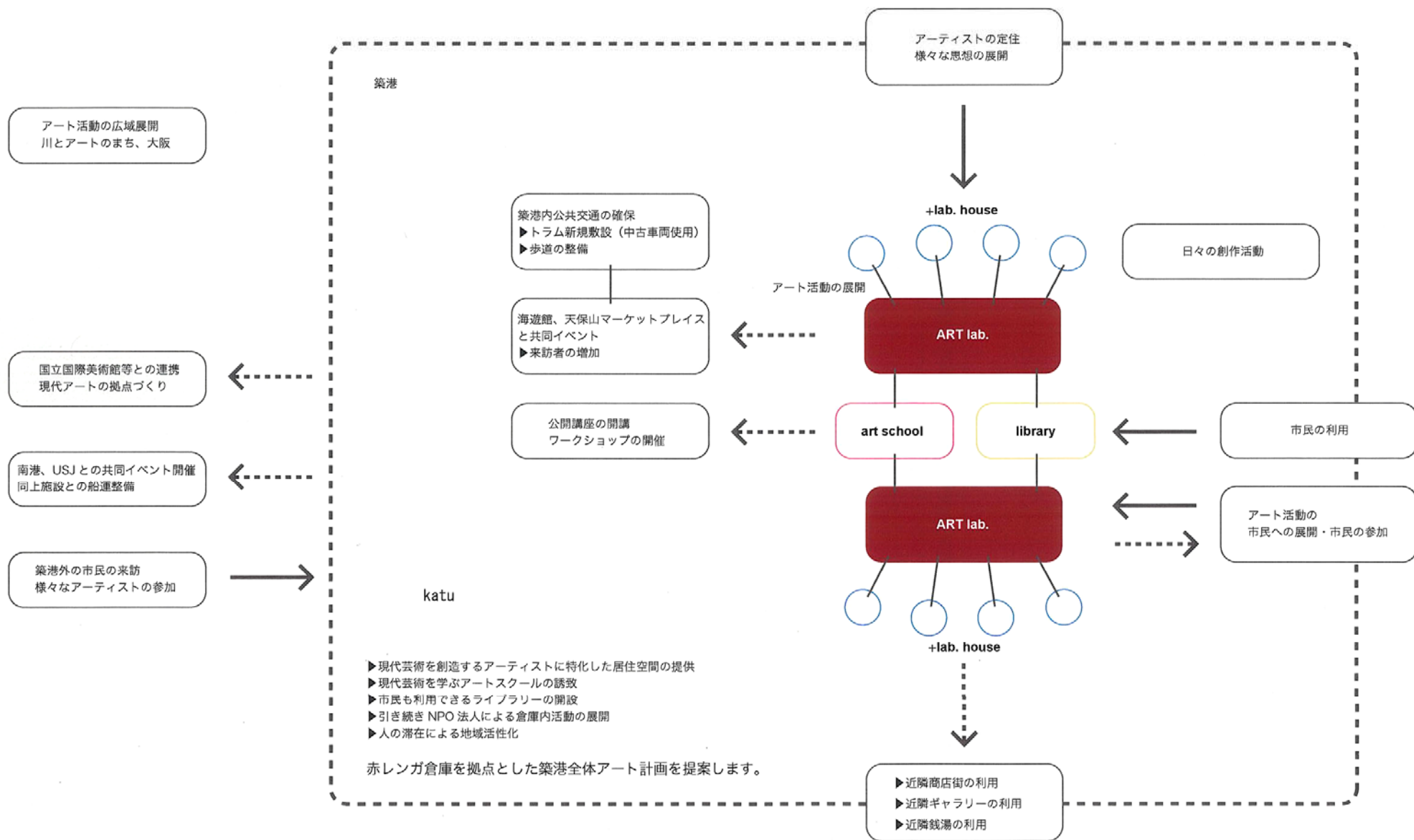
①芸術。美術。技術。②アート紙の略。

【モダンアート】modern art

現代美術。伝統的な様式にとらわれない斬新で奔放な手法の美術。



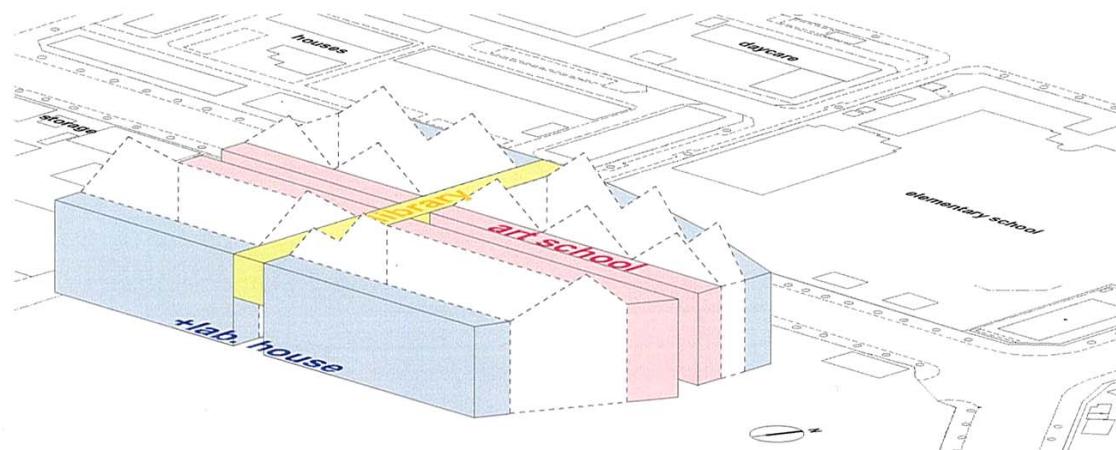
築港を中心としたアート活動の展開を計ります





- ▶ lecture room, studio, craft roomなどからなる
- ▶ それぞれの部屋にはmeeting roomからアクセスする
- ▶ 大阪を代表するアートスクール、IMI schoolが拡張すると仮定(参考資料参照)
- ▶ 総床面積1,480㎡
- ▶ 鉄骨造2階建て(北側は3階建て)

art school



空間構成ダイヤグラム



library

- ▶ アート系雑誌、本、ビデオなどの貯蔵、閲覧
- ▶ 昼間は市民、アートスクールに対して解放する
- ▶ 彩都メディア図書館の増床に伴い新設すると仮定(参考資料参照)
- ▶ 床面積460㎡
- ▶ 鉄骨造2階建て(1階はピロティ)

+lab. house



- ▶ 住宅:houseと小作業場:lab.が一体となった住戸
- ▶ 昼間は解放され、地域の市民も入れる
- ▶ アーティスト向けに賃貸する形をとる
- ▶ 総住戸44戸(約20㎡~約40㎡)
- ▶ 鉄骨造2階建て(北側は3階建て)

一住戸

- ▶ トイレ、風呂は共同
- ▶ lab.部分はガラス張りとし、外来者に見せるような空間とする
- ▶ 2つの部屋(lab,house)のみから構成される

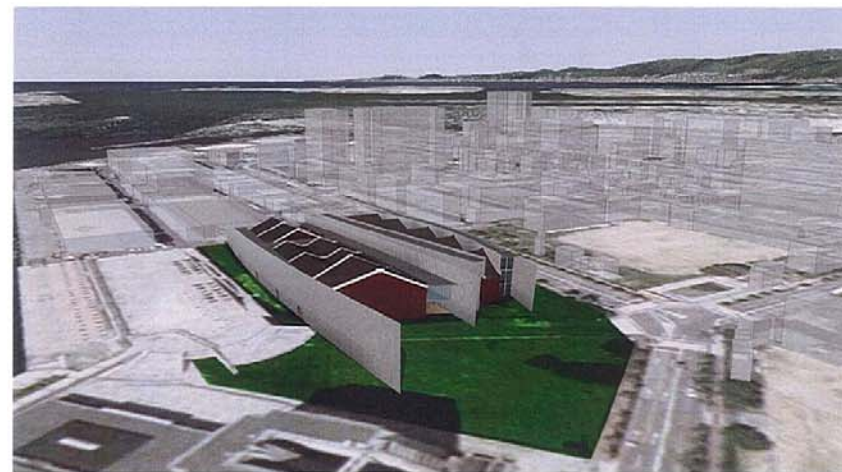
外構計画

- ▶ 周辺は芝生張りとし、CASO、人工地盤と一体化させる
- ▶ 工場のイメージに近づけるため、新築の壁は折板で構成
- ▶ 新築は簡素な構造とし、軽快なイメージとする

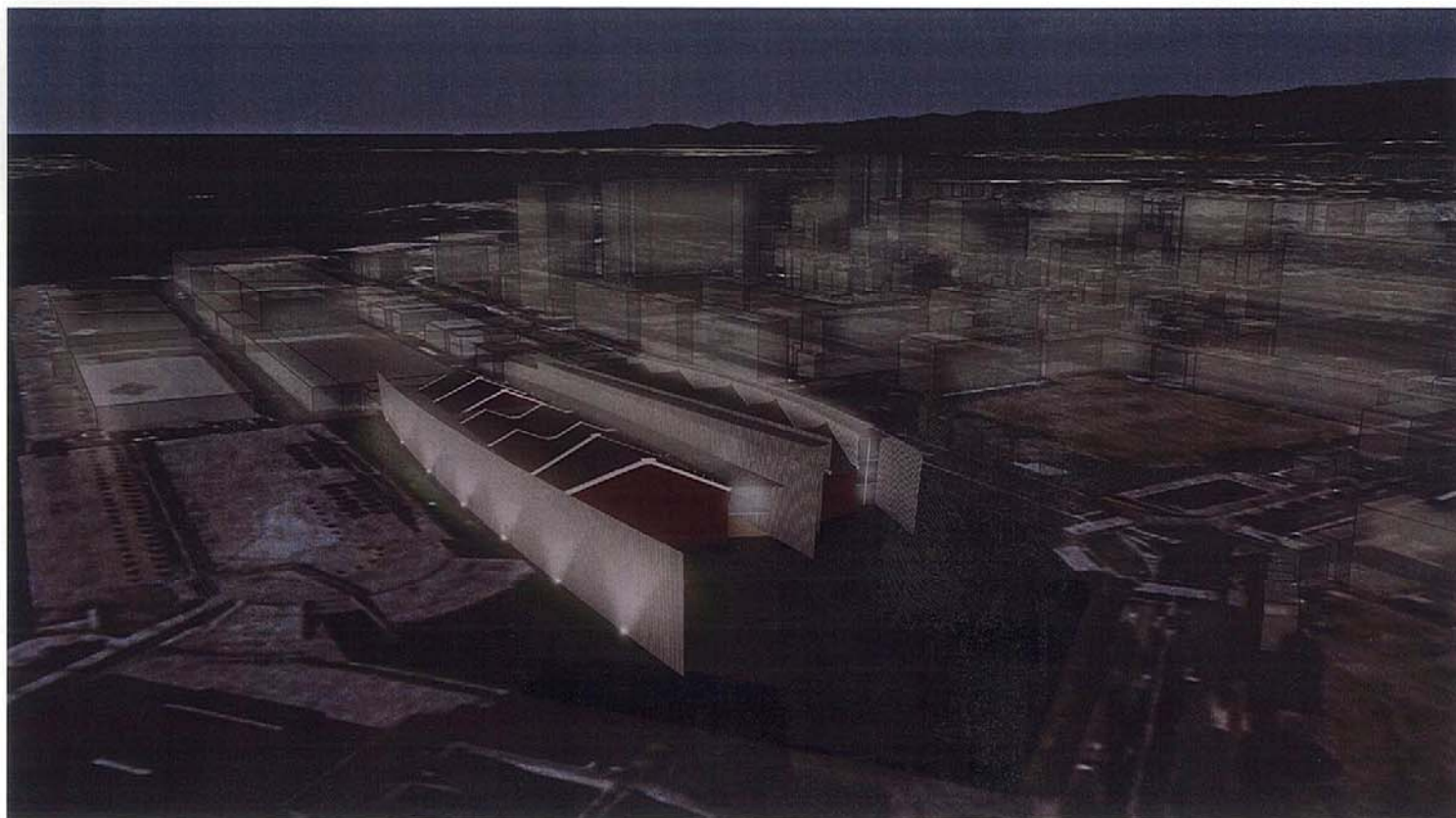


照明効果により夜間も活発な姿を街へ提供します

壁に折板を用いることで、照明を当てると影が規則正しく並び、美しい陰影となる。夜間はその照明効果を利用し、昼間とは違う姿を街へ提供する。

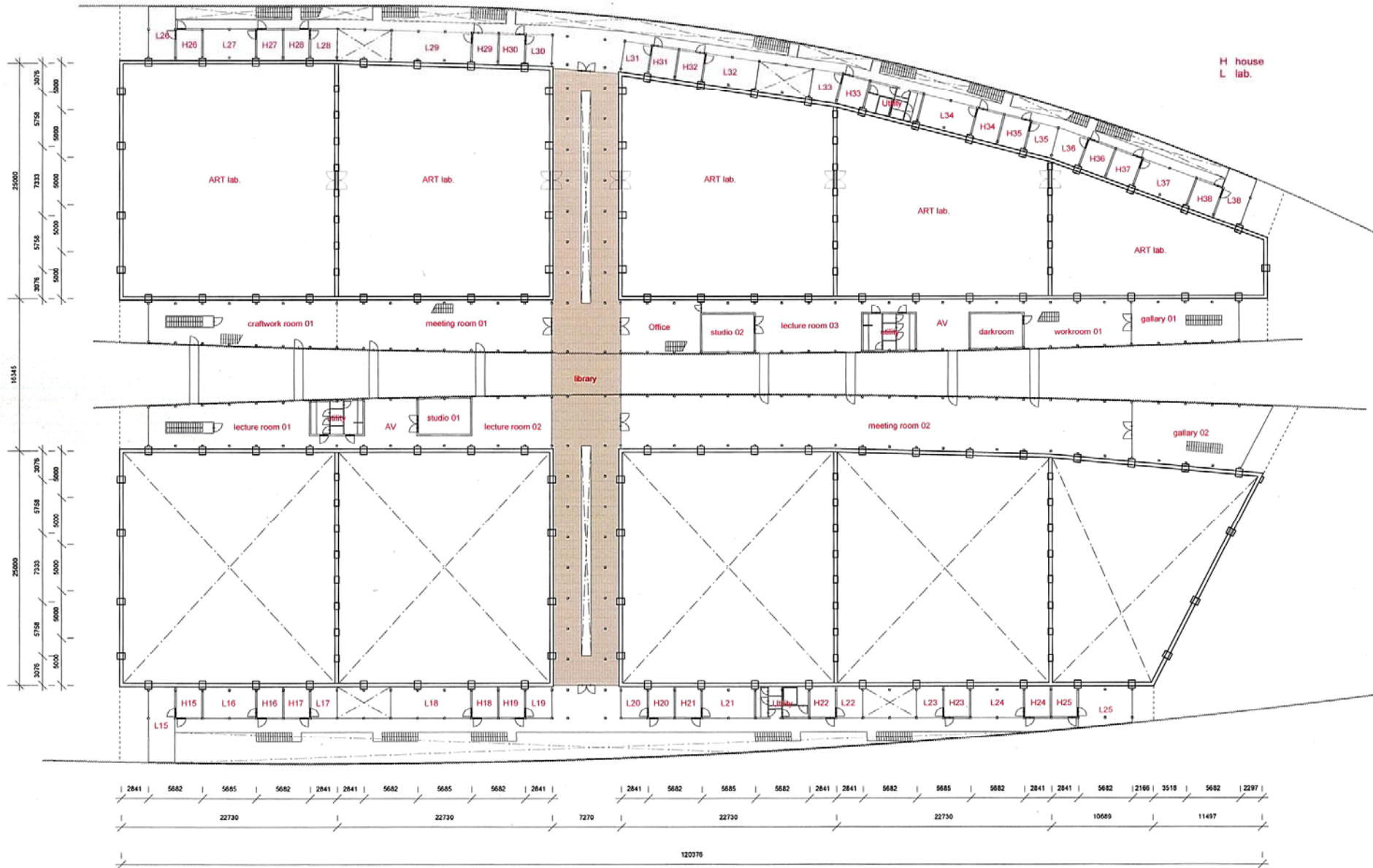


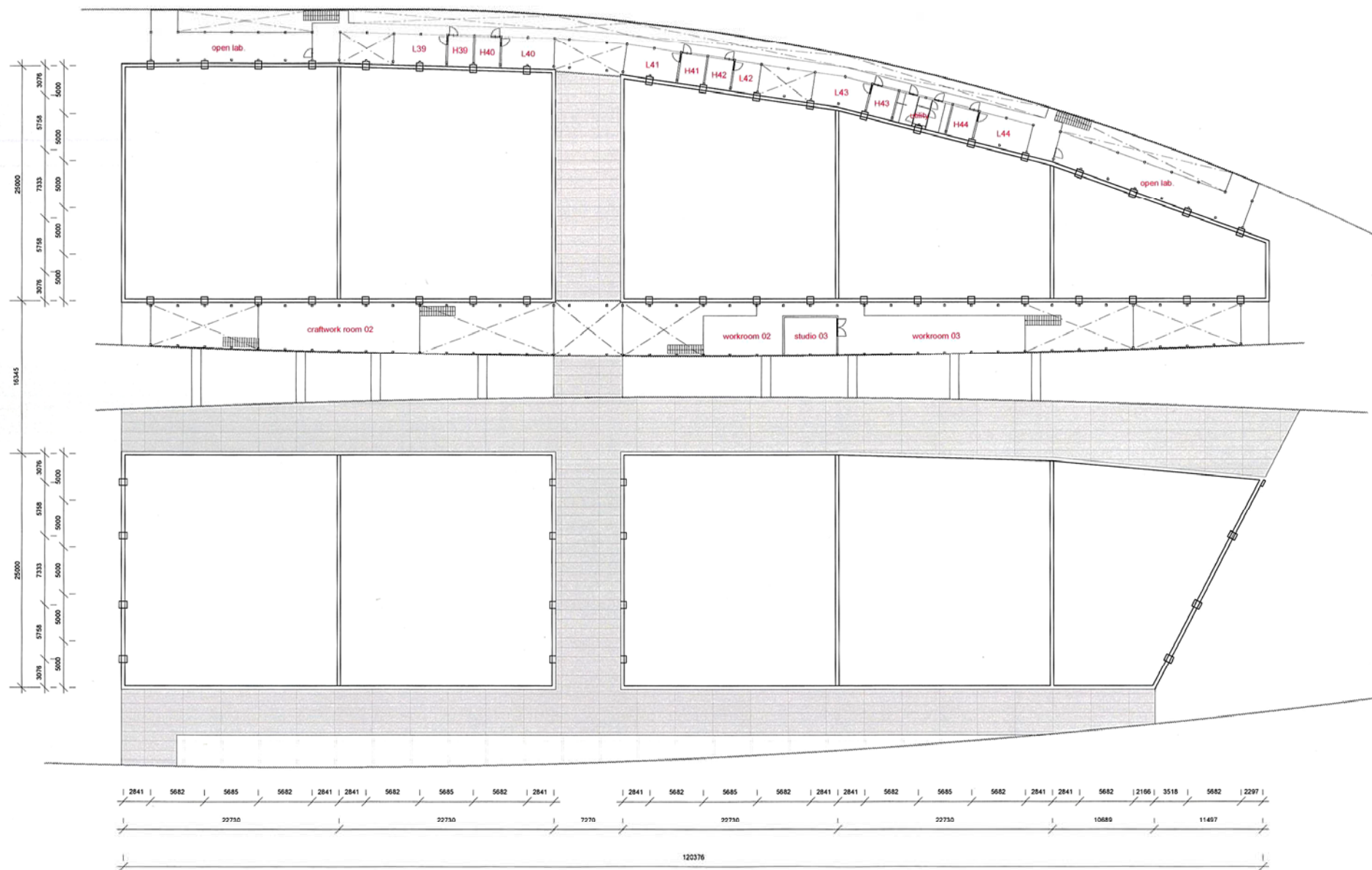
昼間鳥瞰バス

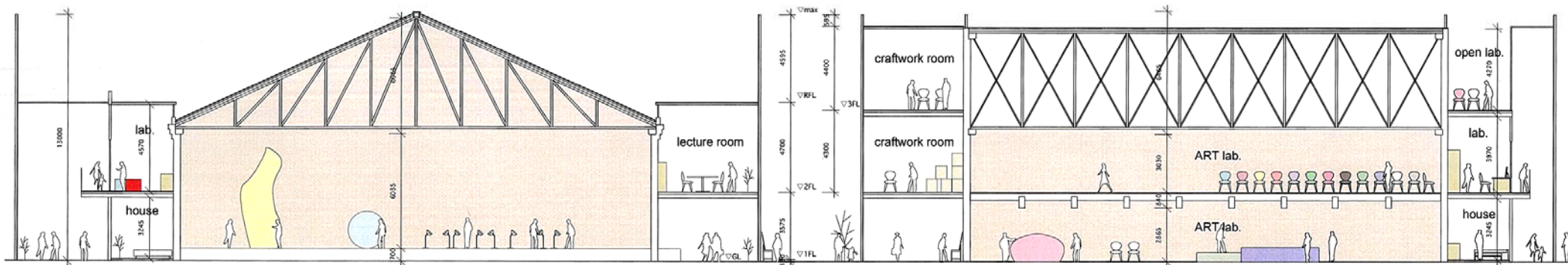


夜間鳥瞰バス

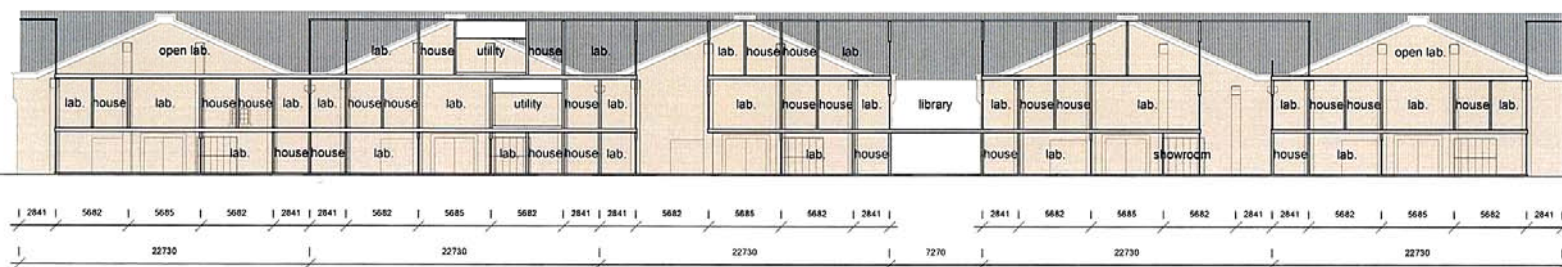
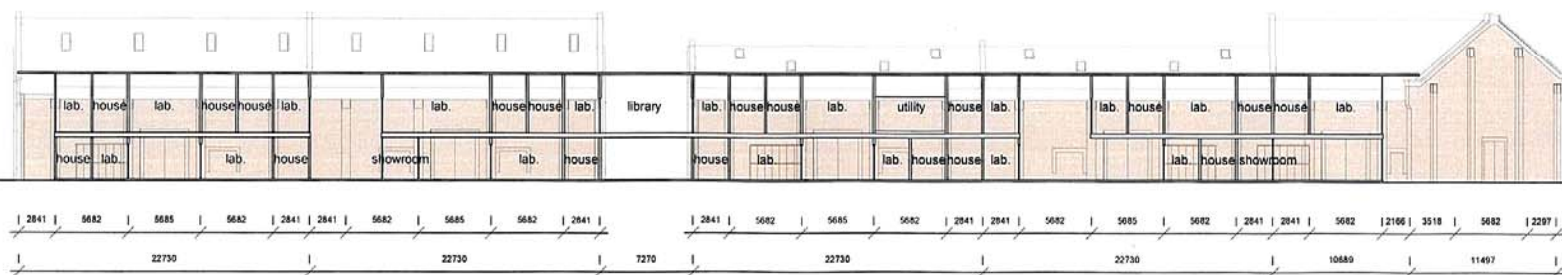


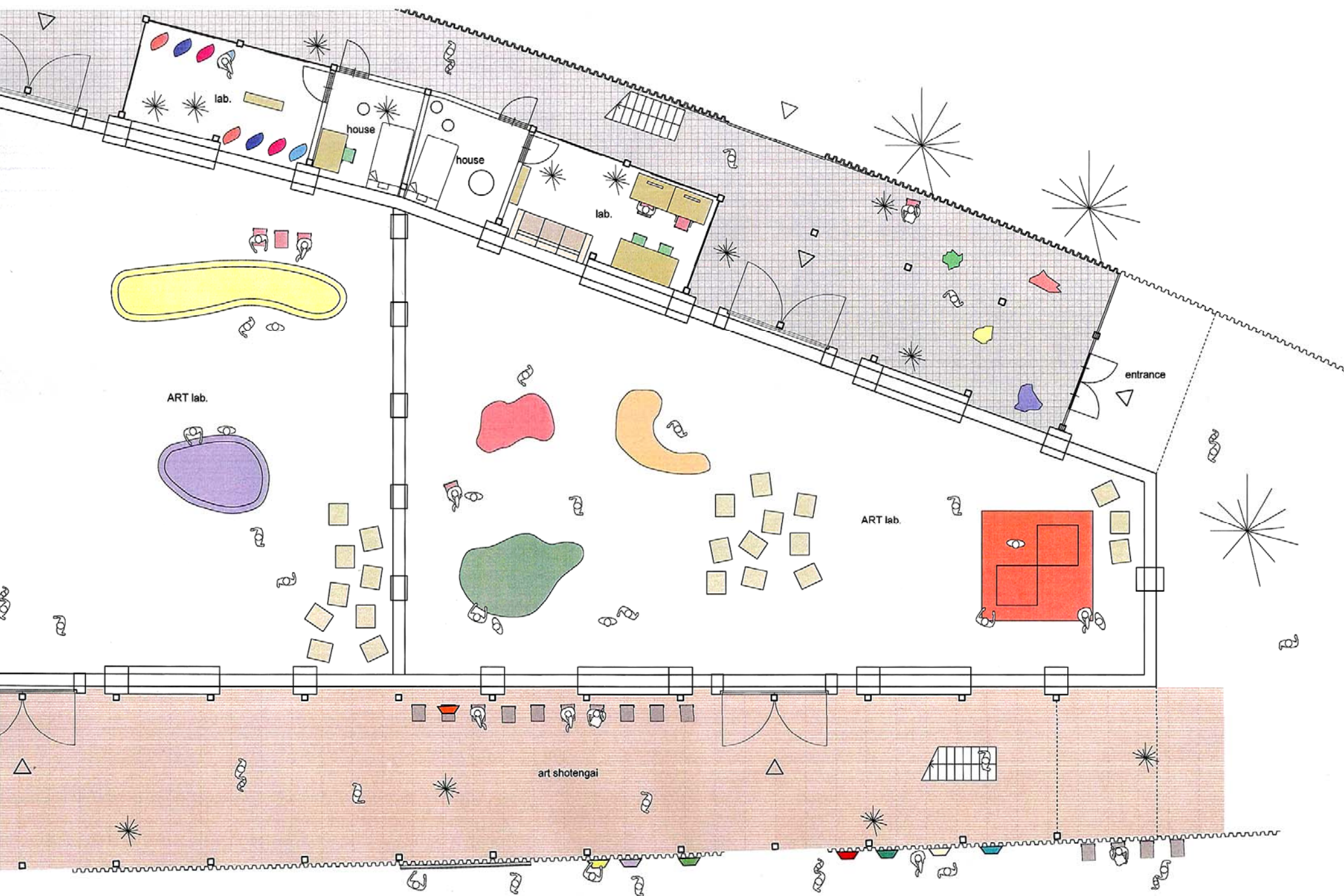


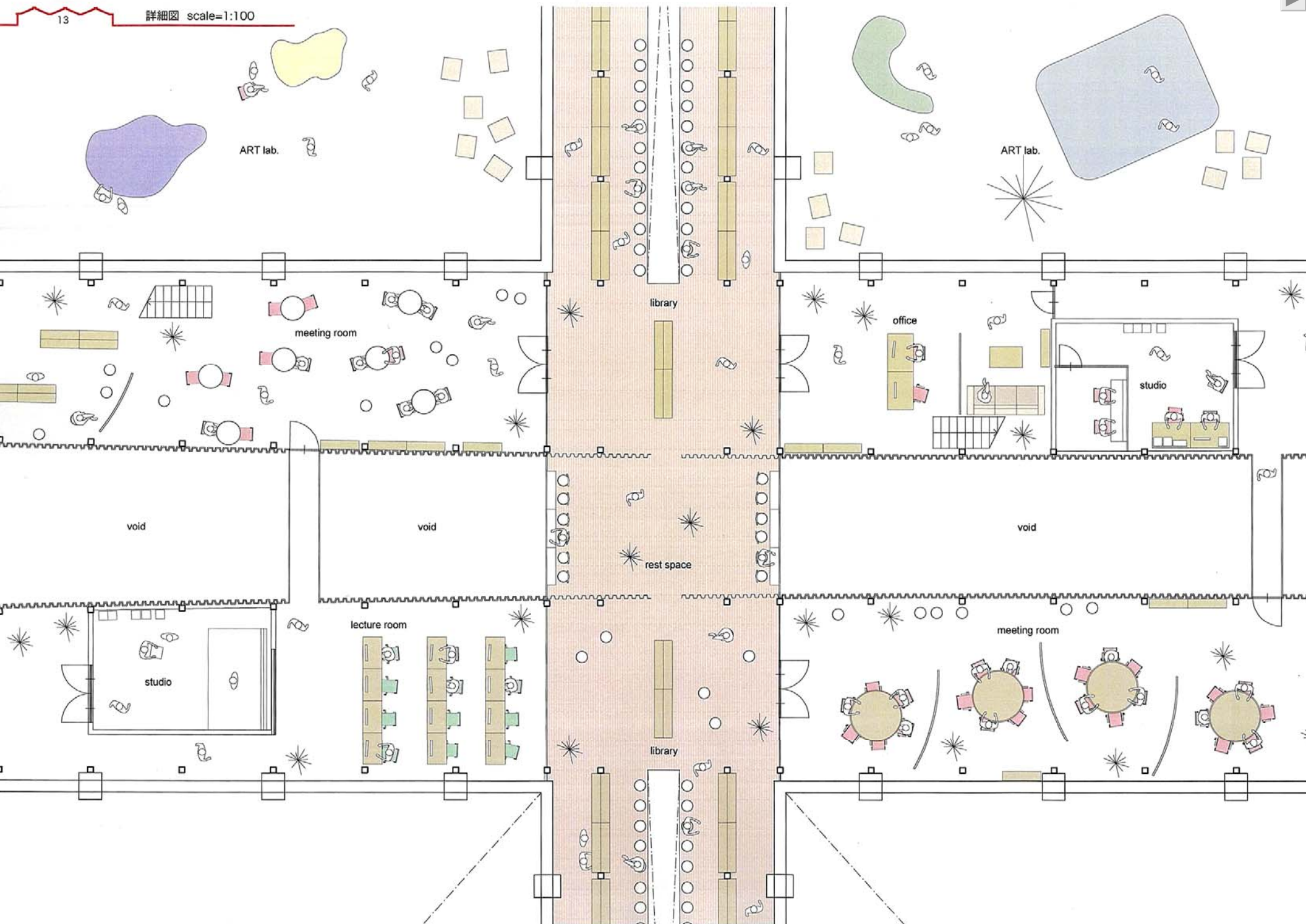




short section scale=1:200

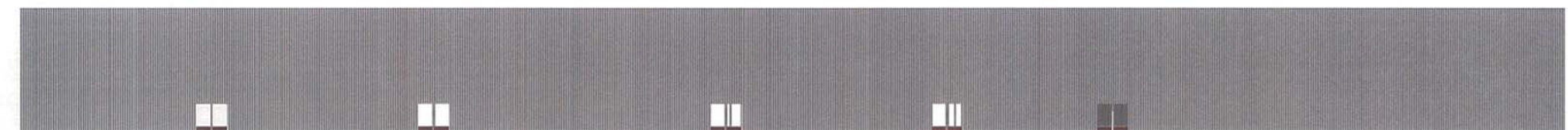
north long section
scale=1:400south long section
scale=1:400



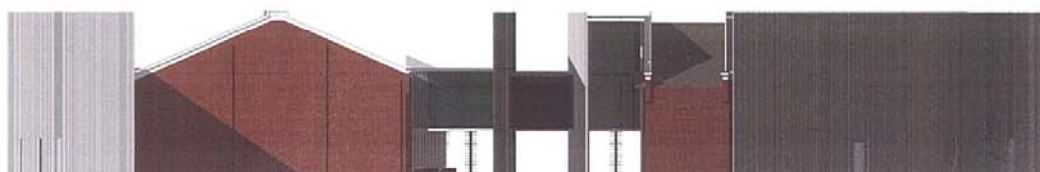




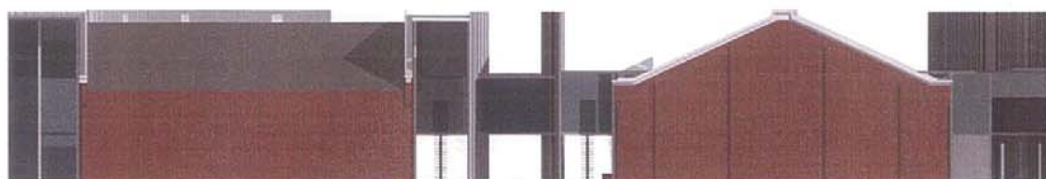
north elevation



south elevation



east elevation



west elevation

折板により工場のようなファサードを街へ提案します。

壁に折板を使用することで、あたかも大きな工場が建っているような印象とする。この工場ではアートが生産されている。また、折板には素材的に方向性があり、赤レンガと同調する素材である。



外部から視線の抜けをつくり、活動を地域へ展開します。

外部、内部、外部…の連続性を一目で見る事ができる。空間的な奥行きを感じられる。
また、中で行われている活動を外からも垣間見る事ができる。



折板とレンガ壁の間に新たな空間を生み出し、活動を助長させます。

新築部は折板とレンガ壁の間に位置し、素材感を有効に活かした空間とする。
昼間は市民にも開放され、アーティストの普段の制作現場を見ることができる。



+lab. house 内部ベース

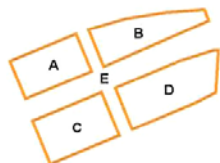


art school より

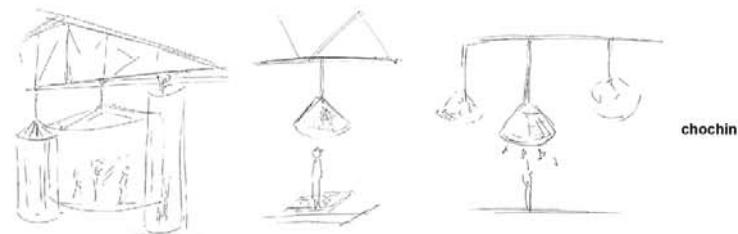
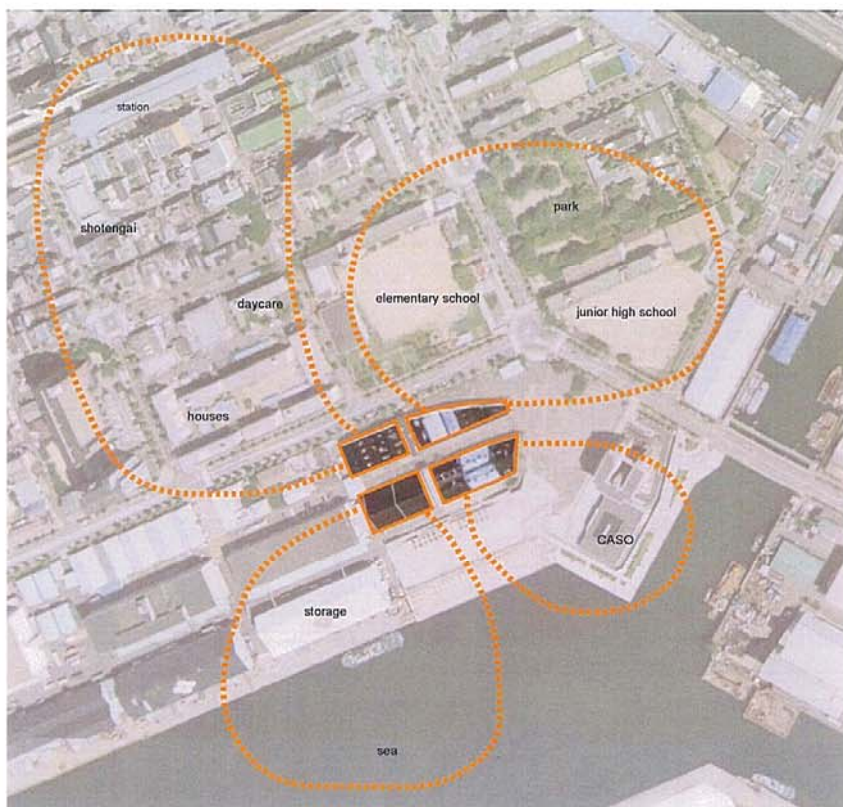
倉庫内部の雰囲気は残し、アート活動の拠点とします。

赤レンガ倉庫を拠点とし、築港全体をアート計画する。

商店街の空き店舗、駅前のちょっとしたスペース、天保山公園、海遊館などでアート企画を行う。拠点となる赤レンガ倉庫群は、4棟から成り立っており、それぞれに違った空間を創出する。それぞれにおいて『建築』とは、『アート』の一部になったりならなかったりする、という立場は共通である。

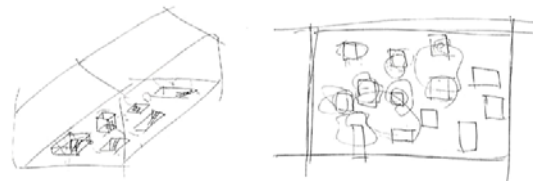


A: Region storage
B: Children storage
C: sea-scape storage
D: CASO+ storage
E: art-shotengai

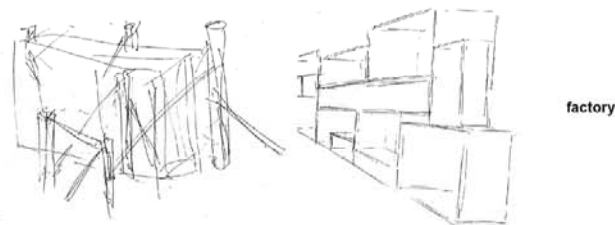


chochin

holes



color wall



factory



woodland

chochin

天井 or 屋根フレームからつり下がったブースでインスタレーションを行う。このつり下がったもののマテリアルは様々で、竹など棒状のもの、メタル、膜、水、紙、色の付いた布、遮光カーテン、アクリル、ガラスなど。素材・大きさを変えることで、音・光が通過したりしなかったり、そのことで赤レンガの空間を取り入れ方を変えることができる。

chochin

床にボックス状に穴を開ける。この中でインスタレーションを行う。大きさはまちまちであり、一つ一つに壁はあるが屋根はない。頭上に倉庫の大きな空間が広がっていて、他となんとなくつながっている。

chochin

海辺に広がる工場のイメージより。四角いボックスと柱状のものからなる。ボックスの中でインスタレーションを行い、そのボックスへのアクセスは柱状ものにおさめる構成となる。ボックスは1方向には抜けており、倉庫の端に立てば全体を見渡することができる。でも、それぞれは区切られているので、様々なアートが展開できる。これらの空間は、倉庫空間によって繋がっている。

chochin

倉庫の屋根を抜き、中にたくさんの木を植える。中にはいると外に出るような感覚であり、木陰や空いたスペースでインスタレーションを行う。自然とのつながりをよりもつことができる空間となる。

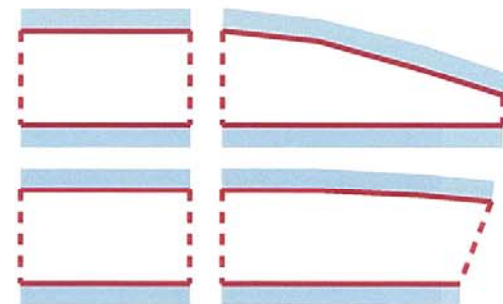
chochin

倉庫の壁を様々な素材で覆う。倉庫だけれども倉庫でないような空間を作り出すことができる。この壁のマテリアルを活かす、活かさないはインスタレーション次第である。

新築する鉄骨構造により、既存躯体を補強します。

まず、既存赤レンガ壁にエポキシを注入し補強する事で、カーテンウォール化する。また、新築部分を鉄骨構造とし、その柱（角形鋼管）に補強した赤レンガ壁をドッキングする。そうすることで、補強するとともに新たな構造体が挿入されることになる。

補強部
既存赤レンガ壁

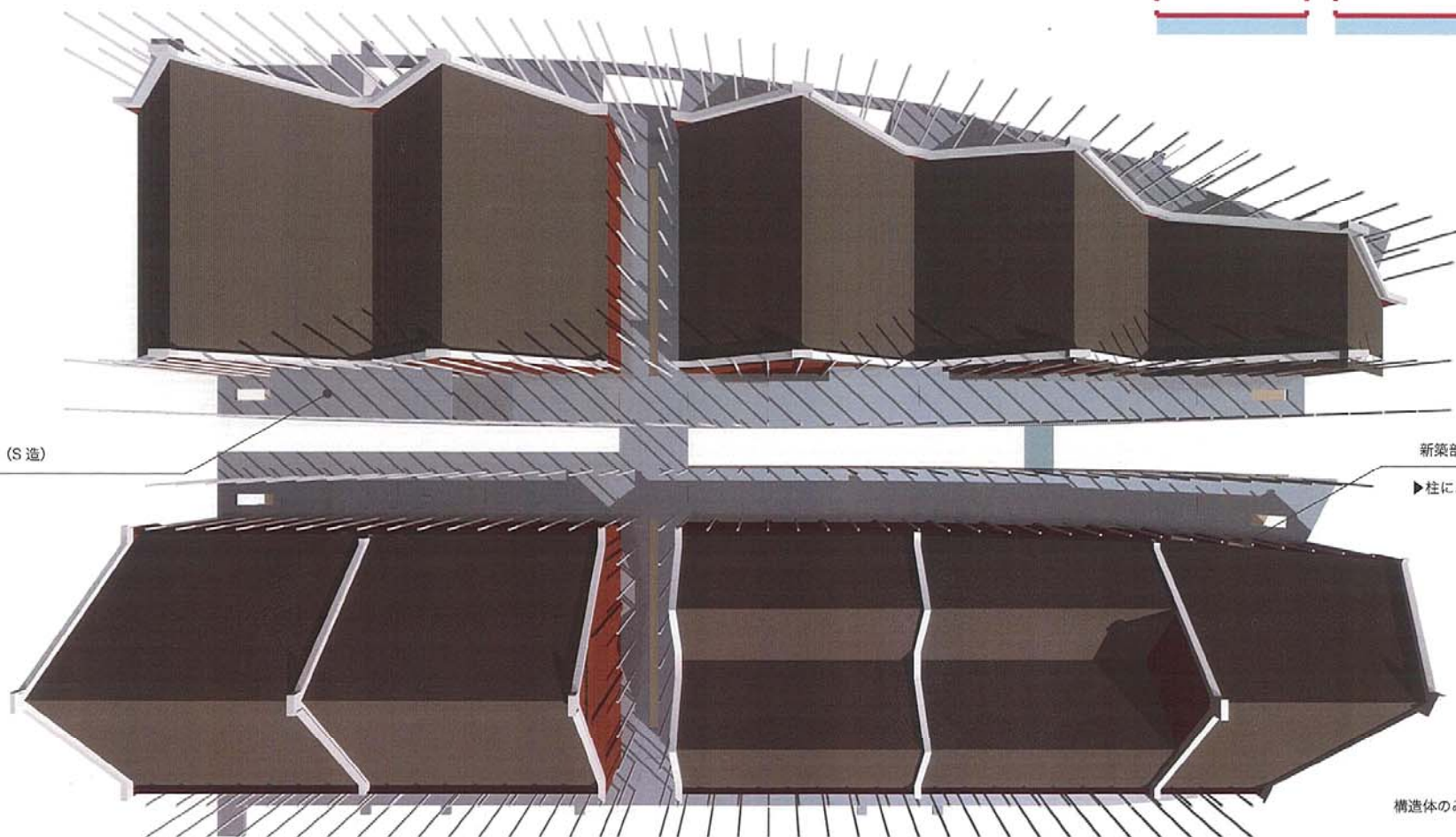


新築部 (S 造)

新築部構造体

▶ 柱によって赤レンガ壁を補強する。

構造体のみ表した図

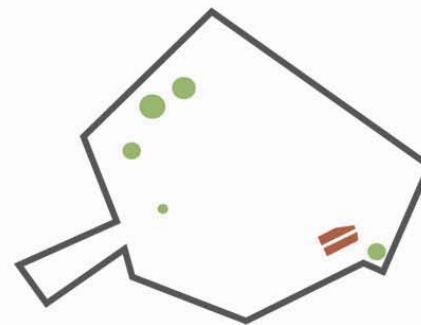
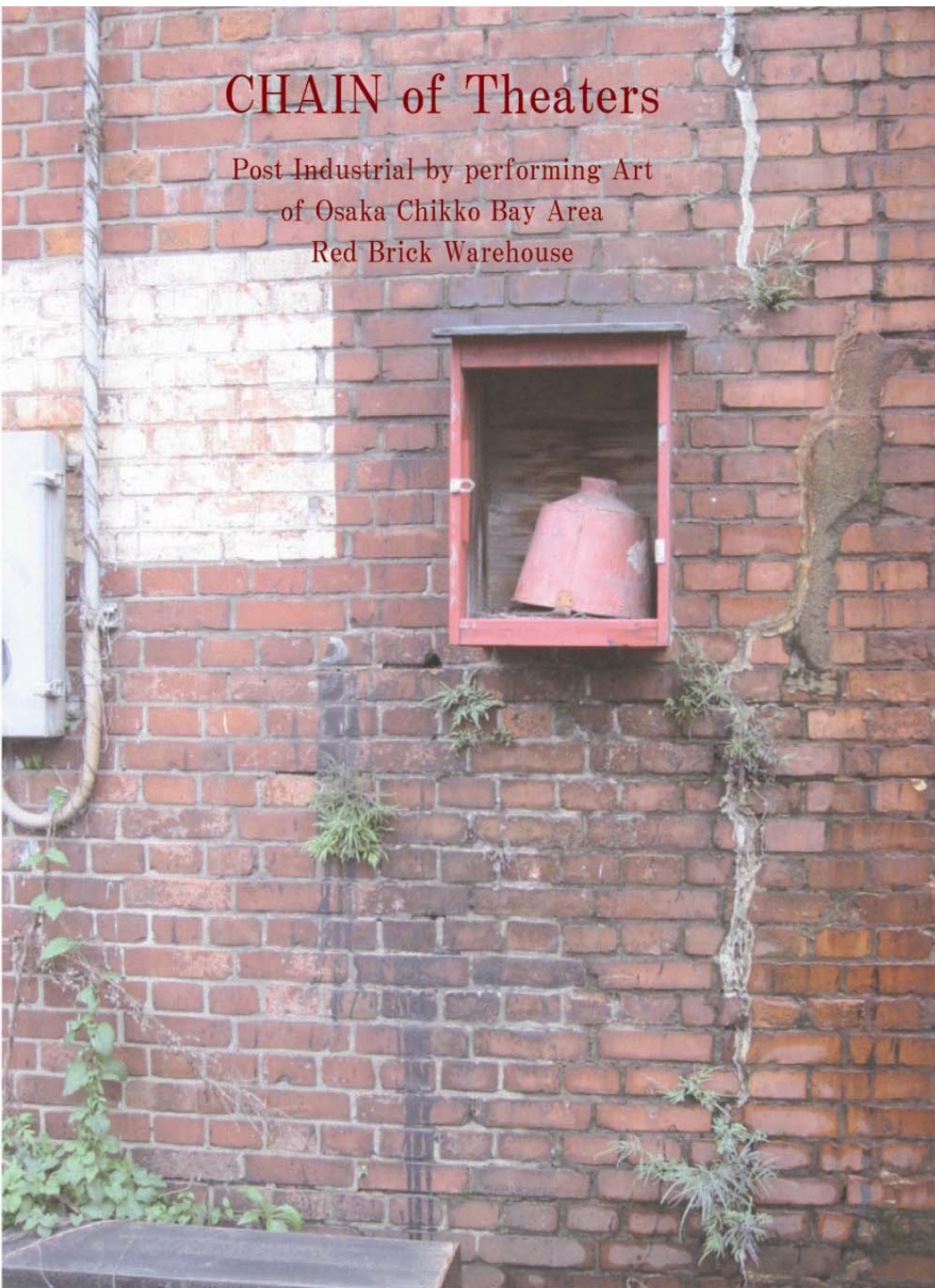


出展
IMI Archives
<http://www.iminet.ac.jp/>



CHAIN of Theaters

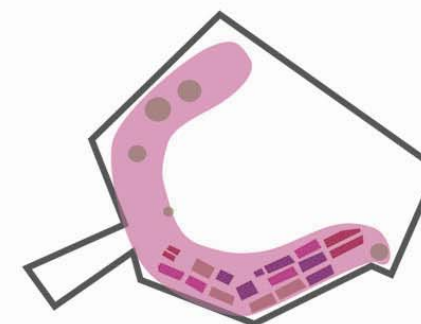
Post Industrial by performing Art
of Osaka Chikko Bay Area
Red Brick Warehouse



レンガ倉庫を劇場として利用する。

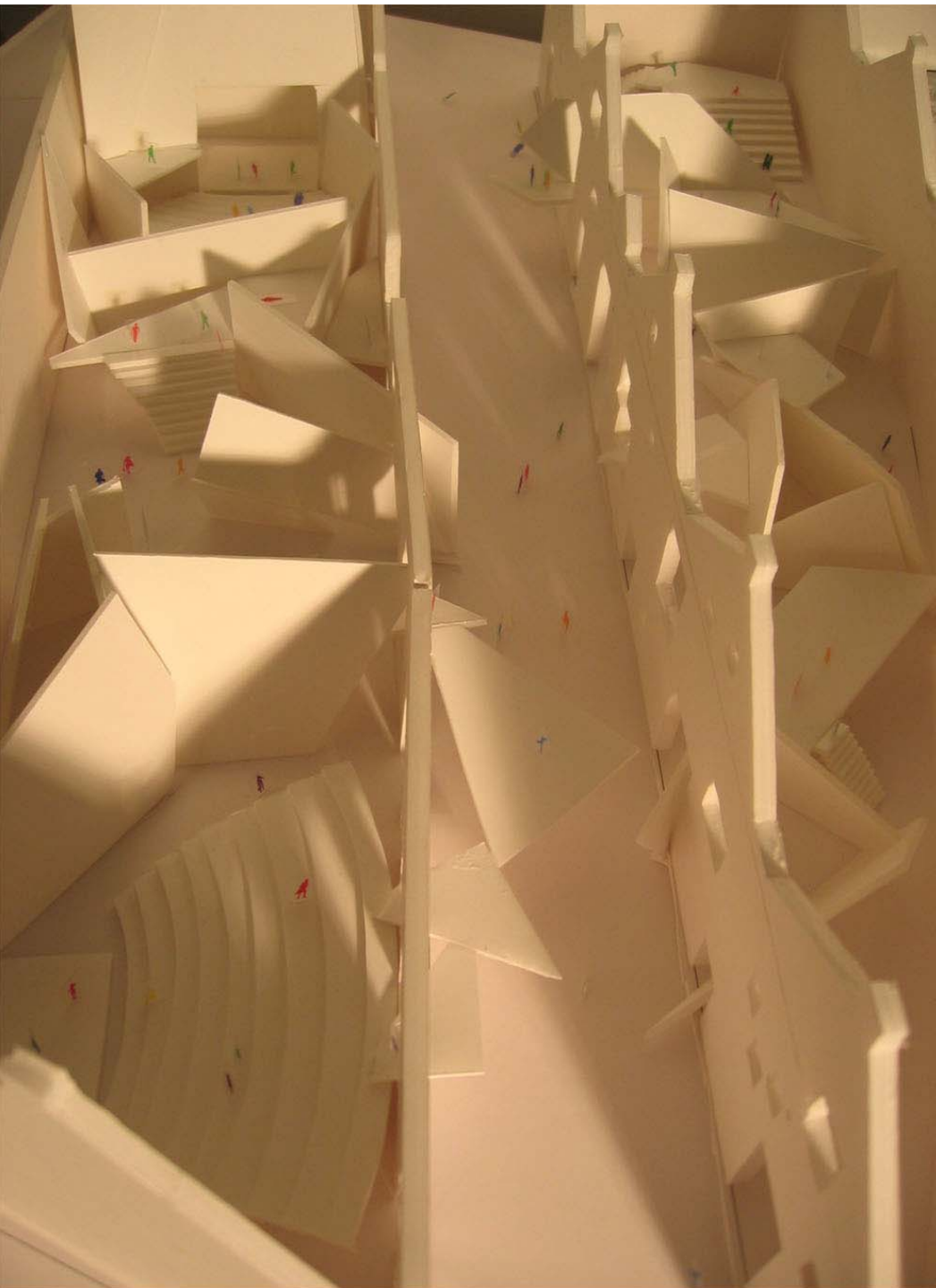


湾岸部に劇場を中心とした街が形成され、劇場のみならず、商業施設や住宅などの機能も混在する。



天保山の観光施設、集客施設との連続性が生まれ、築港の湾岸部としての一体的な発展につながる。

phase diagram



Background

■ 芸術活動の高まり

1999年に赤レンガ倉庫が大阪市に移管されて以来、市は赤レンガ倉庫を、「芸術分野における人材の育成・評価、文化情報の創造・発信の機能強化を図るための施設」と位置づけており、これまでに、「大阪市アーツアボリア事業」や「築港・芸術家村『地球工房』」が展開されてきた。また、赤レンガ倉庫以外にも、築港を芸術の場にしようとする動きがあり、近代建築を生かしたギャラリーの開設や、NPO団体の活動などが行われている。敷地に隣接する土地に、倉庫をコンバージョンしたギャラリー、CASO（Contemporary Art Space Osaka）が建てられたことも、アートによる街づくりを目指したものである。

■ 倉庫群の連続性

赤レンガ倉庫は、築港の南東の端で、海遊館やサントリーミュージアムといった集客施設とはその倉庫群によって結ばれる。倉庫群が一体となって生まれ変わることで、これらの集客施設から赤レンガ倉庫までの人の流れも生まれ、相乗効果も期待できる。築港全体として、アートによる新しい街づくりをいくためには、赤レンガ倉庫から湾岸部に続く倉庫群を芸術空間として生かしていく必要がある。

■ 関西の劇場

2003年に大阪の扇町ミュージアムスクエアが閉館となるなど、関西の劇場閉鎖が相次いだ。しかしその後、倉庫や閉校となった小学校の体育館を利用した小劇場がオープンしたのをはじめ、演劇界を盛り上げようとするさまざまな活動が見られる。

■ トライアウト公演誘致構想

大阪市としての劇場街形成のねらいも見られる。具体的にはブロードウェイ、ウエストエンドのトライアウト公演の誘致構想などもあがっており、行政においても舞台芸術の経済効果への関心が高い。トライアウト公演を行うことにより、演じるだけでなく創作が伴い、独自性が生まれる。また、国内だけでなく海外からの集客も期待でき、湾岸エリアの国際的な発展にもつながる。

（トライアウト公演：ブロードウェイやウエストエンドで上演する前に、地方興行を行い、観客の反応をみる「地方公演」のこと。この公演の期間中、製作チームは毎日観客の反応を見て、真剣に手直しをして行くというかなり緊張感をおびた最終段階の芸術完成作業を行う。）

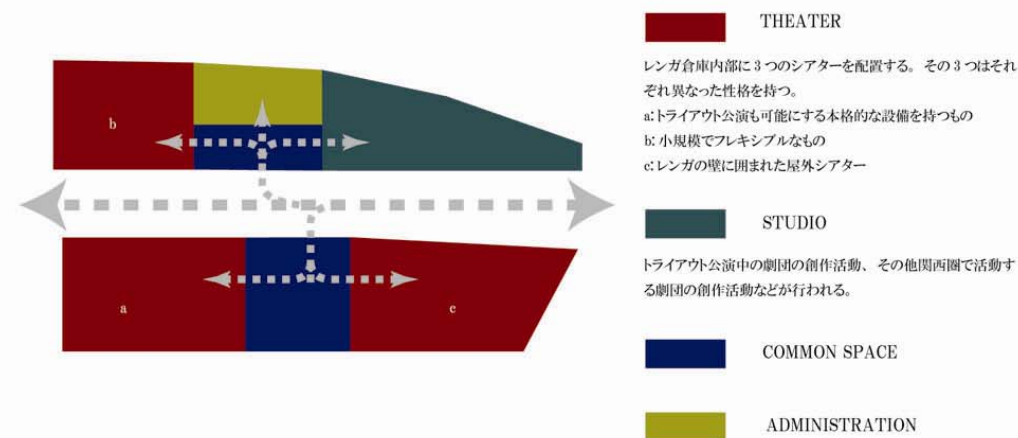
Proposal

連続したつながりを持つ築港の湾岸地区で、劇場街を形成することを目指し、赤レンガ倉庫に劇場、創作活動の場を設け、小劇団の活動を支援するとともに、パカスオーデションの開催、海外ミュージカルのトライアウト公演の誘致を行う。

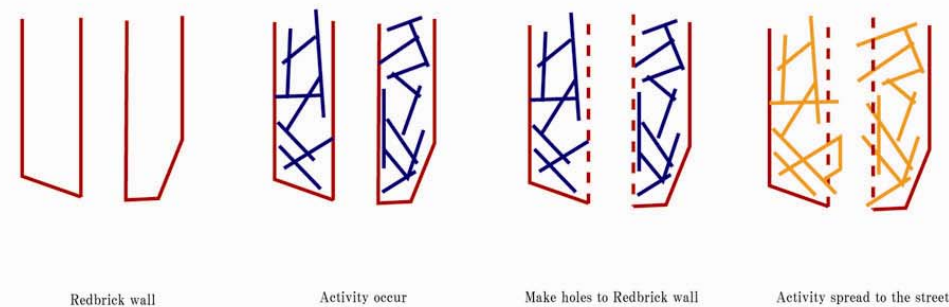


倉庫群をつなぐ中央の道。以前は貨物用の線路として両側の倉庫に貨物を届けてきたこの道だが、現在は、使われなくなった倉庫の間にある空虚な空間となってしまう。この道に両側の空間との関わりあいを持たせることで、長く続くこの道に変化が生まれ、それが劇場街としての発展につながると考えた。

レンガのファサード、特徴的な屋根の形態を保存しつつ、その垂直にそびえ立つ壁に動きを与えようと考えた。道に面したレンガの壁面には、四角い開口がランダムに開けられ、道とレンガ内の視覚的、空間的なつながりを感じさせる。内部空間にはさまざまな形態の壁面が折り重なるようにして空間をつくっており、この壁がレンガ壁面に開けられた開口から見え隠れする。プログラムは、シアター、ミニシアター、アウトドシアターの3つの劇場空間を基本とし、この他にはスタジオ、劇団員達のコミュニティスペース、などが含まれる。



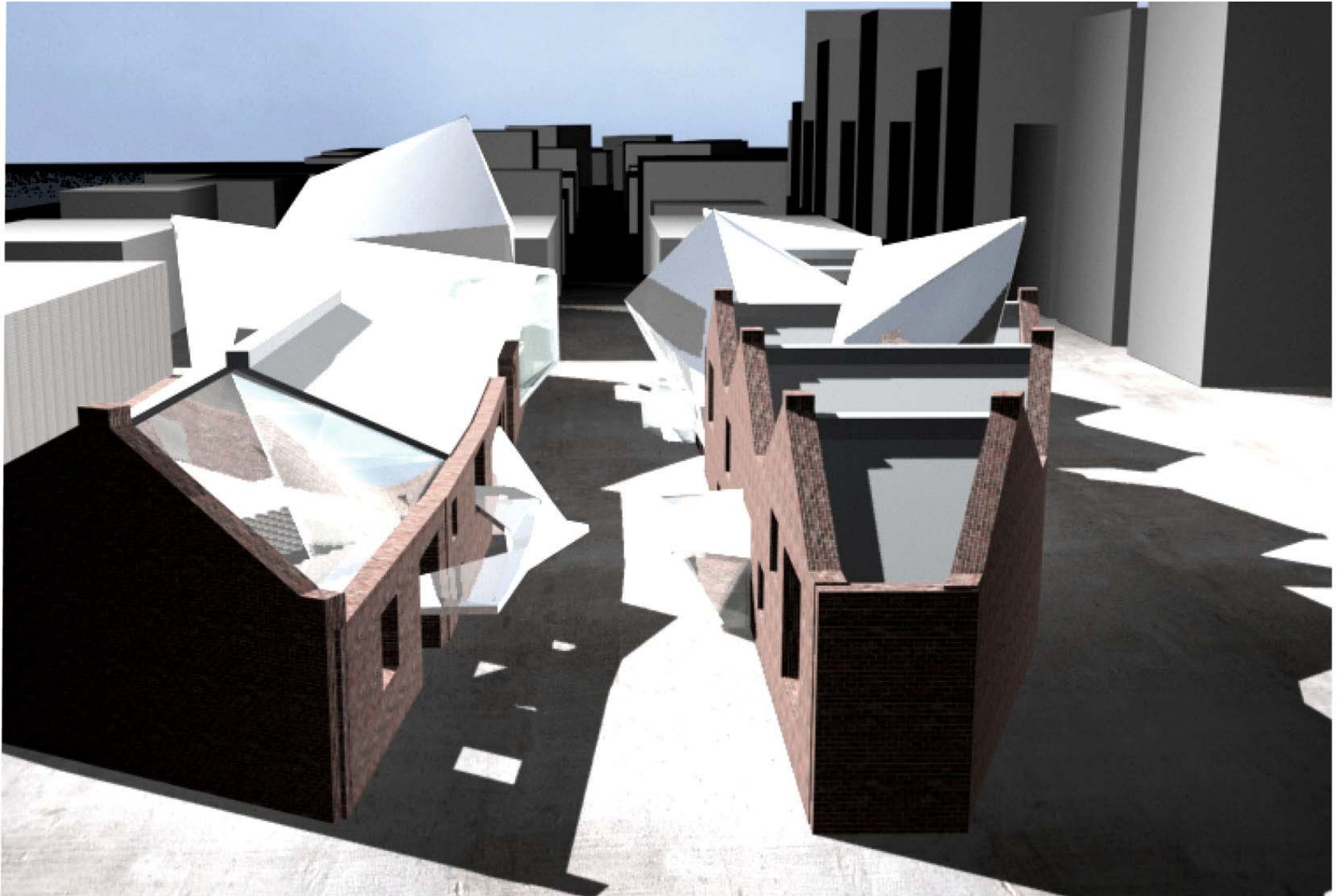
program & circulation



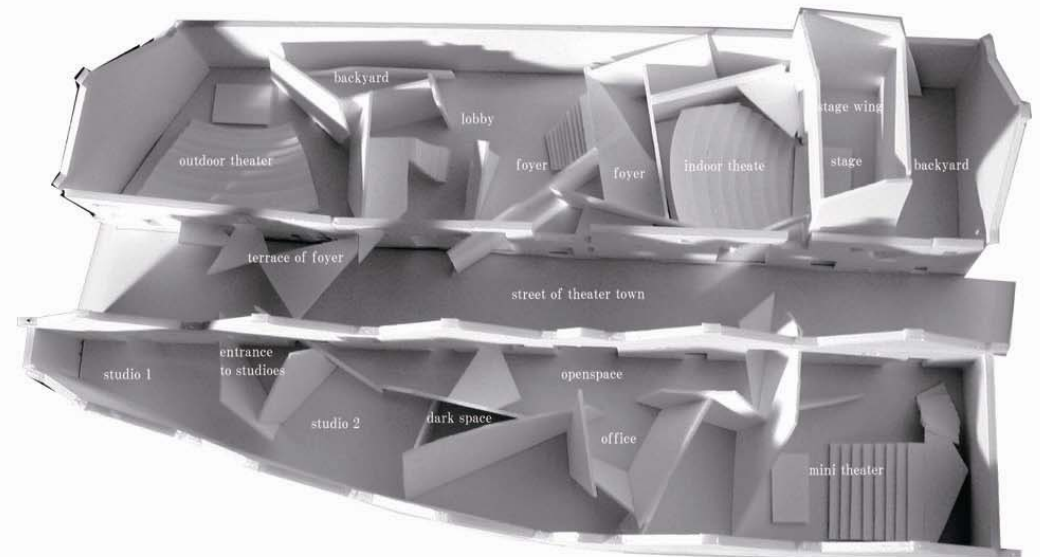
design process diagram



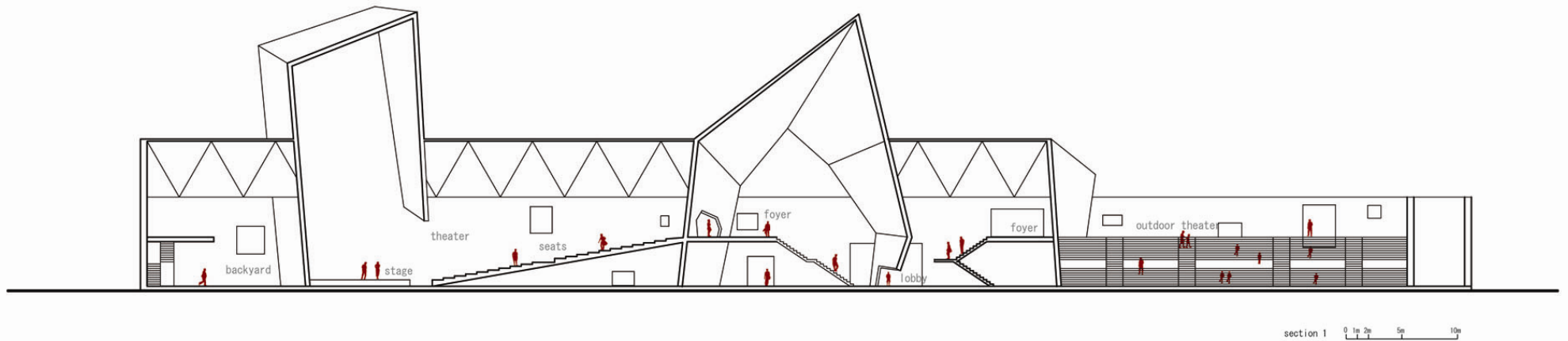
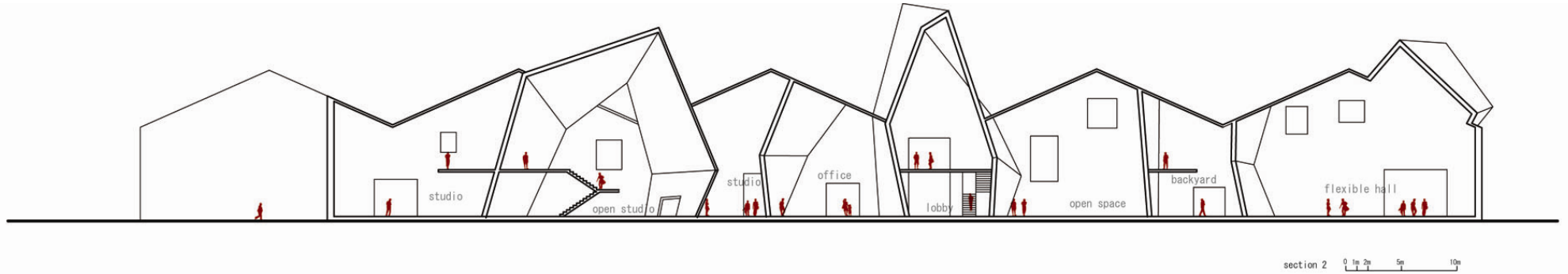
east view



bird's eye view



plan distribution





前置き

大阪港に位置する築港赤煉瓦倉庫は1923年住友倉庫によって建設されたものであるが、1999年に住友倉庫から大阪市に移管され、現在は市の管理下で再生策を検討している状況である。2000年には住友倉庫の一つを改造し、海岸通りギャラリー CASO として日本最大規模の現代美術のためのレンタルスペースを提供している。2003年秋には安藤忠雄氏設計の親水護岸も完成し、防波堤で隔てられていた海まで降りることができるようになった。

少し北には天保山客船ターミナルがあり、外国航路の客船ターミナルとして整備しており、世界一周クルーズの豪華客船などが多数寄港している。また世界最大級の海洋生物の展示館の海遊館、巨大な球状のシアターを内包したサントリーミュージアム、大阪湾を一望できる大観覧車などを含む複合施設がある。それらはいずれも倉庫群を撤去し、1980年代半ばから先行して開発されてきたものである。今この時期、これらの施設と一体となった大きな流れを作るべく築港赤煉瓦倉庫は国際的な芸術の結節点としての出発を掲げる再生が求められている。

大阪港は世界各国の港と結ばれ、年間7000隻の外国船が入港するワールドワイドな国際貿易港であり、サンフランシスコ、ル・アーブル、シャンハイ、プサン、バルパライソ、サイゴンと姉妹港提携を結び、相互の港との交易も盛んである。また高速道路や幹線道路の優れた交通アクセス網で周辺都市と結ばれており、海上、陸上とも可能性を十分に備えた立地である。



Osaka Red Brick Storage Renovation

コンセプト

広い敷地に置かれた、3つの施設。

とても距離があって密度の薄さを感じた。

つながりの不足ということが設計の立脚点だった。

触手のように枝分かれした配置計画によって3つの機能

(現代ギャラリー CASO、赤煉瓦倉庫、親水広場)をつないでいる。

その触手のように伸びた配置計画で副次的に引き起こされることがある。

触手によって切り取られた土地。

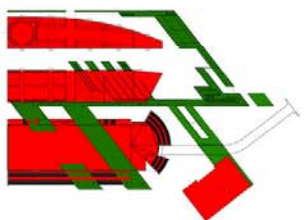
図と地の関係のようにどちらが優位に立つわけでもない建物とランドスケープの関係にしたいと思う。

お金を払って味わわなければならない公共空間ではない。

又、互いの触手が取りあう距離感。

いうなれば人は触手を動かす体液となる。

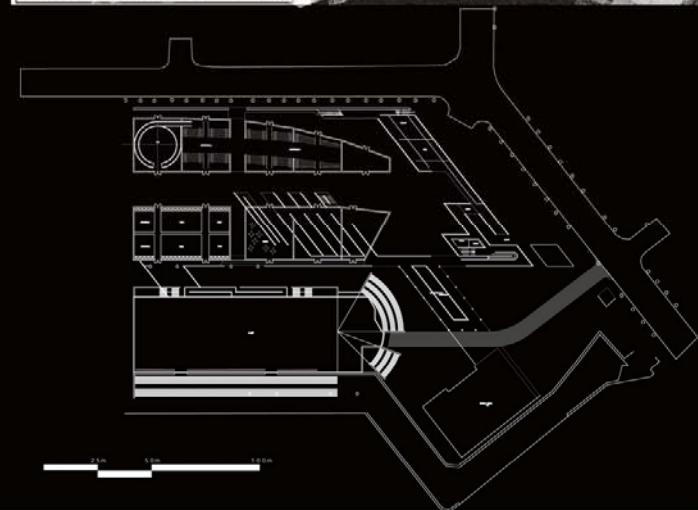
1. 触手による接続形態



2. 触手がまとまりとなって領域を作り出す

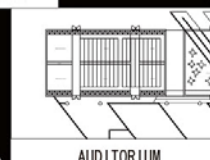
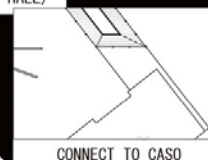
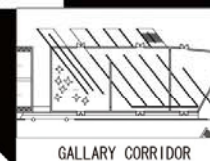
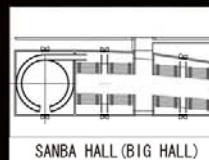
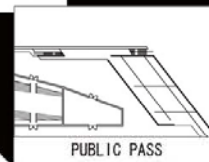
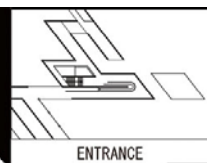
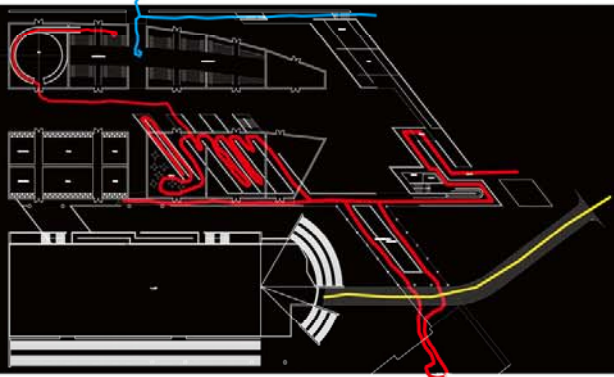
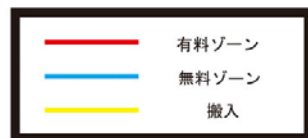


3. 触手によって切り取られた土地

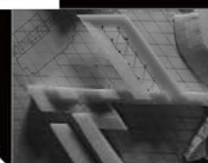
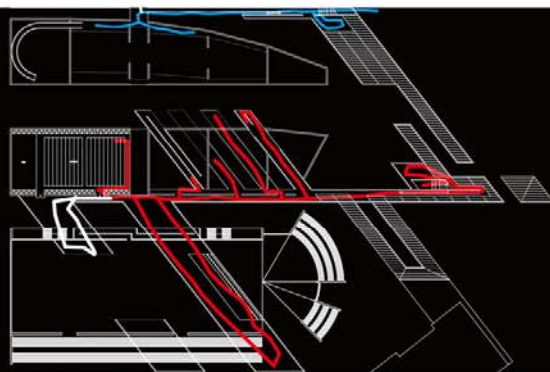


3

1F FLORE ACTIVITY LINE

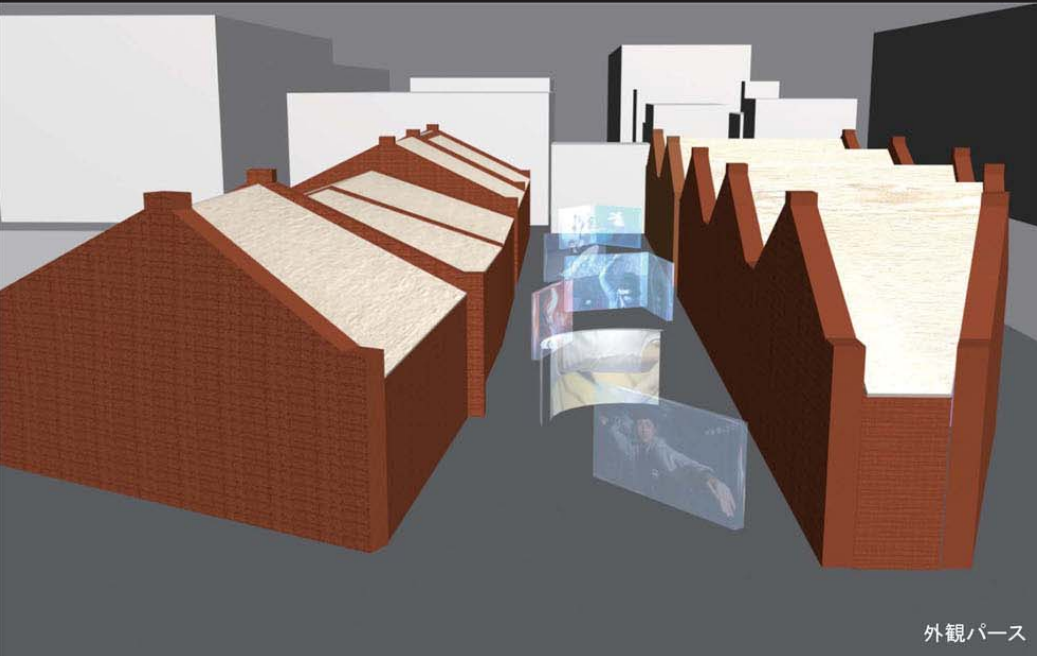


2F FLORE ACTIVITY LINE





DANCE & MUSIC ART SCHOOL『DMAS』



築港赤レンガ倉庫再生プロジェクト

ダンス・ミュージックアートスクール「DMAS」(ダマス)

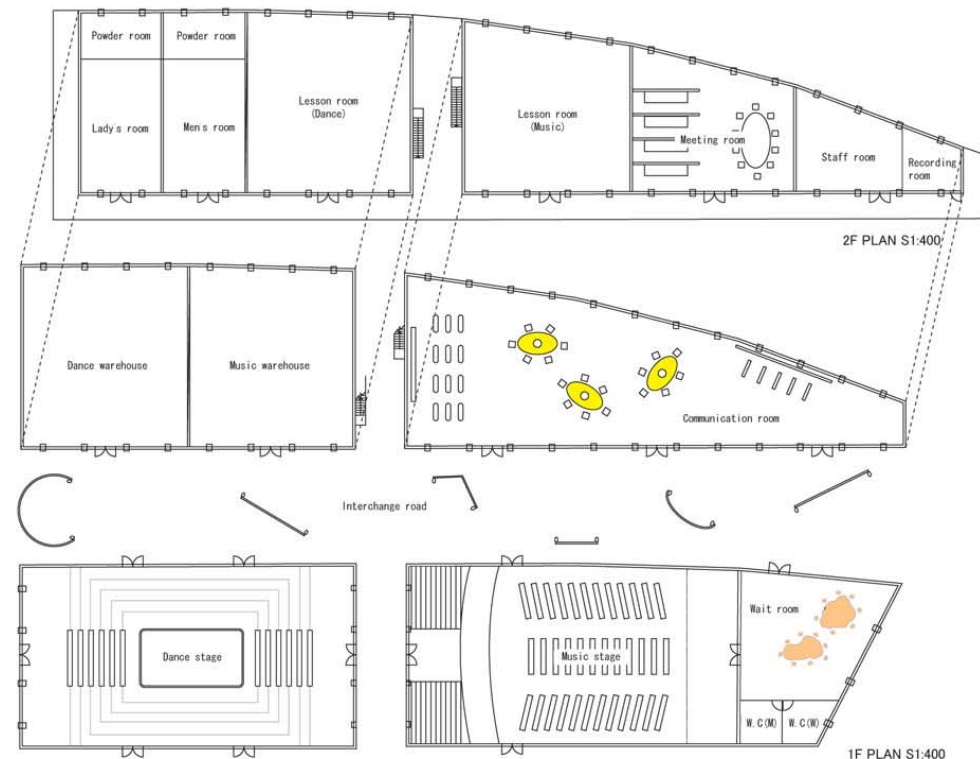
現状(大阪港に創る意味)

今、大阪のダンス市場は、OCATに中心をおいているが、ストリートダンスを行う環境設備が整っていなかったり、場所が狭いため、近隣住民から騒音等で迷惑・被害を受けているので、今後、OCATでストリートダンスを行うことは、おそらく難しいだろう。

海に近い大阪港に誘致することで、梅田やなんば、天王寺などの都心で肩身の狭い環境で、ダンスをするより、ゆとりをもって、自然環境の中でダンスに打ち込めるのではないだろうか。

提案

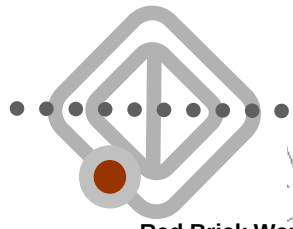
大阪港にストリートダンサーDJを育成するスクールを誘致する。メリットは、南港・OCAT等で開催されているストリートダンス大会のあっせん、繁栄、大会に参加している卵達の教育・練習・プロ育成・産学連携(OCAT・大阪城ホール・大阪ウードー音楽)を行う教育機関。主に、プレイキン・ポッピング・ハウス・ロック・アニメーションなどをストリート感覚で教え合い、学び合いの空間を創る事で、今現在、アメリカや韓国に大幅なレベル差がある日本のダンス市場を大阪港発信でダンス界のレベルの底上げをはかる。





G

補足資料・追加



Red Brick Warehouse District

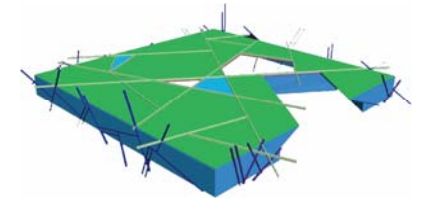
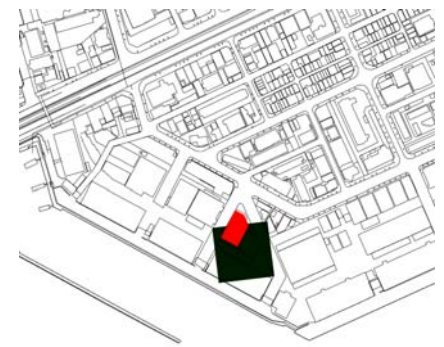


＜西側赤レンガ倉庫の位置づけ＞

海岸通2丁目地区に残る2箇所の赤レンガ倉庫の内、西側の倉庫は規模も小さく一部分しか残っていない。しかし北側の海岸通1丁目地区からCASOのある東側エリアに至る海岸沿いルート上の重要な中継地点になる場所であり、ここには南側海岸通2丁目地区の拠点になる施設が望まれる。

Red Brick Warehouse Conversion

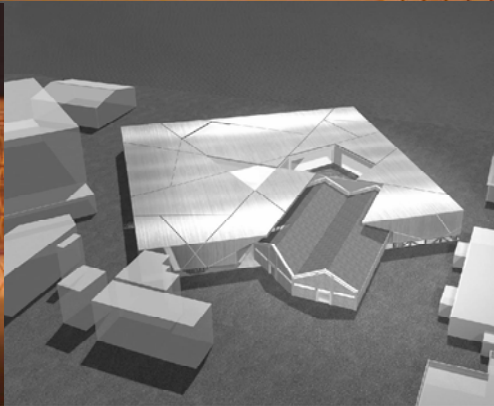
築港の南、湾岸部の倉庫群が立ち並ぶ地域。昔は日本最大の商工業都市大阪の表玄関として、人や貨物が行き交う海陸交通の結節点であったが、産業構造の転換により徐々に勢いを失い、今では辺り一帯殺伐とした物寂しい雰囲気が広がる。倉庫群の北には海遊館やサントリーミュージアム等の集客施設、東には倉庫をコンバージョンしたCASOというギャラリーや大阪市が所有し、芸術活動の場として活用を検討している赤煉瓦倉庫等が存在し、それらをつなぐ倉庫群を有効に使うことで湾岸部に連続したつながり・ストリートを形成し、築港全体を蘇らせる。今回コンバージョンを行った赤レンガ倉庫はこの倉庫群のちょうど中心部にあり、このレンガ倉庫を価値のある産業遺産として見直し、文化施設としてコンバージョンすることで、地域一帯の開発について意識を与えと共に、将来できるであろうストリートのコアと成りえる、人々の集いの場を提供する。

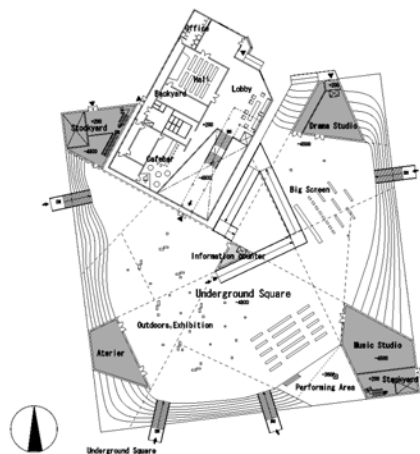


さまざまな角度で交差する道のジオメトリを取り出して変形し、抽象化した金属パネルを直方体の物体に貼り付けることで、目地に独特の形を表現する。外壁の目地模様は平面プランにも活かされる。金属パネルを用いたのは赤レンガとあえてまったく異なる素材を用いて、コントラストを強く表現するためである。

この直方体にはレンガ倉庫が守られるようにして挿入されている。高さ1500mm浮いており、ストリートから歩いてきた人々からは、ぎりぎり目線が通るか、通らないレベルになっており、側面のガラス・下部の空きからレンガ倉庫がちらちら見えることで、赤レンガ倉庫の価値、存在を際立たせる。またMuseumの巡回途中で中庭からレンガ倉庫を通過し、中庭では周辺地域の殺伐とした雰囲気とは違う暖かい雰囲気をかもしだす。

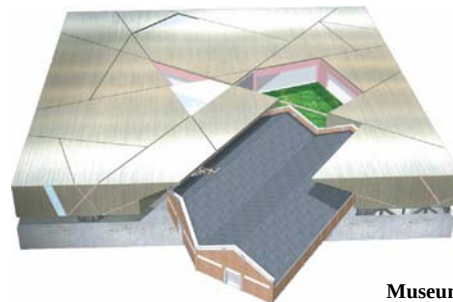
地階部へは、レンガ倉庫内、及び側面の切れ込みから入り込むようになっており側面から入るときは洞窟に入っていくような感覚を覚える。





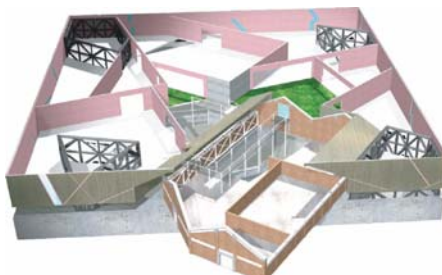
Underground Square

地下空間は、コアである柱部分に音楽・美術・映像の創作工房が入っており、広場にはそれぞれの発表の場が設けられている。半外部空間として自由に出入りでき、芸術活動の拠点、地域文化の拠点、賑わいの拠点として何度も人を呼び込み、子供や一般市民の参加を促し、くつろげる場として提供する。また、上階のMuseumのエントランスが中央にありMuseumを訪れる人に、芸術活動に触れてもらう機会をつくる。



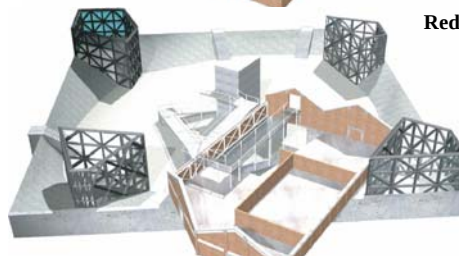
Museum

Courtyard
First Exhibition
Second Exhibition
Third Exhibition
Fourth Exhibition
Restaurant



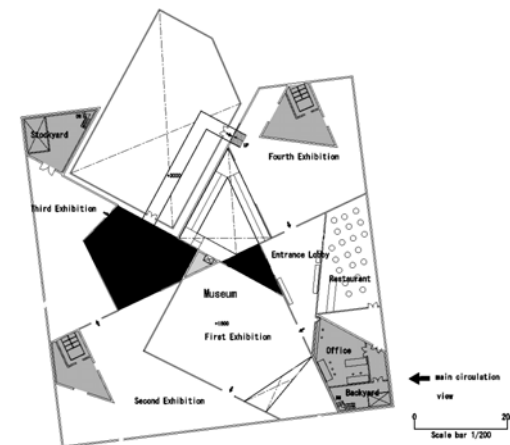
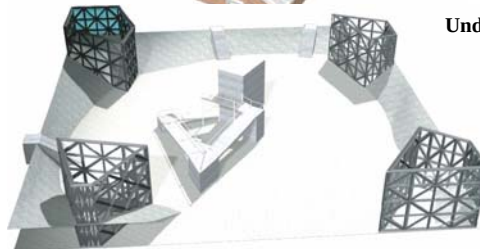
Red Brick Warehouse

Lobby
office
Hall
Cafe bar



Underground Square

core-Drama Studio-big screen
Atelier-outdoors exhibition
Music Studio-performing area
stockyard



Museum

Underground Squareの動的な空間からMuseumの静的な空間へと導入するにあたり長いスロープを設けることで、利用者の気持ちを落ち着かせ、また半地下空間からの開放感を与えるためにエントランス直前に中庭を設けた。

展示空間は外観のジオメトリによってFirst-Forth Exhibitionに中庭を囲むように分割されており、その中庭を中心とし、時計回りに巡回する。その際中庭からレンガ倉庫に侵入し、再びエントランスへ戻ることでレンガ倉庫に意識を向けさせ、産業遺産として、またまちのストックとしての価値を再認識させる。

Museumは4つの展示室から成り立っており、Underground Squareで創造された優秀作品を展示するスペースが3箇所。残りの1つを南港の歴史を解説する常設展示とする。4つの展示空間は中庭を囲んでいるため、部屋の使用方法によってフレキシブルに動線を変化させることが可能。南港の歴史解説の場を設けたのは、この地域の歴史を知ってもらうことが、地域の、ストリートのコアとしてこの施設が存在するために必須であると考えたからである。



VaMP



編集 阿部 浩和
著者 豊田 哲平
稲田 真善
串本 佑介
三好 史晃
八木 章徳
櫛間 勝義
山本 和樹

授業担当 阿部 浩和
小浦 久子
松原 茂樹
大谷 博三
服部 邦比古

大阪大学 工学研究科 地球総合工学専攻 建築工学コース
(協力 大阪市立デザイン教育研究所)

2007. 3. 14

第2版 207. 5. 10

Author

